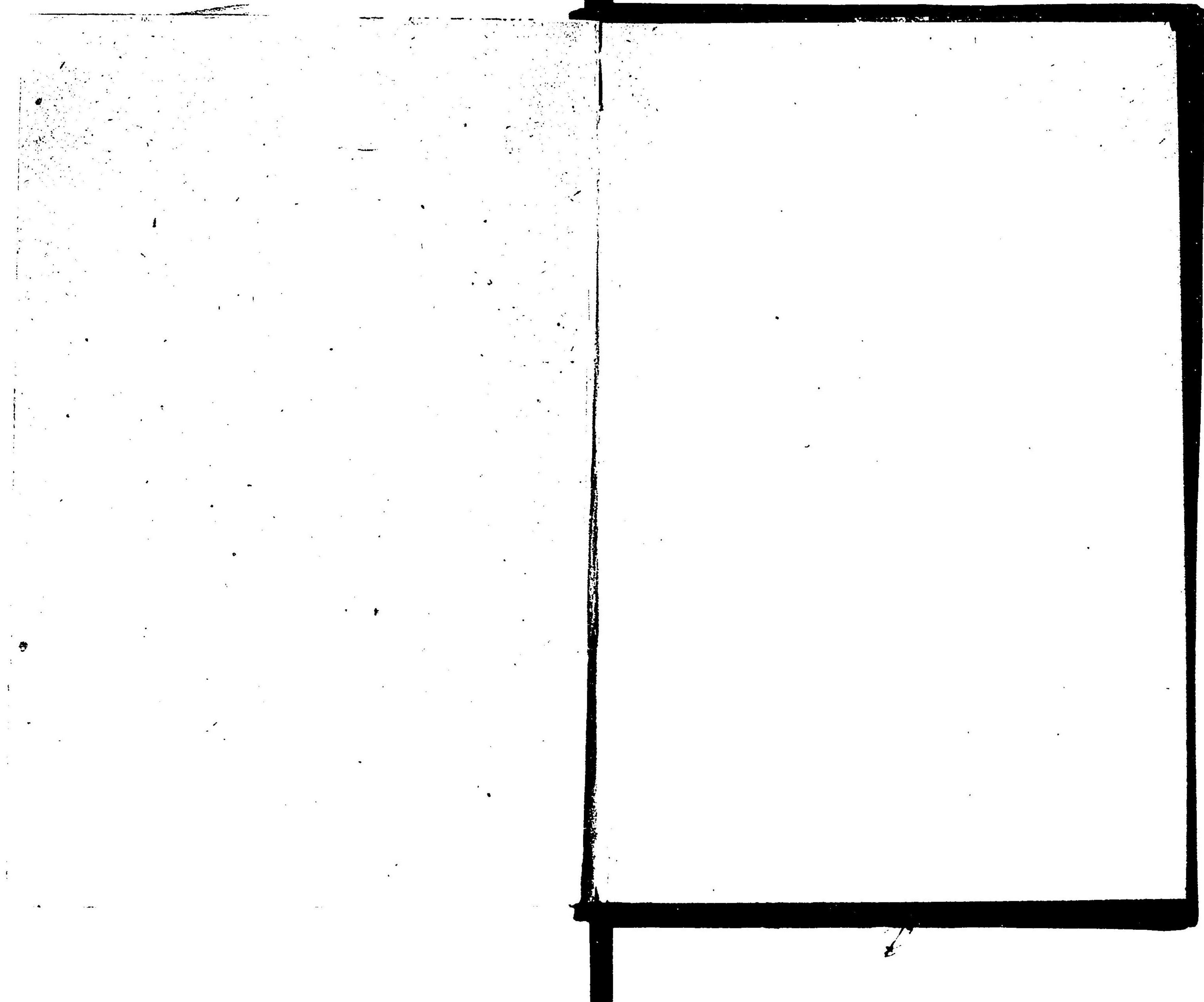
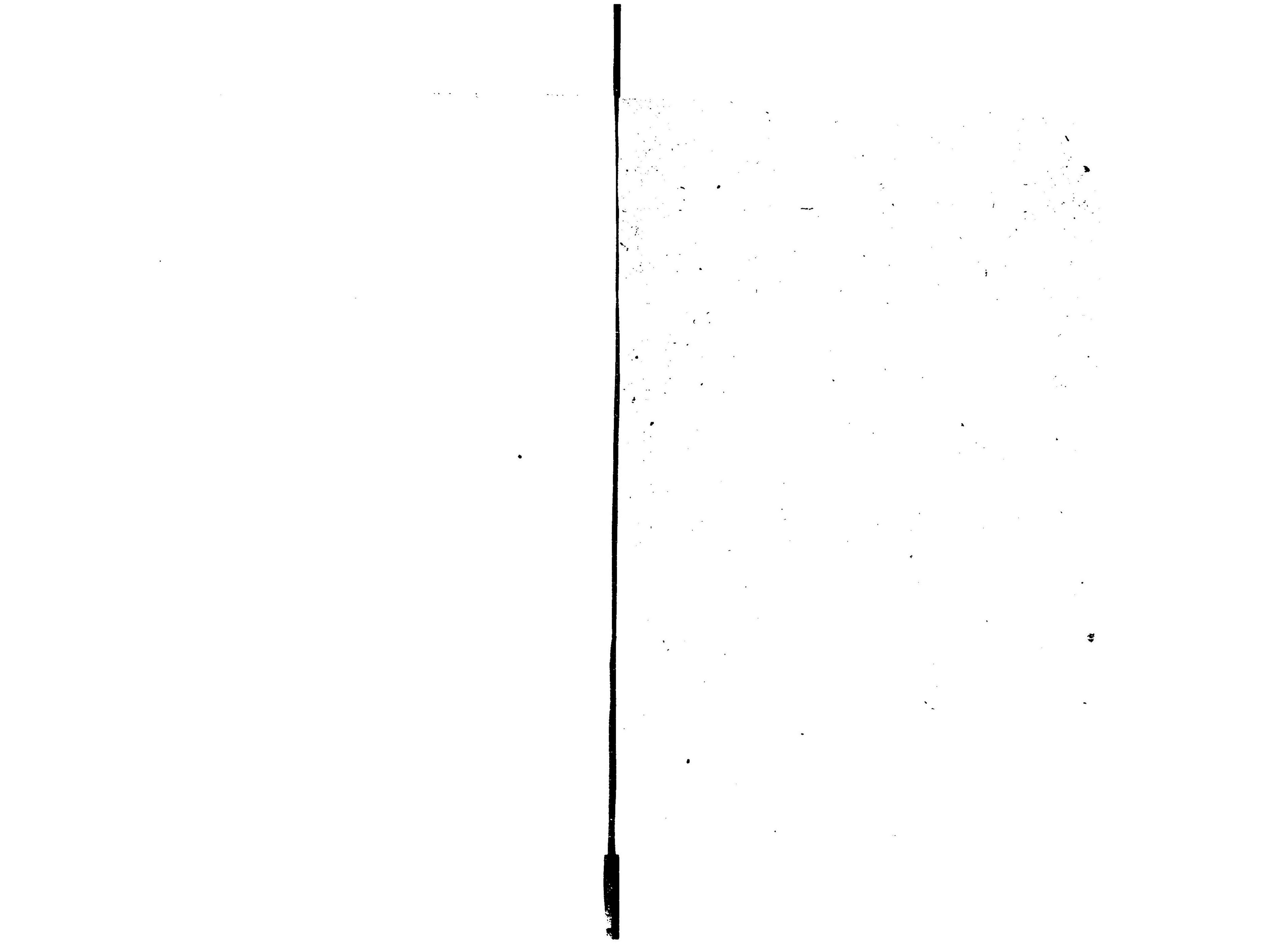


一  
川尻實岑 著

萬  
世  
黨  
梅  
田  
神  
垣  
英

東京  
機械  
學  
堂





依田百川先生序  
村越鐵善教正序  
川尻宝岑居士著

竹葉舎晋外序

# 為世蒸梅田神怪

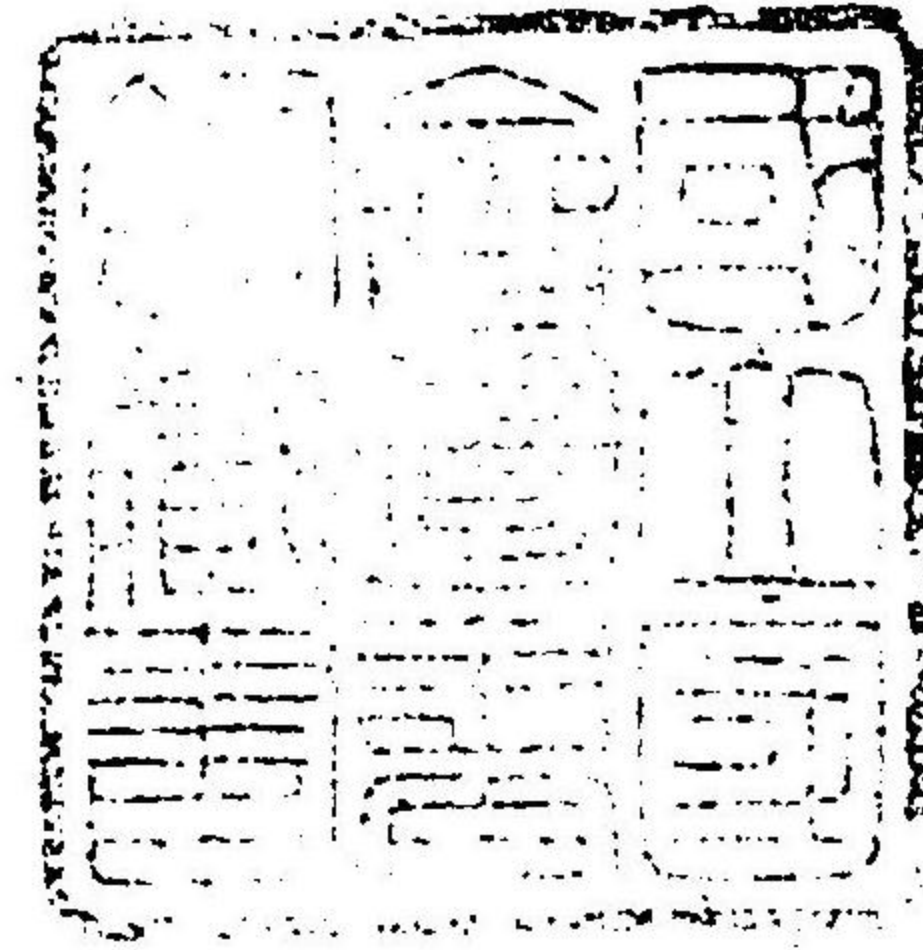
東京

鶴鳴堂藏版

912.6Ka957y

萬世薰梅田神垣序

彼是之而我非之。彼非之而我之。以我所見是非之。彼必不從也。以彼所見是非之。我必不從也。不若各執其所是。不敢從人。是非以自守也。孔子曰。攻乎異端。斯害也而。所謂異端。非指邪道。特云與我異說耳。攻擊辨駁。徒招禍害。豈若置之度外。各從其所欲乎。天保年間有梅田神社神職井上正鐵者。唱神道禊教。命門人誦拔詞。信徒甚多。幕府以為煽惑人民。陰圖不軌。捕流之。宅島。正鐵守道不變。信徒益進。遂死島中。至今奉其教者。以正鐵為開祖。蓋其道行堅貞。有大過乎凡人者矣。友人川尻君寶岑。精於禪理。兼通神教。旁好傳奇小說。



336855

頃著傳奇一篇。名曰萬世薰梅田神垣。就正鐵行狀。布演補綴。條理秩然。其守道之篤。導人之勤。與門人子弟崇信遵奉之殷。可以概見也。余與寶岑交善。余素儒者。寶岑好禪。所學不同。議論各異。然交情日益厚。蓋以各執其所見守之。未嘗較其得失爭其是非也。余才識淺薄。不知正鐵之學。果出何書。修何道。然喜其剛健忍耐。堅守不移。訓導不倦。與親鸞日蓮同其歸。宜矣。信徒之至今益盛也。蓮教真宗。世有傳奇演其事。正鐵之傳奇未見其書。寶岑此作可謂闡幽而發潛者矣。余安得不序而傳之。若夫教之是非。各從其所見執之。不論而可也。明治廿年丁亥十一月學海居士依田百川識於墨水州廬

序  
道隆んにして魔も亦熾んありと宜ある哉吾先師  
井上正鐵大人天保弘化の際に當り二千年來萎靡  
不振の神教を再興し普く天下の蒼生を教化せん  
と拮据經營せしに其徳教に風靡するもの恰も水  
の卑きに就くが如く門徒日々に増加し名聲天下  
よ震ふ時に幕府先師の英邁雄豪の資ありて人心  
の歸向するを憂ひ新義異流を名として終に三宅  
の孤島に遷謫せらるると雖も更に屈撓する事あ  
く蒙昧野蠻無智無識の徒を教導して風化大に行

はれ其威徳今に傳へるも其身ハ終に歸らぬ島守  
となりしに明治の聖代に至り枯骨再び春よ遇ひ  
朝廷其功を追賞し井上神社の號を賜ふに至る此  
頃川尻賢岑居士先師の實傳を演劇の正本に著し  
て婦女童幼にも道の道たる所以を解し易からし  
めんとす余一讀して往時を回顧すれば殆んど涕  
泗の滂沱たるを覺へず感慨の餘り一言を卷首に  
掲ぐと云爾

明治二十年第十二月

權大教正 村越鐵善

序 古語に曰く嘉肴ありと雖も食ハざれば其旨きを  
知らず至道ありと雖も學ばざれば其善きを知ら  
ずと味ある哉言や龍肝鳳髓はイザ知らず熊掌猩  
脣と雖も食はざる者には其珍羞あるを知らぬ况  
んや日本固有の神教唯一の本旨に於てをや方今  
の生物知生意氣連には此至道の如何なる美味珍  
羞あるをも知らず兎や斯云ひて小兒だましの理  
學化學を鼻よ掛け何千倍の望遠鏡何万倍の顯微  
鏡と自負するもツマリ己の近眼に劣る淺見薄識

を披露して此高尚の風味を知らず却て之を輕蔑  
 するは最片腹痛き事なり此頃川尻寶岑先生嘗て  
 此唯一の至道を再興して災厄を蒙りし井上正鐵  
 大人の實傳を傳奇と爲し其芳馨を万人に臭がし  
 めんと勸懲を本色と爲し是非を衆人の腦裏に判  
 斷せしむる劇場に於て之を演ぜしめ兼て世道人  
 心を裨補せんとは作者の腕前實に甘いと未だ何  
 の味ひも知らずして黄なる嘴で轉るものは

鶴鳴堂の食客

竹葉舍晉升

明治廿年十二月

場割

序幕	木下川梅林の場	五幕目	同若殿居間の場
	本庄家川瀬邸の場	六幕目	深川万年橋の場
	大川吾妻橋の場	七幕目	木下川又藏内の場
	村越奥座敷の場	八幕目	同奥座敷の場
二幕目	本庄家詰所の場	九幕目	三宅島配所の場
	同若殿邸の場		三宅島千都山嶺の場
	同通用門窓下の場		梅田境内祭典の場
三幕目	梅田村島居前の場	大切淨瑠璃	隅田堤花見の場
	同別當所の場		
	同神明宮本社の場		
四幕目	本庄家裏門前の場		

竹本  
長唄  
常盤津  
清元



役名

井上式部正兵衛	又藏の女房	本庄宗武
村越次郎	八太夫	本庄越宗
野澤鐵	原退藏	村越鐵
池田屋の若者常	山岸藤三郎	東宮千知
本庄の妻采女	忠お	福田鐵
後智善	初五郎	福田鐵
三宅水汲女	野村惣三郎	横尾信守
忠次郎女房	おし	麻生正守
池田屋下女	青木千	小畑鐵
本庄の臣	河井六之助	福田長之
同門番	安西	小畑鐵
酒尾杉坂屋	同島	福田長之
本庄の臣	外に	小畑鐵
坂田	門島	小畑鐵
秘藏の弟	中人心	小畑鐵
本庄の家老	大大手	小畑鐵
村越	勢勢先	小畑鐵
本庄の臣		小畑鐵
三宅の隠師		小畑鐵

浄璃理役名

野口安慶  
本間正三  
小藤太郎  
福田長之  
小畑鐵  
麻生正守  
横尾信守  
福田鐵  
東宮千知  
村越鐵  
本庄宗武

万世薫梅田神垣

忘路庵寶岑居士著

序幕

○木下川梅林の場 ○本庄家川瀬邸の場 ○大川吾妻橋の場 ○村越奥座敷の場  
本舞臺三間の間所々頃合ある梅の立木花盛りの摸様上の方談への家根付の枝折門此上手生  
垣にて見切り向ふ一面梅林の書割下の方樹木の張物にて見切り舞臺前床几三脚並べ煙草盆  
を置き都て村越家梅林の体爰に土地の百姓忠次郎初五郎木綿衣裳羽織袴にて鈴を持ち其外  
百姓の仕出し大勢皆く鈴を持ち此中二人大なる太鼓を擔ぎ是を百姓二人両面より叩いて  
一同踊り乍らトホカミエミツメを唱へて居る此摸様

舞臺の太鼓と鈴の音にて幕明く

ト皆く唱へ乍ら舞臺を踊り廻る事宜敷有て(忠次郎)あんど皆さん爰で一才一ふく遣り  
ふでいふらぬか(初五郎)夫が宜ふらぬサアく何方も少し休息をなさいまし(大勢)そふし

升ふく ト皆く思ひくに床几に掛り煙草を吞む事宜しく(初)時に忠次郎殿私に何  
も呑込ぬ事があるが+(忠)そりやア又何の事だへ ト合方に成り(初)然ればサ愛の名主さ  
んを始めと志てお互ひに梅田の先生のお弟子に成て信心をして見ると實に此様有難い事  
のあいので放蕩者ハ堅くなる酒の上の悪い奴も根性玉の悪い奴も皆先生のお示しで心が直  
つて家内中樂しみ暮しが出来るよ云ふも實に先生のお蔭で此様有難い事ハ又と世界に有  
まいと思つて居るのサ(忠)ろりやア云はいでも知れた事押上のお丑あんな女の癖に大酒  
呑亭主ハ大の博奕好で年中夫婦喧嘩の絶た事なかつたのが梅田のお弟子に成てから是迄  
どは打て變つて生れ變つた柔しい人に成て有難がゆて悦んで居るは此二人斗りじやアない  
誰も彼も皆あるふだ夫が又貴様は何が呑込ぬと云ふのだ(初)夫だから呑込ぬへのだ(忠)ろ  
りやア又何がよ(初)此様な結構な教だのに何處が悪いか去年の冬お上からお手が這入て  
お調べになつたらふナアニ根が正法だから案じる事ハねへと思つて居たが案の狀お上から  
お許しに成て下つたのハニリヤア斯あくつちやアならねへと思ふがアノ時先生と一緒に牢へ  
這入た隼人様が昨年暮に牢死をまぞつたのが分らねへアノ人は先生の一番弟子であん

十

有難いお人が何で牢の中で死だのだらふ是れが一圓呑込ぬへのだ(忠)ろりやア貴様がま  
だ分らねへと云ふものだ隼人様の様な宜いお人が然も先生の身代りに牢へ這入て牢死をな  
されたハ勘定づくでハ合ハない様だがコリヤア昔しから有る事で一派を聞いた祖師方に法  
難に逢ハないお方ハ一人もねへ安樂住蓮といふ二人の坊さんハ法然上人に代つて首を切ら  
れ日蓮上人のお弟子達ハ鎌倉の討手を支へて命を捨て、師匠様を無事に其場を落せなると  
皆法の爲めにする事で隼人様が牢内で果なくおなり成れたも法の爲めに命を捨て跡へ殘つ  
た我ハ信心相續させやう爲め此大勢に成り代つて命を捨て、下された丁度今日が御命  
日夫ゆゑ大勢打寄て斯してお祭をやるのじやないか此御恩ハ忘れてはならない(初)成程  
夫で漸々呑込た然して見ると我ハ代つて死で下すつたのだからろりやア何様なにして  
も宜い譯だ○そふだ、其處で大勢云ひ合せ賑かにお祭をして△此度お上かられ許して晴  
れて唱への出来る事を口淨光寺の御墓の前へお知らせせて名ハ御恩のお禮を遂げる  
爲め今日御命日のお祭に×此木下川の往來を大勢揃つて唱へ乍ら○淨光寺へ踊り込で此悦  
びをお月に掛けたら○高天原で隼人様も囃お悦びなさらふと思へハ○此様な嬉しい事ハ

(皆々)ムらぬわいのふ(忠)皆の衆の云れる通り實ハ嬉しい事でムるが其喜びに引替て今此  
 名主様へ引取られて世話に成つてムる隼人様の御家内采女様今の若さに夫に別れは修行の  
 上とは云ひ乍らぬ愚痴を一ツ仰しやらがお心の中何の様かと思ひ遣れて成升ぬわ(初)  
 眞に左様ぞや隼人様へ御恩返しに是から一同心を合せ采女様を大切にお世話すさにや成  
 ぬとへ〇噂をすれハ影ぞや向ふから采女様がお見へなさるわ(忠)ナニ采女様がト向  
 ふを見てホロリとして お稟参りのお歸りでがふあらふア、おいとしい事じやナア(初)今  
 日のお祭何や彼や爰でお禮をすろふじやないか(皆々)夫がいひ〜と合方に成り向ふよ  
 り隼人の妻采女若年増世話女房好の持らへ駒下駄日傘をさし少さる風呂敷包みを持ち出て  
 來たり直に本舞臺へ來る(忠)ア、モツ采女様一寸お待ち下されまし(采女)何方かど存じま  
 したら忠次郎さん初五郎さん皆様もお揃ひでお花見でムり升るか(忠)イエ〜左様でハム  
 り升せぬマア兎も角も夫へね掛け成れて下さり升(采)左様ならは死成れて下され升ト采  
 女眞中の床儿る掛る忠次郎始め一同床儿を下りて(忠)何からお禮をア升ふか今度愈〜公  
 儀からお許しに成升たので門中一同の悦びハ天へも登る心持でムり升(初)昇と云ふも隼

人様が命を捨て〜のお骨折今日晴れて唱への出来升のは偏へに隼人様の御恩でムり升(忠)  
 さんとお禮をすして宜やら有難ふ(皆々)存じ升る(采)是は又勿体ない其様に仰しやつて下  
 され升てハ御挨拶の致し様がムり升ぬ去年公儀のお調べにてお逗留にもならふかど心配致  
 して居り升たに事なふお下げになり升たは是れ皆お道の尊い縁我〜しきの力に何とし  
 て及びもない事其お禮をら神明様へお上げ成れて下され升(忠)貴所ハ左様に仰しやい升れ  
 と其神明様のお使はお立ち成れた隼人様今日命日にムり升る故門中一同合せ(初)心三  
 りのお祭を致したいと打揃ひ木下川中を唱へ歩き今迄悲く云た奴等に是れ見て呉れと見せ  
 付けて(忠)お墓の前でお祝を上げてお禮をすす心でムり升る(采)夫程迄の思召何とお禮を  
 すさふやら冥府に於て隼人事も御有難ふ思ひ升ふ夫に代つて私しより厚くお禮を申し升る  
 (忠)如何致し升て其様に仰しやり升てハ勿体なふムり升る夫に付ても貴所様には修修行の  
 お力どハ云ひ乍ら去年の暮に牢内の知らせをお聞き成れた時涙一滴もぬ御氣丈終に是  
 迄愚痴らしい事仰しやつた事もなく男優りと一同が恐れ入て居り升が心の中何の様か  
 と實にお察し申上げ升(采)有難ふムり升るソリヤモツ夫に別ると悲しみは替へるものもア

が升ねを兼て覺悟の別る、時夫の詞に此度のお道の爲に命を捨てて再び歸らぬと互ひに心を打明けて暇乞も致し升たれば心残りもムリ升ぬ(忠)夫より初手からお二人はアお覺悟でムリ升たか(采)家を出る時此世でハ再たび逢ひぬ互ひの誓ひ水盃を致し升たト是にて一同迫りし思入よて手拭を顔に當て、宜しく泣く采女一寸氣を變へて、直に私とした車が斷念の様にもないよし事云ひ出して夫の手前も面目ない皆様お死し成れて下さり升(忠)如何致し升て夫が眞の人情と云ふもの貴所方御夫婦が是程迄にお道の爲にお盡し成れて下さるかと思へば有難ふて、涙に止度かムリ升ぬ(采)夫程迄に私し共を思召て下され升るなら斯様に大勢往來を鈴や太鼓を打鳴し唱へてお歩き成る事何卒お慎しみ成れて下され升(忠)ろりや又何故で(皆々)ムリ升る(采)然ればムリ升る切角のお志ざしを戻く様でハムリ升れを未だ改めて公儀より死しに成たと申す譯でもなければ又も此上お上よりお咎めの有た其時何の様な事にあらふも知れや今暫くが大事を慮只何處までも神妙にお慎しと下さる様お願ひ申上げ升る(忠)イヤ、夫ハ餘りのお氣遣ひ一旦お下げに成たからは最お許しに成たといふもの(初)何程唱へて歩いたとて此上お咎めの有ふ筈ハムリ升

ぬ(忠)としく、唱へて是迄に悪く云て輕蔑した奴等に見せて遣らねば成升ぬ(采)サア夫が貴所方の御了簡違ひ斯る上なき大道ゆゑ知らぬ者が驚るが當然夫を兎や斯ふ思召て僅か誠地を張る爲に大切なる先生の御身に凶事のある時取返しの成升ぬ(忠)夫が貴所の思ひ遇し此方の内の旦那杯も同じ様な事を云てムるが彼れハ去年のお調へで怖氣が付てムるといふもの(初)ろうとも、最斯ふなれば采女様決して御心配ハムリ升ぬ(忠)夫ハそうと大分長咄しを仕升た又一ト息遣らふでハムらぬか(初)夫が宜ふムる夫から皆の衆(皆々)サア田掛け升ふかと皆く立ち上り(忠)どほかと思ひため(皆々)どうかと思ひため、ト鈴を振り太鼓を叩き踊り出す(采)ア、モシ夫がね惡ふムリ升る何卒慎しんで神妙にして下さり升トいろ、氣を揉むを皆く聞かずに唱へ乍ら残りや下手へ這入る、ア、モシ悪い事ハ申升ぬ今が大事の處でムリ升る、ト跡を見送り氣を揉む事宜しく、何を云ふにも多人數の事ア、困つたものじやナアト宜しく案じる思入此時下手の奥の梅林の陰より手先二人羽織着流し尻端折好の袴へ手拭を吉原冠りにして日傘を持ち出て來り○モシお細君其様ハお案じ成る事はムリ升ん△もふ大丈夫でムリ升よ、ト是にて采女一寸思入有て(采)然して

貴所方へ〇私し共は今日爰へ梅見に参つたものでムリ升が兼て梅田の御信心の有難いと云ふ事へ聞て知て居り升のサ△去年公儀のお調へが濟んで表向に成たと云ふ事ソリヤモツ結構を教でムリ升から左様なれば成升ぬと云ふ〇私し共も何かしてお仲間へ這入たいと疾から思つて居升のだから何れ梅田へお願ひに出る積りでムリ升のサ△然してお細君一体如何様事を爲るのでムリ升へ(采)何も六ヶ敷事へムリ升ぬ只お祓を唱へる斗りでムリ升る〇へエ、夫じやア例のとはかみを唱へてさへ居れば宜いのでムリ升かへ(采)左様でムリ升〇そふトやアムリ升まい未だ外に何か爲る事がムリ升ふ(采)外に何も致す事へムリ升ぬ△夫でも傳へだとか神秘だとか云て別の處へ連れて往て何り爲るじやアムリ升ぬか(采)夫ハ式法がムリ升て神秘の傳へがムリ升〇そふでムリ升ふ夫がなければ成ぬ譯だ然して有難いお水を吞せるじやアムリ升ぬか(采)唱へて咽喉の乾き升ゆゑ水は頻りに呑み升る〇イ、エ其事じやアムリ升ぬ今の傳へとか何とか云ふ時に大層有難いお水を吞せるので夫から頻りに符り込と云ふ事じやアムリ升ぬか△何でも其水が滅法有難いお水で夫を戴くと盲目が目を明いて跛壁が腰が立と云ふ事私しなんぢは痴氣で困つて居升から何卒夫を戴いて直したい

と思ひ升よ〇夫ハ一体何のお水でムリ升へ(采)イエー左様な事ハ決してムリ升ぬ世間でいろいろな噂も致すでムリ升ふが正法に不思議あしで決して左様な事はムリ升ぬ〇そう仰しやい升がね今迄輕蔑して居たものが其お水を戴くと急に有難くなる云ふふんを不思議な事ハ有升ぬぞんのお水だか一寸聞かせて下さい升る(采)イエー決して左様な事ハない事でムリ升△何せお仲間へ這入る私し共其様にお隠し成る事はムリ升んやね(采)何で私しがお隠し申升ふ全くらんを事はないのでムリ升る〇へエ夫じやア何有てもお隠し成るのでムリ升ね(采)何のマア私しが〇そんなら云て聞かせて下さい升な(采)夫でも何もあいな△そんな事を仰しやつても知て居升よ〇マア咄しても宜いじやア有升ぬかト采女迷惑たる仕打此時上手の枝折の内より村越次郎兵衛黒の羽織着流し煙管を持ち庭下駄にて出て來り(次郎兵衛)お前達の何處へ往たのだ〇イヤ是ハ旦那お久しふムリ升(次)何ぞ御用でも有てか〇イ、エナア今日ハ御用でムリ升ぬ△此方様の梅が盛りで有らふと存じ升て今日は梅見と出掛け升た(次)そふか夫ハ樂しみな事ぶナ〇モシ旦那大層人が出來ねへ(次)毎日能く人が出升とへ然して其女に何か用が有るのか〇イ、エ別に用はムリ升ぬが△私し共

も例のお遣へ願ひ度と存に升て(次)甘く云ふナ○其様な笑談は何でもいひが御用であければ内へ来て一盃呑で往きませい○思召は有難ふムリ升が未だ外に少し用事もムリ升れば△今日はお預けと致し升て是でお暇致し升ふ(次)マア宜ひじやアねへか○暇れぬ用事でムリ升から○旦那又此頃に御尋ね升△大きにお喧ましふムリ升た ト早き合方にて兩人極りの悪き思入早足にて下手へ這入る(采)アノ衆達は御存じでムリ升か(次)アレハ定廻りの手先のものだ此邊をうろく立廻るからハコリヤモウ油断の成ぬわ(采)次郎兵衛様御心配にムリ升ふ ト合方に成り次郎兵衛上手の床几に掛る采女ハ奥中の床几に掛る(次)去年上うらお手が這入り此方の夫準人殿は先生に代つて入牢され又先生は書物を差上げよどむる御沙汰に付き梅田のお宮へお籠り成れ一日一夜の其中に二巻の御書をお書き成れお上へお上げ成れしが其前方に準人殿は終に牢内で果なく成れ其後二巻の問答書に不正の藤のな故に一同お下げになり成たが只神妙に致せよと仰渡されが有た斗り許可に成たと云ふでいなく上に於ても先生の身の慎しきを見てムれば今が大事の處をれを何弁へぬ百姓共鈴や太鼓で騒ぎ出し夫では道の爲にならぬと詞を盡し制しても更に分らぬ馬耳東風困つた事

でふるわへ(采)今も今とて皆様に申上げしが聞分なくアノ様子でハ遠からず先生や貴所方に如何なるは難義が掛らふかと案じられて成升ぬ(次)是に付ても弟又蕪尋常のものなら斯云ふ時少しは頼みにもあらふもの朝から晩まで酒浸し女郎狂ひにうつゝを抜かし悪い方と聞合へハ世話を焼ける斗りの事配するは私一人木下川でさへ門中が騒ぎ立て居る事ゆゑ梅田の方ハ嘸かしと今朝準次郎一を様子を見せにやり升たが定めし騒いで居るでムリ準人殿の志を徒づら事と成ねハ宜いが(采)方一の事のある時ハ斯る尊き大法も(次)貫ぬく事の成ぬのみか蕪遣ひや禁厭の(采)怪しいものと見なされて各ハ死れぬ縄目の耻(次)斯りや際がる門中の是迄進む信心も(采)上の威光に怖恐れ(次)再たび進むものもなく(采)債がは國のは教へも(次)滅する時節到来なるか(采)今此の姿である時ハ(次)いづれ一度ハ法難の(采)夢に夢見る ト兩人顔見合ハせるを道具替ハりの知らせ(兩人)世の中じやナア……

ト兩人宜しく風の音合方にて道具廻る

本舞臺三問の間常足の二重籠への欄間張物の蹴込正而床の間違ひ欄檻への唐組上の方一問

の障子家体下の方一間支關の掛り柱へ川瀬勘右衛門と配したる表札下の方黒塚の見切り都て本庄の家老邸宅の体爰に下女年増造りにて棕櫚帯にて平舞臺を掃て居る同じく下女一人島田鬘同じく帯にて掃除して居る此模様

合方にて道具止まる

○是でお掃除の出来たといふもの旦那様にも今しがたお下りに成たれば何時は飯を召上らふも知れずお膳立をして置き升ふ△然して此帯の何處へ置のでんそへ○奥にお前今日始めてお目見へに來なさんした故何もまだ知るまいが云ふて置かねば成ぬ事此お屋敷では帯といふ事を云ては成ぬやへ此帯の事はおなでと云ふのじややへ△然して夫の向いふ譯でんすへ○此お屋敷のお上が伯耆守様と仰しやる故夫で帯と云ふ事を浮遠慮しておあでといふのじややいナア△夫なら爰のわ内ハ伯耆守様でんそかへ○ナア爰のお内ハ浄家老の川瀬様といふお屋敷の旦那様のお勤めあさる浄主人様が伯耆守様と仰しやるのじやいナア△夫なら先刻浄門を這入て來た時彼處の方に大きな浄殿が有升たが彼處が夫でんすかへ○ナ、そふじやわいナア此廻りのお長屋の皆浄家來衆のお住居でアノ大きなのが

お上の御殿じやわいナア△夫でそつぱり分り升た夫では此おなでの帯は何處へ這て置き升ふ○アレおなでの帯といふて何にもならぬ只おなでと斗り云ふのじやわいナア△奥にそふでんり升た○△ナホ、ハ、○此おなでの二本共に登所の柱に掛て置くのでんそ私しが一處に往て教へて上ふふいナア△夫なら然して下さんせ○ドレおあでを掛けて置き升ふか、ト兩人帯を持って奥へ這入る合方に成り向ふより川瀬勘右衛門上下の上へ羽織を着て大小にて出て來り直に本舞臺へ來り玄關より(左右)お頼み申す、ト奥より若徒袴衣裳にて出て來り玄關へ來り(若徒)是ハハ、荒川様宜うお出遊バシ升た(左)シテ御家老にハ最早お下りにんり升たか(若)只今しがたお下りてんり升た(左)夫は重疊少した目に掛つて申上度義がムつて參上致したとお取次を願ひ升(若)畏まり升てんり升マア此處へお上り遊バシ升(左)然らば御免下され、ト荒川二重へ上り下手宜き處へ住ふ若徒茶を汲で出、イヤハ、必らずお構ひ下さるな(若)只今主人へナ升る間暫くお待ち下さり升、ト若徒奥へ這入る荒川静に茶を呑で居る合方替つて奥より家老川瀬勘右衛門羽織袴少し老たる家老の袴へ宜しく出て來り(勘右衛門)是ハハ、左右殿宜ふこそ、(左)御家老にハお早いお下りにんり升

たト是にて勘右衛門上手に住む(勘)シテ能々のお出の何か拙者に御用をしまつてか(左)如何にもチト密々に御家老の思召を伺ひ度義がムつて(勘)拙者が所存を聞き度とシテ如何なる義にふるな(左)お家の大事にムリ升す(勘)お家の大事と云ひるゝ若殿の御所行に付ての義でふるかな(左)御賢察の通りシテ御家老の御所存ハナ(勘)手前よりハ能く是迄れ越し有りし貴殿の心中如何思ひるゝ(左)拙者が心中一ト通りお聞き下されト合方に成り抑も若殿には幼稚の時よりお年に似氣なき器量發明學問武藝に心を入れられ御孝心厚くまじく臣下の者を愛し玉へハお家の御爲め此上なしと家中一同悦び居りしが兼て貴殿も知る如く先年加藤勇二長沼澤右衛門の兩人にて彼の井上式部なる者を若殿に推擧させしより若殿深く尊信有て既に師弟の約を結び玉ひ屢々は前へ召さるゝ事ハ我人共に知るも雖も若殿いよく謹慎厚くまじく仁慈を施し玉へば御行跡の上に於てハ申上る處ハなけれど只疑はしきハ彼が教世の神道に絶てなき大聲を發し祓を唱へ異形の振舞致す事疑はしきの始めにして彼れ表に神道を唱ふるといへと或時ハ佛經に亘り又或時ハ儒典を講じまとする旨の非ざるハ不密に存じ居つたる處果して去年公儀より御調へに相成しは怪し

き事せも有が故なり大殿にハ御思慮深く敢て現はに咎め玉は空只何となく勇二澤右衛門の兩人に御暇を玉はりしハ恐入たる御斗らひ夫よりしてハ井上式部絶へて御前へ出さればお家の憂ひを除きしと安堵の思ひを致し居つたに(勘)此程又も夜陰に及び窺かに御前へ出る事拙者も疾より承せしつた(左)然れば公儀の御調へにて罪科に處せられんと思ひの外差たる御咎めも非ざるより勢ひ以前に十倍なし入門なすもの日々多く千住の橋の彼邊には祓の聲の喧しく教に靡き風化なすよし彼れ斯く迄人心を固結なす事偏へに邪法の爲す處何れ公儀の御手入有て罪科ハ免れね井上式部若殿にハ信心付かれや彼が舌頭に感ひされ御とし仰ぎ玉ふ事お家の瓊瑾臣等が無念少しも早く式部奴を追退けぬ其時ハ御家の爲め宜しからや打捨置くべき事ならぬバ御家老の賢慮伺ひ度是迄參上致してムリ升る(勘)澤尤もなる其御詞某し迎も其事を思はぬにてハあらねども大殿ですら現ハに事を遊ばさぬを臣下の身として如何せん爰に一ツの所存ハあれど御家の爲め君の爲め一命捨るものならでハ迂濶に事は斗られず(左)斯ハ御家老の仰せども覺へ升ぬ臣として君の爲め一命惜む者がムらふや身不肖なれども荒川左右今日只今は貴殿へ拙者が一命差上げ申す尙卒貴殿の御思慮の



程仰せ聞けられ下され升ふ(勘)ハ、如何にも御身ならバ仕負おせん、ト後ろの袋戸より白鞘の短刀を持ち出て左右の前へ置、拙者が思案ハ是でムル(左)ナ、此品が御思案どの(勘)ハ、身是を竊かに懐ろにして式部が方へ入門おし彼が言葉のまに、修行し怪しき事を認しならバ邪法を行ふ曲者を天下の爲に誅するなりと只一刀に刺したらんに、お家のお爲めのとあらず合て天下蒼生の害を除くハ國家の爲め一命かけて此事を身首尾能く仕負せられよ(左)ハ、能くぞお明し下されたり是より直様梅田に至り入門なると偽つて彼が秘密を探り出し邪法を見届け刺殺し其場を去らず切腹なせバ跡ハ何卒宜き様に(勘)イヤ身其場に切腹わらバ彼が邪法を誰有て世に訴ふる者あるまじ暫し其身を全ふ多し某し方へお越しおれ時節到らバ其時こそ潔く一命捨てられよ(左)ハ尤もなるは仰せ委細承知仕つる(勘)ハ前ハ某し宜き様に斗らひ申せバ心置きなく(左)是より直に式部が方へ(勘)伊如才ハ有るまじけれ必らず共に、ト兩人向ふを屹と見て又顔を見合せるを道具替りの知らせ、汚濁ぬるな(左)ハ、ト勘右衛門ハ向ふを見込と頓て見よと云ふ思入

左右の短刀を懐中する此様早めたる合方にて道具廻る

本舞臺三間の間正面大ある橋の欄干夫より上手の奥へ斜に橋板を見せ上の方橋詰の駒寄せに寄席のヒヲを下げ下の方駒寄せ宜き處に葎張の茶見世の仕舞たる体向ふ一面大川より橋向ふ佐竹邸の川端を見たる夜の遠見の書割上の方材木の置場にて見切り下の方板場の見切り都て吾妻橋夜の体水の音

流行唄にて道具止まる

ト上手の橋の奥より仕出し二人木下川と配したる弓張提灯を点け出て来り舞臺宜きところにて〇時に最何時だらふ△モウ追付け四ツだらふ〇意外に遅く成つた今日ハ準人様の御祭りで木下川の本家でしつかり御馳走に成つたものだからスツパリ酔て仕舞た△ハ旦那ハ宜い旦那だが夫には引かへ西の家の又藏さんの乱暴に困つたものだナア〇ハ、中に居て信心が大嫌ひ未だ梅田のお弟子にもあらず餘まり乱暴ををるので置へ入れられたところか如何して抜けるか抜け出して吉原へ往つて居續けた家に居れば檻の中で朝から晩まで酒浸し内のものは手當り傍題叩き曲げて呑んで仕舞ふ、彼様呑だくれバ仕様がねハナア△餘まり云ふはお前も大層酔つて居るぞ〇何程酔つたつて彼様な乱暴はしやアしねへ彼様な人

が全体信心へ遣入ると宜いのだ△夫れだつて否だと云ふものハ仕方がねハヤナ○己だつて  
 はじまりば否だつたが遣入ッて見ると勿々有難くつて止めると云つても止められねハヤ△  
 又藏さんの酒と同名じ事かナ○違へねへ時に早く歸らふか△夫れが宜いく ト右の鳴物  
 にて兩人下手へ遣入る鳴物切れる本釣鐘を打ち込む下座の獨吟に成る宜き程に向ふより池  
 田屋の若い者常吉木綿衣装店もの好きの拵りへ千草の股引尻端折にて考がへながら出づる  
 跡より池田やの下女およし木綿衣装前垂掛島田がつら好の形にて同じく考がへながら出て  
 来り花道にて(常吉)家を出る時約束して此處まで連れて来たもの、如何思ひ直しても御  
 前を一處に死なせてハ如何も心が濟ぬゆゑ御前は此所から歸つて下され(よし)ソリヤ聞へ  
 ぬ常吉さん御前を斯ふ云ふ身にしたも元ハ皆な私から御前を殺しておめくど何で生て  
 居られ升ふ何卒死なせて下さり升 ト獨吟にて兩人一寸色合宜しく有つて本舞臺へ來たり  
 (常)云甲斐もあい此私を夫程迄に思ふて呉れる御前の深切實に嬉しふ思ひ升が茲を宜ふ聞  
 て下され今御店を失敗してハ是から何を仕様にも資本といつてハ少しもあし強欲非道を請人  
 が片時家への置くこととらぬ明日ハ幾元へ連れて往くと憂愁ひ詞も身から出た詞と思へば

是非もなければと親と云ふのは名斗りで成ぬ中のまゝしい親達私を奉公に出したのを厄介拂  
 ひをした氣に成り世に情け多い人達故年に兩度の宿下にも顔を出した事もない其親里へ今  
 更にれ店を失敗升たと往て何で顔が出され様其憂愁目を仕様より寧ろ死ぬのが遙かに増し  
 此際ゆゑに覺悟して死ぬのハ此身の自業自得夫とハ違ひお前の身は何でも仕様のある身体  
 茲で死ぬのハ無益な事何れへありとも身を寄せて其身を全ふ折ハは跡の回向をして呉れ  
 るが死にハ優る親への追善茲の道理を聞分て何卒是から歸つて下され(よし)私しを懸然とい  
 ろくに云て下さるハ嬉しいが知ての通り私しの身も親親類ハ死絶へて宿と云ふのも他人  
 の世話今更其處へ歸つたら夫ころ何様な憂愁目に逢ふも知れぬ私しの身の上壁へ何とお云  
 ひでも覺悟極めて居るからハ何の道生てハ居升ぬまいナア(常)スリヤ何有ても覺悟して(  
 よ)私しや後から往き升る(常)左程に思ひ詰たもの所詮留ても留るまい何の道捨る命なら  
 可憐さふじやが手に手を取て(よし)一處に死なせて下さり升か(常)因縁事と斷念て呉れ(よし)  
 願しふんす ト獨吟にて兩人宜しく有て(常)晝と違ふて夜更ては往來も稀な此大川(よし)  
 隊の目程に掛ぬ中(常)少しも早ふ ト獨吟よて兩人手を取て橋の中程へ到り欄干に手を掛

け川中を見込む此獨吟にて向ふより村越又藏羽織着流し一本差派出なる好の形遊び歸りの  
 拵へ宜しく生酔にて揚杖を遣ひ乍らひよろ／＼して出て來り花道にて(又藏)息へましい事  
 をしたモウ二三日流して居て嬉しがらせて遣るのだつたが錢がなけりやア氣が詰つて平氣  
 な面でも居られねへ然し今日迄立引て歸さあかつたのへ可愛い奴たドレ是からお小遣の才  
 角と出掛けやう ト獨吟にて又藏本舞臺へ來り橋の上の二人を見て思入有て下手の駒寄に  
 露れ様子を見て居る始終生酔の仕打宜しく橋の上の二人是を知らざ(常)愛が二人の死に所  
 (よ)常吉さん(常)是が此世の(よ)宜ふ顔見せて下さり升 ト獨吟にて兩人宜しく有る獨吟  
 切れる(常)又もや人の來ぬ中よ(よ)未練殘さぞ(兩人)南無阿彌陀佛 ト兩人飛込ふととる  
 又藏ツカ／＼と往きて是を引止め(又)二人共にマア待て(常)何卒放して(兩人)下さりませ  
 (又)是ハシタリ待てと云たら是サマア ト兩人を平舞臺へ引下し 待ねへかと云ふよ(常)  
 生て居られぬ譯有て死ねばならぬ二人の者(よ)見て見ぬ態に見遣して何卒死せて下さり升  
 (又)イ、ヤろふはならねへのだ暗に確と分らねと盛りて花の若い同士云へぞと知れた色  
 戀の果が互ひの身の詰り跡先見ぞの不了簡當にして往後の世の運の盡の危ねへものだ己が

目に掛つたから何有ても殺されねへ悪い様には仕ねへからマア落付て居るが云ひハサ(常)  
 常)御深切お其お詞有難ふハムり升れと(よ)何も生てハ居られぬ二人(常)何をお隠し升  
 ふ私共(又)ア、イヤ此處は往來た青天井で長く身の上咄しを聞ても居られねへマ  
 ア己が往く處へ一處に來なせへ(常)有難ふはムり升るが ト兩人目顔で知らせ合ひ又欠出  
 すを又藏引止めて(又)ハテ扱悪い了簡だ其様に世話をやかせやに巳と一處にト 兩人を引  
 付るを道具替りの知らせ 來なせへと云ふに ト此模様

氷の音早めたる合方にて道具廻る

本舞臺三間の間通し平舞臺正面床の間違ひ棚眺への茶壁三尺の角門上の方一間折廻して眺  
 への唐紙下の方一間の茶壁都て村越奥坐敷の体茲に上の方に以前の次郎兵衛箱火鉢を前へ  
 置き坐して居る下の方に酒屋の亭主善吉木綿衣裳羽織着流しにて  
 同じく箱火鉢を扣へ居る此模様時の鐘合方にて道具止まる  
 (善吉)御門中の人々がイヤ／＼往て歸つた跡は大風の吹た跡の様でムり升(次)今日ハ筆  
 人殿の祭と云ふのでイヤモウ大騒ぎを遣て往れた(善)段／＼今のお咄しを承まへつて見升

と未だ勿々お許しと云ふ譯でいあるのでムリ升ねへ(次)然れバサ夫故實に心配をして居升  
 が何卒是かられた前さんも我々の助けと成て門中の者を制して下され(善)及バサ乍ら私し  
 も是からの精々論し升でムリ升實に御心配の御察し升る(次)其心配のお咄し次手お前も  
 兼て涉存じの弟の又藏善にも棒にも掛らぬ奴何か彼が事の擧ハすに置て下され(善)イエモ  
 ウ私しもアノお方には貴所の前でムリ升が實に呆れて居り升から何を仰しやい升ても決し  
 て取合の致し升ぬ(次)口でいろ云つしやるが私が弟と云ふ處で内々お世話を下さる様じ  
 やが夫でへ却ては深切が仇に成升何が以後の必せ擧ふて下さる(善)イエー何にもお擧  
 ひすの致し升ぬ(次)イヤ〜お願し成るな餘り乱暴が過ぎ升故座敷串へ入れて置けバ何時  
 か様の下から道を付け相も變らず女狂ひ往て見れば串の中へ至で空虚さ貪乏徳利が幾個も  
 轉がつて居り升たが皆山形にイの字の印(善)エ、(次)夫のまならむ是迄に彼が遊びの勘定  
 に差詰りし其時三十兩用立られ其金ゆゑに其方にも迷惑をしてゐる事迄スツカリ聞て知つ  
 て居升此次郎兵衛へ義理を思ひ云ふなり次第送つて下さるへ却て爲に成升ぬ以後何卒は  
 無用に成れて下さい升(善)飛んだ事がお目に止り升て恐入升てムリ升モウ是からい決して

差上ぬ様に致し升(次)所詮勘定の仕升まい此方から上げ升から何卒そう云て下さい升(善)  
 如何致し升て日頃貴所の御恩に成升からは恩報じの万分一と存じ升て其度毎に差上り升た  
 心持で帳面消してムリ升決して御心配に及び升ぬ(次)夫が悪いとやそので夫でい甚だ  
 お氣の毒何か取て下され(善)なんと仰しやい升ても夫の何か御免を蒙り升(次)ろんから其  
 方へ又藏斗りを思つて下さるが私の云ふ事聞て下さらぬか(善)何致し升てそふ云ふ譯  
 ではムリ升ぬ(次)そんなら取て下さるか(善)夫でも何も(次)夫でへ却て道の爲に成升ぬぞ  
 ト屹と云ふ善吉思入有て(善)お道の爲にあらぬとあれば戴きも致し升ぬが一生懸命の智  
 恵を振つて是を種にお道の御奉公を致し升ぬ(次)ナニ道の奉公をするとい(善)人に知れて  
 ないけ升ぬ其譯を内こでお耳へ入れて置き升ぬ(次)ろふいふ事ならアノ小坐敷でうつとお  
 聞き申升ぬ(善)一寸お顔を拜借致し升ぬ ト合方にて次郎 先に善吉付て上手の襖の内  
 へ這入る引違へて奥の角門より以前の又藏先に常吉おより下女一人付て出て來り(又)イ、  
 サ〜巴が付て居ラア大丈夫だ案じる事いねへから落付て居るがいひや ト常吉およも  
 ち〜と下手へ住ふ(下女)又藏機貴所ハア何してれ出成れ升た(又)何して來た足が有る

から歩行て来たのだ(下)夫でも貴所ハアノ權(又)エ(下)ナユアノ折よく且那様もお宅でム  
 り升る(又)兄きが今時分何で外へ出るものか己が来たと云て一寸爰へ呼で呉れ(下)ハイ畏  
 まり升てムリ升(又)畏こまらねへでさつさと往け ト下女角門へ遣入る 今兄きが出て來  
 るから待て居ろよ(常)何かといろくお世話様でムリ升(又)何の其禮にハ及べねハヤ ト  
 上手の襖の内より次郎兵衛出で(次)又藏此夜更に何一に來た(又)少一お前に咄しが有て  
 (次)何様をお咄しか知らないが貴様の權を何して出て來た(又)エ(次)己が處へむきまじめに  
 來られた譯でハ有まいが(又)そりやア恐入たが己達ても手も亦り足も亦り出様と  
 思へば出もするだらふじやアねへか其小言ハマア跡にして呉れ今己が吾妻橋を通り掛ると  
 爰に居る此二人が身を投げ様とさる所危ねへ處へ行き合せ助けて茲へ連れて來たのだ(次)  
 スリヤアノ二人の衆が吾妻橋から(常)生て居られぬ譯有て既に死なふと致せし所(上)此お  
 方に助けられは深切なお詞に甘へまして(常)是迄お供致し升てムリ升る(次)夫ハマア危な  
 い事ろふして夫ハ何云ふ譯でムリ升(又)段くどの入譯を途中で聞たが忘れて仕舞たマア  
 早い處が出来合の心中と云ふ譯だ委しい事は二人から緩くりと聞て呉れソコア己が思ふに

ハ此二人を梅田へ遣て信心をさせた事なら迷ひも暗れて二人とも助かる事有ふと思つて  
 ソコア己が連れて來たのだ(次)ム、コリヤア能く助けて連れて來た貴様にしちやア感心で  
 有た(又)貴様にしちやアどの挨拶ゴコレ兄き何さ出かしたらふな(次)出かしたとも大出  
 來で有た(又)處で兄き汚褻美が貰ひたいナ(次)ナニ褻美とハ(又)少し斗り小遣ひを貸して  
 下さい(次)イヤ夫ハあらぬ(又)夫だつて仮初にも人二人命を助けて來たのだから汚褻美が  
 有ても云ひじやアねへか(次)二人の命を助けたので褻美を破りた罪ハ消さうが其上褻美ハ遣  
 られぬいナ(又)夫じやア貸して呉れねへのか(次)貴様に遣る金ハあい(又)何の事だ骨折損  
 をした ト合方替つて上手の襖の内より善吉出て來り(善)又藏さん能く入らつしやい升た  
 (又)イヨウ善吉さん能く來て居るすつた何から禮を云ハふかいろくは深切に有難ふムリ  
 升(善)貴所何を其様に私しにお禮を仰しやリ升(又)何かと云て命から二番目の酒を仕送つ  
 て呉れるお前だもの禮を云ハなくつちやア濟まないや(善)夫に付てハ又藏さん是非貴所に  
 お願ひがムリ升(又)何の事か知らねへがお前の事なら命でも惜みハしねへ然して夫ハ何様  
 事だへ(善)外の事でもムリ升ぬが何時ぞや貴所に用立升た三十兩と是迄お送り申升たお

酒の涉勘定が戴きたふムリ升(又)エ、(善)日頃御恩に成升る貴所方の事お拂ひを戴き升心  
 の毛頭ムリ升なんだか今日といふ今日懐ろに一文の貯へなく問屋から賣られ升ので切迫詰  
 つて貴所の事を涉當家様へ吐し申何かして戴かふと先程此方へ出升た處何かして戴く處  
 か貴所にお酒を上たと云て旦那様から倒振に大層叱られ升て取付く處もムリ升ぬ何卒私  
 しを助けると思召ては勘定を成れて下さり升(又)日頃世話になるお前の事何様なにもして  
 上げたいが己も今は一文なし實の兄さの處へ借りに来た始末だ決して不義理の仕ねへから  
 今日この處へ堪忍して呉れ(善)其今日の處が後げ升ぬので夫でお願ひですのでムリ升る(又)  
 夫じやア家へ往ておせんに咄しをして呉れろ(善)如才なく申上升たが勿々のお腹立で私し  
 の密でも付け升ぬ(又)思へましい女つちよた己が一處に往てろう云て遣らふ(次)ア、コレ  
 又藏彼處の家の物は何一トツ手を付る へならあいや(又)ろりやア又何故よ(次)何故よと  
 ハコレ又藏貴様を養子に遣たの何の爲だと思つて居るアノ家を相續させ様爲だ夫に貴  
 様へ家の爲の少しも思へ酒と女に身を持崩し言語に絶へた日頃の乱暴有ふ事か菩提所の  
 本尊佛を斷りなく持出して質に置くとの實に呆れて物も云はれぬ其様も無法を働くものが

又と二人有ふと思ふか爰の家から出た貴様が放蕩故に木村屋の家に草を生してハ養家へ義  
 理が濟まぬゆゑ現在兄が弟を權へ入れたハアノ家を潰させまいと思ふからだ彼所の家の本  
 郎兵衛が屹と相續させねへ成ぬ家のもの何一トツ決して自由にさせぬから貴様は貴様で  
 勝手にしてろ(又)ろふ並べ立て云はれてハ一言もねへわけが己は兎もめれ善吉さんがとそ  
 く困つて居なざるものを何も見て居られねへから何かして上げて呉ねへ(次)貴様の  
 固より善吉さんの了簡方が氣に入ぬから勝手に困り成るがいひ(善)モン旦那何が私しの  
 了簡がお氣に入升ぬナ(次)私に隠して又藏の世話をされたのが氣に入升ぬ(善)旦那にろふ  
 云はれてハ何も早仕方がムリ升ぬモシ又藏さん何にかして下さい升ぬ(又)何仕様にも己が  
 身の上今聞く通りの始末だから何も氣の毒だが仕様がねへ(善)夫じやア貴所の私しを助け  
 ては下さい升ぬのですかへ(又)そふ云ふ譯じやアねへけれど(善)イ、ヤろふでムリ升ぬ夫  
 に違ひはムリ升ぬ今日旦那のお咄しで始めて聞た萬福寺の本尊様を撥た出し質にお置き成る  
 どの實に乱暴な成れ方其様を成る位な貴所だから何で私しなんぞの義理も糸瓜も思つ  
 て下さる譯ハムリ升ぬ是程のお人とは思ひ升ぬのでお世話をしたの私しの誤りへイモウ

宜しふもり升旦那といひ貴所に迄漸ふ不實に見放されて此方も義理のムリ升ぬ私しも覺悟致し升又藏さん跡でお恨み成い升なへイ大きにお喧ましふもり升たト立ふとぞる(又)コレサ、其様に腹を立すと宜いじやアねへか然してお前如何する氣だ(善)如何するもので私しハ首を絞めて死で仕舞升(又)馬鹿を云ちやアいけねへやナニ死ぬ程の譯もねへちやアねへか(善)實所の不實をお心ではそふ思召でももり升ふがモ、今迄黙つて居り升たが私しハ茲で打明て仕舞升(又)ナニ茲で打明て仕舞ふと(善)御當家の旦那もお聞きなすつて下され升ト又藏に向ひモシ又藏さん何時や私し共へお出なすつて私しが一寸器に往た其跡で何時の間にか私しの實印をお出しなすつて(又)コレ、夫を云て呉れて(善)ナニ云はなくつてサ私しの印形を盗み出して白紙へ幾枚もくお押なすつて方で金をお借り成つたのハ百兩たらせでムリ升せ(又)夫を云て呉れては困るたるふじやアねへか(善)困るのは私しの事でムリ升へね貴所は夫を吉原でばつばと遣つてお仕舞成つた其金ゆゑに善吉が今夜の難儀をして居升せ能くも彼様を事を成い升たね(又)彼りやア彼の時已がさん、謝罪たらふじやアねへか(善)堪忍しろと手を突てお謝罪成され升から今日迄

隠して何方にもやた事ハムリ升ぬが借主ゆゑに此間から責られるのハ私一人是をみす、助けて下さらないと、餘まり酷い成れ方私しも今迄實所欺されたのが悔しふもり升から此譯をスツぱり書いて貸主の方へ廻して置て跡で首を絞めて死で仕舞へバ私しの義理ハ立升から命を捨れバナニ構ふ事が有升ものかへイ左様ならお暇致し升ト立掛ける(又)コレサ、くマア一寸待て呉ねへ成程お前の腹立のさ、無理ど、思ひねへ皆を己が悪いのだから何と詫ても詫盡せねへ始末ソリヤア腹も立たらふが今の始末を善残して世間へ是を知らされてハ己一人の耻の仕方もねへか代々つ、村越家の先祖の耻とる事だから是斗かりハ善吉さん何卒堪忍して下さい(善)イエ、何と仰しやい升ても私しハ覺悟を極て居り升(又)サ、定めし己ハ悪からふが先祖に耻を欠されては居ても立ても居られぬいから何卒夫は免して呉れ此通り、ト手を突て頭を下けて詫る(善)居ても立ても居られぬい事を誰が仕たのでムリ升貴所が仕たのじやアムリ升ぬか(又)夫だから此通り謝罪し居るだらふじやアねへか(善)譬へ何と仰しやい升ても是斗かりハ聞れ升ぬ夫ともお金を下さい升か(又)夫だと云て今と云てハ(善)夫とやア矢張覺悟して(又)其處を何卒了簡して(又)夫なら助けて

下さい升か(又)サア夫(善)又藏さん何して下さるのでムリ升へ(又)斯様困つた事(ね)へ  
 ト腕組をして沈と思入(常)段一聞き申て見れば平氣に成て御當家にお世話に成ても  
 居られぬ譯(よ)矢張二人は此儘に(常)お暇致すでムリ升ふ(又)コレサ一お前達が知たと  
 じゃアねへ氣を揉すとも落付て居るがい(よ)夫でも何やら(常)此儘に(又)兄きに任  
 せて置くがい(よ)多(善)夫じゃア私しつ出掛け升ふかへ ト又立掛るを又藏止て(又)是善  
 吉さん重々已が悪いから詫の仕様もさいけれ其事さへ堪忍にし呉なされば其外の事なら  
 何様な事でも厭ひの仕升ぬ命を取られても恨みどい思ひないから何卒己を助けると思つて  
 外の事で腹いせをして下されコレ一生に一度の頼み其事斗りの免して下され ト沈と頼ひ  
 善吉も思入有て(善)夫程迄に仰しやる事夫でもども云ひれ升まい宜しふムリ升其事の負て  
 上か升ふ(又)有りや有難い夫さへ聞て呉なされハ跡の何様な事でもお前の云ふ事ハ決し  
 て負さの仕あいから打とも蹴るども殺さとも思ふ存分にして下され(善)そふいふ事さ(又)己  
 藏さん何か貴所の命がお賞ひすたふムリ升 ト是にて又藏宜しく思入有て(又)よふおす己  
 も男だ一旦遣らふと云た命未練のねへから何でもしねへ(善)夫じゃア貴所眞實に私しに命

を下さい升か(又)先祖の耻に代られねへから直でも宜いから殺して呉ねへ(善)夫じゃア  
 貴所のお身体ハスツパリ私しのものでムリ升せ(又)其馬鹿念には及べねへや(善)マ、そふ  
 覺悟が極つたらサア一處にお出成(升)又然して何處へ往くのだ(善)貴所を梅田へ連れて  
 往き升(又)ヤ(善)兼てお進め升た梅田へ往て御修行を貴所におさせ升最否應は云へせ  
 升んせ ト是にて又藏沈と思入有て(又)誰が何と勤めやうと是斗かりの行まいと心に極め  
 て居たければ大恩のある善吉さんが是程迄の心盡し何と無足にされ升ふ(善)夫あら聞て下  
 さい升か(又)如何にも梅田のお弟子に成升ふ(善)夫は有難ふムリ升貴所がは修行をすつて  
 下されハ夫斗かりを張合に面を覆つて借金の云譯をして廻り升ふ能く承知して下さい升た  
 (又)善吉さんお前ハ深切な人だナア ト感心の思入(次)コレ又藏貴様梅田へ往くと云ふが  
 辛抱が出来るか(又)私も男です遣ると云たら金輪際遣る處まで急度遣り升(善)そふお咄し  
 が極たらせん(急)是から直に梅田へお供致し升ふ(次)今夜ハ最九ツ過明日の事にした  
 ら宜からふ(又)ナアニ夜中歩行ハ平氣なものだろふ極つたら早い(次)夫ならん吉さ  
 ん頼み升(善)私しがお供致し升(又)此二人ハ跡で緩くり兄きお前に頼と升(次)何かの咄し



は跡で私が聞升ふ(常)思ひ掛けなく御富家の厚いお世話に成り升る(よ)何分共に宜い様に  
(善)茲の旦那が呑込んだら悪い様に成らぬから安心して居なさるが宜い又藏さん夫では  
お供致し升ふ(又)夫より兄き往て來升(次)確かりと遣て來い(又)お案じ成るな大丈夫だ  
ト立上る(常)左様なれば(よ)貴所様(又)是から宗旨を

ト是を木の頭 替すへ成めへ ト此模様時の鐘  
読への合方にて幕

二幕目

○本莊家詰所の場 ○同若殿御殿の場 ○同通用門窓下の場

本舞臺三間の間通し平舞臺正面銀襖上の方折廻して一間の杉戸下の方同斷具中に大なる對  
立此脇に大なる行燈を照し都て本莊家詰所夜の体爰に近習青木千助原退藏山岸藤三郎河合  
六之進羽織袴一本指各々太刀を傍へ置き居並び居る

しらべにて幕明く

(千助)昨年よりして井上式部公儀のお手の入てより其身を揮り當御殿へ上らぬやうに相成  
まづ案心と思ひの外此頃又候夜に入て筋かに御殿へ上る様子困つた事ではムらぬか(退藏)  
仰の如く此儀に付てハ大殿にも殊の外は心配遊ばされ既に式部を若殿へ推擧あしたる加藤  
長沼の兩人ハ長のね暇と相成昨日に替る浪々の身の上(藤三郎)我ハ共も一ト仕切ハ其仲  
間へ遣入らねハ肩身の狭いやうでムつたがどうハ強情に強通して彼等が仲間へ入らざり  
しは今と成てば互ハの仕合(六之進)夫にしても若殿にハ未だに御心付れぬして深くも彼に  
鞠れ玉ひ親しく御前へ召寄られ怪しき遣を涉信仰あるはお家の御爲何とも以て心ならず

備でムる(千)何か御前を遠ざけて再び彼が参らぬ様致したいものでムるトしらべにて下手の杉戸の内より柴田多一郎羽織袴提刀にて出て来り宜しく下手に住ひ(多一郎)各々に存じなるや今宵筋かに井上式部當御屋敷へ入込升る(千)スリヤアノ式部が若殿の御前へ推参(四人)致せしと(多)借に夫と突留し故只今早速御家老へ内々お知らせ申てムる(千)シテ御家老に御出席にムリ升るかな(多)何か知らねど彼が御殿へ上りたる早速に知らせよと兼て拙者へ仰付故定めし御所存にての事と存じられ升(千)何か御家老の御斗らひにて首尾よく彼を退けたいものでムる(多)拙者に於て其事はいかにも覺束なく存じ升るト申す譯ハ此程荒川左右殿御家老の仰を受け刺客と成て参りし處豈斗らんやおめくと立歸つて彦家老へ邪法にあらぬ云譯なせし正しく式部が舌頭に感へされ終に彼が手の中に落入たるに相違なし彼不思議な術有て斯迄人心を蕩かせ若殿には勿々以て御改心有ふやうのなした云て此儘打捨置き彼が罪狀發覺さすハ夫こそ御家の御大事忠義を研は今此時(千)シテ多一郎殿の(四人)御所存ハナ(多)御家老の御所置を待すでもなく今宵彼が歸りを待うけ(千)スリヤ(四人)式部めを(多)ア、コレト是を道具替りの知らせ 筋かに召れ

ト五人示し合を摸樣宜しく早舞にて此道具廻る

本舞臺三間の間通し平舞臺正面床の間三社の神号を掛け違柳地袋の詠へ宜しく夫より續いて白地へ墨繪の山水を書たる詠への唐紙上方一間折廻して同断下の方同断都て立派なる飾り付本莊家若殿御殿の休茲に真中に若殿宗秀黒の羽織袴好の形にて袴を下て座し後ろに小姓一人扣へ刀掛に刀を掛け有上の方に井上式部惣髮鬘細き後茶笠白衣に被布の下へ直垂の下を附け神主好の拵へにて傍らへ白木の八足机に書物を載せ講釋の濟とたる摸樣下方に近習三浦仁藏野村惣三郎荒川左右

羽織袴にて扣へ居る此摸樣琴唄にて道具止る

(仁藏)毎も乍ら先生の微細を盡せし講義我等が肺肝を貫かるゝ様に存じ升る(惣三郎)實に神道の神道たる誠の道と申ては是より外にハあい譯でムリ升る(左右)拙者ハ始め先生に敬對申せし夫故に一入身に染み必根に徹し有難く聽聞致してムリ升る(宗秀)左右には今の講釋何じやスツパリと分つたか(左)未だ昨今の拙者分る處もあり又解し兼る處もムリ升る(宗)ム、ろふで有ふ今日の先生の講釋ハ高尚に亘つた處も有たれば其方にハ未だ少し解せ

ぬ處が有たて有ふ何でも祓と永世を精出して勤るがよいぞ先生左様でムリ升ナア(式部)御  
 意の通り被永世の二行を以て貫き升るより外に修すべき事とてムリ升ぬ御前にハは修行  
 も過半お進み遊ませハ被永世の妙所をも今ハ御手に入りし御様子如何にも感心仕つり升る  
 (宗)是といふも先生の曾御丹情による處あれ共修行未熟にて先生の門に入て早三年にも相  
 成と是ぞと云て發明したる事もなく只夜分兎角兼る性分ありしが此頃にては枕につけハ  
 忽ちに苦もなく眠る様になりしハマア是丈が修行のれ蔭と喜んで居る位の事何共赤面の至  
 りでムると(式)イヤ／＼左様でムらぬ某し借に見る處有て申上る事にて實に御前の修修行  
 への驚き入て居り升る(宗)その様に褒られてハ愈々恐縮致とてソリヤ自分にも慢心にて少  
 しは出来た心もあれど何日や先生から掛けられた一ツの問是にハ殆んど困却致す(式)  
 夫迎も被永世の二行を以て修貫き遊ませハ彼の朱子の所謂一旦豁然佛家に申す大悟徹底の  
 場合にも必らぬお至りにムリ升ふ(宗)先生自分にいけやうか(式)神の誓ひにムリ升れば苟  
 くも人体を得たる者にいけぬと申す所以ハムリ升ぬ(宗)自分もろふと思ふて居れど實に是  
 への困却致す(式)ト此時下手より近習一人出(近習)ハッ申上り升只今家老勘右衛門事目通

を願ひ度とお次にひかへ居り升る(宗)ナニ勘右衛門が参りしとや ト不審の思入にてヨ  
 イハ是へ遣せ(近習)ハ、ア ト近習引返して遣入る(宗)先生只今是へ参り升るハ當家の家  
 老でムるが兎角道の嫌ひな奴で何か理屈をいひに参ると見へ升が其お心得でお扱ひ下され  
 い(式)委細承知致し升た ト合方になり下手より前幕の川瀬勘右衛門繼上下にて出て來り  
 宜しく下の方へ平伏する(宗)ナ、勘右衛門すゝめ／＼(勘右衛門)然らハ御免下さり升ふ  
 ト下手宜き處へ住ふ(宗)勘右衛門未だ始めて有たらうが是に居らるゝが井上先生じや(一  
 勘)左様にムリ升か○イヤ是ハ始めて修意得升が拙者事は當家の重役川瀬勘右衛門と申升  
 る(式)拙者ハ井上式部と申升る(勘)以後ハ御別懇に(式)お談事申で(兩人)ムリ升ふ(勘)扱  
 ばや先生にハ先年中より當若殿ハ厚く御教授下さる段御禮申上り升る(式)改まつたる其お詞  
 固より不學短才の某し只今のお詞甚だ恐縮仕り升る(勘)疾より先生に拜謁なし御禮も申  
 上へき處主用繁多に取紛れ延引の段偏に用捨下されい(式)御丁寧なるは挨拶痛み入升る  
 (勘)斯く申さ拙者事も何か先生の御門に入り修行等も致し度所存にムれハ何分宜しう願ひ  
 升る(式)無智文盲の某しなれど神道の極意一心を知り明らむるの一事に置升てハ聊さか心

得居り升れば必らず御案内申でムり升ふ(勘)早速の承知先へ添けあふ存せむ夫に付て拙者事は是迄何一ツ學びし事もムらねば突然修行も致し難く其前方に一ツ二ツ道の次第をお尋ね申度存じ升るが苦しからせり(式)此身に辨へ居り升る事なれば何成とも御答へ申でムり升ふ(勘)然らば是にてお尋ね申さん〇若殿御免下さり升ふト合方きつばりと成り世に神道數派あり中に就て先生には唯一の二字を立ちるゝが抑々唯一の二字に於る他門他教を雜へざる神道純萃の稱ある事吾人共にしる處然るに傍身或時佛法に亘り經文祖祿の文意を論じ又或時は儒典に入り仁義五常を講ぜらるゝは三道一致の教ならずや然れば唯一の稱號何に依て立られしや其謂れ承まはりたし(式)唯一の二字に於ての傍疑ひ去る事なれば得某しが立る處にあらざり(式)二ならざると云る神語に基き古へよりして神道に是を用ゆ又た唯一の意味に於る他門他教を雜へざるの謂に非ぞ天の天涯地の地涯神在まぬ所もなく森羅万像悉く皆神明の徳に依て生々せざる者もあく佛法儒道にいふもさらなり人間鳥獸一切万物形千差万別ありとも其根本は唯一にして神徳普ねく行渡らざる處なければ是を以て神道に唯一の二字を稱するなり(勘)唯一の二字は了解せり成とも世間の神司たる者

祓を唱へ鈴を振り四民の求る所に應じて利生を祈る事なるに御身一人神道を教の道とせらるゝは事新らしく覺へ申すが此義の如何に候や(式)四民の求めに利生を祈るは即ち神道の一部分にして佛家に所謂方便なり誠に神の道と云つば勿体なくも天照太神一面の御鏡を御子忍穂耳尊と授け玉ふ是神教の始めにして即ち太神の命を受け天津兒屋根命教法の事を司とる依て神道の祖神と崇む例せば唐土虞舜の時契を以て司徒とあし教の道を司とらしめしと同一轍にして萬民を教へ導くこそ即ち神道の本旨なり(勘)凡そ神祇の職あるもの神前に額づき鈴をふり幣を取て祓を唱ふるは通常一般の事なれば永世の傳と稱するもの未だ曾て聞ざる所如何なる事に候や傍説明下されたし(式)夫ぞ無聲の祓にして息を數へて一心の煉立妄念を拂ひ雜慮を止め内心清淨あらしむるの一具にして魂鎮めの法と名づけ古へより是を傳ふ(勘)世に神道者と稱するもの未だ曾て息の事を述ぶるを聞ず傍身一人息の術を以て神道の極意とせらるゝ事教の異なるものなるや(式)是又某しが新説に非ず人々内心に積貯ふる諸々の罪穢れを拂ふは息の眞術に依らざれば是を拂ふの方便なし是に依て一身の身穢ぎ神時清淨の地位に至る則ち禊の大事にして既に伊弉諾尊の御詞に吹拂ふの息神

とあると舊事本紀に是を載せる又中臣の祓にハ氣吹戸主の神と號し其外諸書に是を説けり  
 (勘)シテ又とほかみろみためと唱ふる文字の意解ハ如何に(式)附會の説ハとまへてあれど  
 心を磨くの一具にして所謂佛法の陀羅尼に等しく解を附ぬをよしとなす(勘)木食斷食の行  
 に於てハ如何なる利益の有事にや(式)是又一つの方便にして心を得るの階梯あり(勘)文字  
 書物に寄りあして何を以て教へ玉ふや(式)道ハ天地に先立て文字の預る所にあらや(勘)不  
 立文字は西天の佛法にてハ非ざるや(式)神といひ佛といふ元是水波の隔てのハ其本体をい  
 ふ時ハ同一にして二物に非や(勘)罰利生といへる事正しく驗しの有る事にや(式)自然に受  
 くる吉凶禍福(勘)神變不思議の奇瑞は如何(式)不思議なるこそ是不思議(勘)シテ又神祕の  
 傳へといふ(式)是ハ神道の大事にして堯も丹朱に傳ふる事能ハざる所のものにして是を  
 不傳の傳と號く(勘)其神傳を受くる時ハ如何なる利益有事にや心得の爲承まりたし(式)不  
 傳の傳は大神の神祕にかへり勿々以て舌頭の能ざる所に非らされと云はねハ事を覆ふに似  
 たれハ詞の限りハ説き申べし元人ハ心の心といふハ元來清淨無垢の者にして即ち神明同体  
 なりといへど世々肉身の請け來る不淨の爲めに覆ひ隠され我と心を知る事能ハざる種々の罪



を造り根の國に落入り苦惱に沈む是則ち迷ひなり神明是を憐み給ひ救を設け一身の罪穢を  
祓ぎ神と同根同体の地位に至らしめ不生不滅の本分を會得せしむる眞傳を残し給ふ漢儒の  
是を知姓といひ佛法にて見姓といひ又大悟と名く至る處ハ一つなりといへども其階梯は  
皆異なり吾神道の法式ハ日本固有の妙道にして異國の人の夢にたる未だ會て見ざる處なり  
此心諸道の本源にして是を會得する時ハ諸々の迷ひを去り内心明らかある故に神惟の道に  
叶ひ不老不死の全体を會得ると斯く説明ハ致すといへど自ら修し得て其地位に至り冷暖自  
知するに非されハ思ふて百年を経るとも人智を以て知る事能ハざる處なり是高尙の一著に  
して容易に説ざる處あれど大事を洩して申なり未だ此外に修尋ねの趣かあらば何ヶ度にて  
も尋問あれ神道の極意秘密の大事修合点が參り升たかト是にて勘右衛門沈と思入有て  
勘)ハ、明了なる修答話種々感服仕つる(宗)どうじや勘右衛門會得が參つたか(勘)ハ、恐  
入升てムリ升る(宗)然らハ其方も入門致と有ふナ(勘)如何にも入門ハ願ひ升れど差當つ  
て御用繁く此身に寸暇を得升ねハ折を見合せお願ひ申でムリ升ふト眞實には服さぬ思入  
(宗)ナ、夫がよい人の人たる道を踏にハ是からでなれば實にゆかぬ勘右衛門其の方も知る

如く此事に付てハ父上深く御案事成れ尤も邪まの道とも思召さぬやうじやが公儀を揮る所  
 おれハ夫是のお案事ならん長沼加藤の兩人杯も是が爲めに涙々せしハ實に不便に思ふて居  
 るが其方此道を學び得て正しき道といふ事を共方より父上へ申上て呉たなら必らずは必  
 まるて有ふ是ハ偏へに其方に頼を置ぐよ(勘)仰の趣委細承知仕つり升る(宗)寸暇もあらハ  
 折し咄しに參るがよい(勘)有難きその詞必らぞ參上仕つり升る今宵ハ是にては免を蒙る  
 でムり升ふ(宗)チ、隨意に致すがよい(勘)左様ムらハ井上先生(式)川瀬氏(勘)又其内に  
 ト兩人むろりと思入是を道具替りの知らせ(兩人)御意得るでムり升ふ

ト唄に成り兩人挨拶をする此儀檢宜しく道具廻る

本舞臺三間の間 正面一間瓦家根付黒塗の門上の方一面生海鼠壁に長家の窓を見せ下の方  
 同断ぞつと下手舞臺前より奥へ掛て斜に草土手の松並木へあり

都て虎の門内本莊家通用門窓下の体時の鏡風の音にて道具止まる

ト上手より以前の柴田多一郎袴の裾を端折大小にて短き抜身の手籠を持ち出る跡より以  
 前の原退藏付て出て來り(多一郎)最早式部が歸りの刻限(退藏)出るを待てとつた一ト討)

多)コレ ト押へて兩人通用門の左右より詰掛るしんみりとした合方に成り門の酒を靜か  
 に明け野澤鐵教坊主替に以前の式部の衣裳をそつくり着て網代笠を冠り出て來る多一郎鎧  
 を突出ぞ一寸外して下手へ行掛る退藏ツカ〜と往き抜掛る鐵教笠を取て振りかへり(鐵  
 教)誰じや(退)や其方ハ(鐵)野澤鐵教でムる(多)野澤氏か ト一寸鎧を後ろへ隠し 今お  
 歸りでムるか(退)シテ先生にハ(鐵)跡より直に歸るでムり升ふ(退)スリヤ先生にハ(多)未  
 だお跡が(鐵)手前はハト足先へ出升たシテ君達ハ夜中何れへお出成れ升ふ(退)アノ拙者は  
 アノ ト詰る(多)一寸と錢湯へ(鐵)イヤ〜何も怪しい(多)ヤ(鐵)こつろりお遊びでムり  
 升ふナ(多)コリヤスツパリと當られ升た(鐵)手前は是にてお別れ申す ト鐵教靜かに下手  
 へ行く多一郎退藏ハ又潜の左右を忍び伺ふ此摸様木なしにて下手松並木を残して

窓下の道具斗り半分逆廻しに廻す

本舞臺生海鼠壁窓下の續き道具下手すつと奥深く松並木

野澤步行乍ら道具治まる

ト奥の方より以前の式部茶色の被布着流し網代笠を冠り靜かに出て來る(鐵)先生(式)野



澤大儀さわだいぎで有あたた（鐵てつ）少すくしも早はやく ト式部しきぶ點頭ちんとうき兩人にん花道はなぢへ掛かる上手うでより多おほ一郎いちろう退藏たいざう出いて花道はなぢを透すかし見みて（多おほ）彼かれの儀ぎに（退たい）ッレ ト花道はなぢへ行ゆふとする此時このとき土手どての蔭かげより長沼ながのま澤さわ右衛門ゑもん返へん人好にんこのみの拵こしらへへにて出いて兩人にんを一寸支ちよつへ立廻たちまわりト長沼ながのま刀かたなを抜ぬいて兩人にんをむね打うちにする兩人にん叶かとす上手うでへ廻まわて這入はいる花道はなぢの兩人にん笠かさを取とり振返ふりかへり舞臺ぶたいを見込みこむ（澤さわ）お構かまひなくとも ト式部しきぶ點頭ちんとうを木きのうしろ澤さわ右衛門ゑもん靜しずかに刀かたなを治おさめる下座げざの三重みづゑに在あり

式部しきぶと鐵敵てつてきの靜しずかに向むかふへ這入はいる此摸樣風このもようかぜの音おと三重みづゑにて幕まく

三幕目

○梅田村鳥居前うめだむらむねまへの場ば ○同別當所どうべつたうじよの場ば ○同神明本社どうしんめいほんじやの場ば

本舞臺ほんぶたい三間さんけんの間少まじ上かみへ寄よせて古ふるひたる黒木くろぎの鳥居とりゑ繩なはを張はり上下じやうげ一面いっぺん古ふるひたる玉垣たまがき上手うでよき處ところに紅葉もみぢの立木たたまき玉垣たまがきの内所うちどころと立木たたまきのあしらひ後うしろろ一面淺黃いっぺんせんわう幕上まくじやうの方樹木かたじゆもくの張物はりものにて見切みきりり下しもの方生垣かたせいげんの見切みきり舞臺前床几ぶたいまへしやうぢ二脚並ふたあしならべ都みやこて梅田村神明宮鳥居前うめだむらむねまへの体てい技ぎに上手うでの床几しやうぢに序幕じよまくの手先てまき二人腰ふたりこしを掛かて居ゐる下手しやうげの床几しやうぢに門中もんぢゆうの仕出しだし二人掛ふたりかり居ゐる

此摸樣宮神樂このもようみやかぐらにて幕明まくあく

（手先てまき○）もし貴所方あなたかたへ此神明様しんめいさまの傍講中はなわかしやうのお方かたでムリ升のぼかへ（門中もんぢゆう○）左様さやうでムリ升のぼ私わたくし共どもの方かたでハ講中かうぢゆうと申まを升のぼぬ皆門中みなもんぢゆうと唱なへ升のぼよ○左様さやうでムリ升のぼか毎日まいにちく夥多おほたしい御參詣ごさんげいで大層おほに御繁昌ごはんぢやうな事ことでムリ升のぼねへ（手先てまき△）嚙か上あり物ものも大層おほな事ことでムリ升のぼふねへ□ナアニ茲こゝの先まへ生様なまさまは無欲むよくなお方かただから餘計よけいな物ものを持もつて行ゆけハ中なかくお取成とれなりハ仕升ししぬから上あり物ものなんぢは有ありハ仕升ししぬのサ○夫それでも大そう有難ありがたい事ことをお授まげ成なるろうでとから定めしお禮れいが澤山しつやま有ある事ことでムリ升のぼふ（門中もんぢゆう▲）ナアニお前まへさんお禮れいさんぞと云いてハ一錢せんもお取とり成なりハし升のぼぬから

修行に来る者が自分で喰た丈の入用を置いて来る斗りてムリ升よ口夫も大体は只が多いから  
 先生の手先に何れも少しも残り仕升ぬのサ〇へエ、夫りヤア不思議でムリ升ねへ喰た物  
 さへ置いて来る人が少なくて大体の食倒しヒヤア追付く咄しハムリ升ぬねへ△夫で何して  
 暮しが立升ね口其處が神事でムリ升から先生ハ至で其日暮しでお出成い升が其時ハの  
 入用事の欠ないのが妙でムリ升ね〇ろふでムリ升ふよ何れ不思議な事なけりやア斯様  
 に人が欺されてイエナニ信心をしやアし升ぬのサねへ口ソリヤア眞實に左様でムリ升よ木  
 下川の弟息子で又藏さんと云ふ人あんどハ夫ハハハ乱暴で箸にも棒にも掛らなかつた人〇  
 ノッ實に甚い無法な人であつたのう▲ソウソウハ其人が不もし愛の先生のお弟子に成てから打  
 て替つたあつた人になり升たよ私等よりハ新しければとすべらしい修行に成升た△其修行  
 といふのハ何様な事を仕升のたへ口ナアニ這入ては覽なさらなけりやア分り升ぬのサ〇夫  
 でも何と云ひ様有そふな物でそねへ▲門中に這入らない人ハ咄しハ出来升ぬよ〇夫  
 ぢやア人に咄してハ悪いのでそかへ口如何でも咄す事ハ出来升ぬよ、ト此以前下手より序  
 幕の采女好の形にて日傘を持ち出て来り此様子を見て居て此時すつと前へ出る、是ハ采女

横宜ふお出成れ升た▲さうお草臥でムリ升ふ(采女)貴所方も宜ふは精が出升ナ、ト上手へ  
 向ひ、貴所方ハ何か御見掛申た様ふチ、夫ハ此春木下川の梅林で涉一處に成升たナア〇  
 ナ、彼の時の細君でムリ升たつけスツパリ見それ申升た、ト△しきりに〇の袂をひき△  
 急ぎの用が有ぢやアねへかぐぞろして居ると遅くもるぞ〇違へねへそふつけ細君大き  
 に失禮し升た〇ドレ急いで行かにやア間に合め、ト兩人采女ハ氣兼ねの仕打キヨロくし  
 乍ら早足に上手へ這入る(采)兼て噂に違ひ多く此邊りハ鶴の目鷹の目口エ(采)何たかキヨ  
 けして往升たが様子の悪い人達でムリ升る、ナアニ信心のない者ハ皆あ彼様でムリ升  
 よ(采)ろふト口ハ云れ升ぬ涉門中の其中にも跡戻りがして不身持に成たお方もムリ升  
 るし又信心のない人にも立派に正しい人もあれハ其様な事は仰しやらぬ者でムリ升る口夫  
 ハそふでムリ升が修行の有者ど無い者ハ何しても違ひ升者を(采)然して貴所方は何程涉修  
 行が出来升たへ口エ、私共ハ中ハ以て▲トント修行が出来升ぬ(采)それは覽成さい升  
 殊に今の二人は惜にそれ〇とも分らぬ人に餘りつかハ仰しやらぬが宜しふムリ升る口誠  
 に恐入升てムリ升る、ト宮神樂に成り鳥居の中より序幕の常吉羽織着流し好の形にて出る

跡よりおよし丸鬚髻若年増好の形小さお包を持出る采女を見て(常吉)コレハ采女様是から  
 木下川へ参らふと存じ升た處宜い處でお目に掛り升た(采)貴所は常吉さんおよしさんも  
 一處にナ、元服なされ升たナ大層よふお似合成れ升た(よし)今日ハ二人連立て今先生へお  
 禮に出升て是から木下川を廻り升のでムリ升る(采)然して何ぞ御用でもムリ升てか(常)イ  
 ヤ別に用事ハムリ升ぬがお世話に成し此身の禮采女様マア是へ一寸お掛成れて下さり升  
 セ ト合方に成り采女會釋して床几に掛る兩人は中腰にて 段々との丹精で私しも此  
 およしも多門に入て見升れば長い間の心得違ひをつくくと思ひ知り升て殊に二人が身の  
 淫奔不忠不孝の大罪を心付てハ中々に濟ぬ事でムリ升れば二人が中其日限りフツ、リ  
 互ひに言葉も交すまいと誓ひを立て、別れ、私しハ木下川の治郎兵衛様のお口添で元の  
 主人へ立歸り(よし)又私しは善吉様のお世話にて四方のお家へ多奉公に上り升て一生懸命神  
 明様へ朝夕お詫を致して居り升た(常)其心が届き升たが思ひ掛なく主人より目出度別家を  
 申し付り夫れに付てハ此のおよしを家内にもと有難い主人の許しに取り敢えず是の處ろ  
 へ知らせ升た處(よし)飛立思ひで御主人へお暇願ふて元へ戻り(常)夫婦と成ては主人から家

までお恵み下され升た是といふのも先生始め貴所方の皆お蔭と今日ハ二人してお禮廻りに  
 出掛升てムリ升る(采)夫はマア結構ふも目出度事でムリ升た嘸先生もお悦びでムリ升ふ私  
 しに置ても此様なお嬉しい事はムリ升ぬ此上共に精出しては修行が大切でムリ升る(常)是  
 からは一生懸命お禮の修行をバ致す心でムリ升る夫はふと又是から兩三軒お禮に廻り升  
 れバ是でお別れ申升る(采)能い處でお目に掛り宜いれ咄しを伺ひ升てムリ升る(よし)左様を  
 れバ采女様(采)又其中お悦びに上り升る(よし)お待ち申て居り升る口私等も其處迄▲一處に  
 往き升ふ(常)何ぞ木下川へお言傳ハムリ升ぬか(采)程なく私しも戻り升れば別々用事はム  
 リ升ぬ(常)左様なればお別れやそでムリ升ふ ト唄に成り常吉およし口▲付て宜しく向ふ  
 へ這入る唄切れる(采)吾妻橋から既の事危ない處を助かつてア、云ふ心にると云ふも神  
 明様の昔お恵み斯程尊い大法もお上に於てのお疑ひ明日をも知れぬお道の成行き是を思へ  
 ハ誠とに難面嬉しき物ハなしじやナア ト唄に成り采女宜しく鳥居の内へ這入る合方に成  
 り下手より坂田啓次郎黒の羽織着流し一本指にて出て来る是を一處に鳥居の内より安西一  
 方白衣に淺黄の袴内弟子の袴へ宜しく竹箒を持出て來り兩人顔見合せ(一方)コレハ啓次郎

様よふ御参詣でムリ升た(啓次郎)其方ハ一方迄の境内のお掃除かる(一)左様でムリ升るは親父様にハ病氣の様に承まはり升たが如何では出成れ升(啓)此頃は大きに快よふムリ升れば此分での日ならず全快致すでムリ升ふ夫に付て今日ハ親共の名代に先生へ申上ね成ぬ事有て態々今日参つてムる(一)何事かハ存じ升ぬが丁度先生もお内でもリ升るし只今采女様もお出に成升てムリ升る(啓)スリヤ隼人殿の内室にも見へられて居るとか夫ハ幸ひ直様是より(一)毎の様に庭口から(啓)イヤー其前方に本社へ参り拜禮を致して参らふ(一)左様あれば私しもは本社迄参一所に(啓)然らば一方殿(一)ドレト是を道具替りの知らせ御案内を致し升ふト兩人鳥居の内へ進入る

此模様宮神樂にて道具廻る

本舞臺三間の間常足の二重折廻しの茅屋根椽側付杵ぬぎの石二重上の方一間積き家体神前の模様筋附け詠へあり正面詠への唐紙欄間の内法へを張り上手三尺葺下しの家根下見板にて見切り下の方奥へ下げて一間の積き家体茅屋根椽側同断障子を建て平舞臺上手頃合なる松の立木石燈籠所々庭木をあしらひ下手生垣の見切り都て井上式部住居の体茲に二重の

上手神前へ向つて井上式部惣髮髻袴衣裳にて神拜の模様宣しく

合方にて道具止まる

ト直に床の淨留理になる 上「行空の幾世變らぬ秋の日に變る習ひと現世の人の若腦を救へんと神に誓を掛巻も畏き道の奥深く極意を極めし大導師井上式部正鐵ハ神ならぬ身も自から澄める心の水清く身に降掛る法難の未然を悟る非凡の聖智猶も應護を仰がんと祈誓を込むる其折柄障子押明け入来るハ三浦隼人が妻采女足音静かに歩行よりしとやかた手を突ゆれば ト下手の障子を明け以前の采女出て来り宜しく下手に手を突へる 上「夫と見るより此方を身返り ト式部正面を向ひて(式)誰ぞと思へハ采女宜ふ見へられた(采)先生にハ今も乍ら御機嫌宜しふ(式)其方も無事にて重疊ハ今しがた池田やの常吉どのがおよしとの同道にて見へられた(采)只今お鳥居の前でお目に掛りお咄しを承まはり升たが誠に結構多事でムリ升る夫にハ引かへ私しが今日上り升たはハ先生へ密くにして申上度い事がムリ升て(式)遠からず内法難の来るを告に参りしか(采)スリヤ先生にハ御存じで(式)心に響く事有りて正鐵疾より承知致す(采)御承知とあれハ改めて申上るに及び升ね

と二代の間御艱難其御丹精の甲斐もなく又もや御身に災ひの掛るといふの残念な事にムリ  
 升る 上「そいろ涙にくれければ正鐵莞爾と打笑とて(式)兼て期したる事なれば今更驚く  
 可きに非ず昔よりして一道を新たに開らく者の身に法難に逢ぬ者はなく成とも佛徒の者の  
 みにて吾皇國の道の爲め法難に掛る者へ今日正鐵一人のと思へば冥加に叶ひし我身と心嬌  
 しく覺ゆる多り只思ひやるの御身の夫我に代つて牢死せしを茲に至つて徒らとあしつる事  
 の本意あさ御身が心中嘸かして察し入る(采)勿体なひ其お詞今も實所の仰の通り佛法の爲  
 命をば捨たる人の數あれを吾神道の御爲に一命捨しつ夫の果報運添ふ妻が身の面目嬌し  
 ふ思ふて居り升る(式)其魂しひを見抜き故某し仮命世に在らざとも道の絶ゆる事ありと  
 と安心致し罷在る(采)及ばず乍ら私しも道の爲に命をも厭ふ心へムり升ねと何を云にも女  
 子の悲し(式)其斟酌の常の事型が日上の御手に逢ひ最早世になき正鐵が跡にて道の相  
 續なと者門人の其中に指を屈する程のあれと我が骨髓を得たる者の御身ならで外にあし  
 一切後事を託せんと御身の來るを待て居し上「未然を悟る正鐵が詞に今は是迄と(采)  
 凡人あらぬ先生の其お詞を聞く上此身も覺悟致し升る(式)よ、洗石は采女シテ我に別れ

て其跡の歩身の覺悟の如何なる予 上「尋に采女への威儀を正し(采)女の身にて嗚呼ケ間敷申  
 上るも恐れあれと今はお道の一大事心の内の有丈をア上るでムり升ふ ト誂の下座の合方  
 に成り 古郷に有ての道を行じ難しといふ古人の金言貴所にお別れ申せし上り一度當地を離  
 る覺悟髪を下して墨染に身へ尼法師の姿となり諸國を廻り師に便り宗旨の極意を探  
 り飽迄自心を鍛へし上再び當へ立戻り命を懸て神傳を弘むる心にムり升る 上「詞ぞいし  
 く述べければ正鐵小膝をいたし打(式)ホ、チ大丈夫ある其精神假に出家の姿となるも則ち  
 神の導きにて和光同塵を説給ふ人を助くる剃髮染衣の身となりて諸國を修行致すに採女  
 といふ名の何とやら ト少し考へて 諸道の極意至善に止まる事を知るの文字を其儘名も  
 知善尼と改むべし(采)女子の身にて大膽な分に過たる身の覺悟をお叱りもなく其上に知善  
 といふ名を玉ひる事有難ふ存じ升る(式)未だ此上に幾千の難に難へ加へるとも元神明の哲  
 なれば貫く時節のあらざらんや日月の地に落ち大山の崩れて沼と成るとも神の哲の違ふ可  
 きとされども是を擔任なと人あき時は如何せんくれく歩身を頼み置ずよ(采)及ばず乍ら命  
 に掛け道の必らず守護致せばお心安く思召し下さり升(式)斯く一切を委ぬる上の型が日事

に及ぶとも心に掛る雲もなし(采)とはいへ是が今生のもしお別れにも成ふかとお名残惜う  
 存じ升る(式)左様に思ふも理るれども皆神明の計らひなれば嘆の愚痴の至りなるぞ(采)  
 思ひ捨ても捨兼る心の内のやるせなさ(式)其所を捨るが修行の力じや(采)といへ何うも  
 (式)未練で有ふが(采)ハ、ア 一ハット斗りに暫らくは詞はなくて差うつひく折柄次の一  
 ト間より茲に入來る啓次郎 ト下手の障子を明けて以前の啓次郎出て來り宜しく下手に住  
 ひ(啓)先生御機嫌宜しう(式)身身ハ坂田啓次郎殿(啓)只今は參り掛りお咄し半ばと存せ  
 し故暫時差扣へ居り升てムリ升る(式)スリヤ二人が断を聞取られしか(啓)只今しがた參り  
 し事故悉く承まへらぬと近々法難の來る事を早御承知にムリ升るな(采)私しも其事を申  
 上んと參りし處先生に疾よりして御存じ有ての今のお断し(啓)御承知の上改めて申上  
 るに及ばぬ仕義公儀に於てハ此道を怪きものとお認られハ所詮死がれぬ今度の法難先生に  
 ハ大切ある身の上候へば一ト先當所を御立退有て上野國碓氷郡には手前知るべのもの  
 もムリ升れば其方へなり何れへなりとも身身を忍び差當つたる法難を避け暫く世間の成行  
 を御覽遊ばさるやう此儀親共參上致し申上可き管の處病中故に名代に私し參上致してムリ

升る(式)先ハ親子の御心添 添けなふ存る去乍ら誠の道を修行せらるゝは親父には似  
 合しからぬ仰あり啓次郎殿愛をよく承知致されよ ト床の合方 普天の下本土の漢正地に  
 非らざる處なけれハ何處の果に隠るゝ共公儀の網の羅りし上り身を忍ばそ可き所あらんや  
 逃隠れたる其先に御召捕と相成時ハ正鐵一人の耻辱に非ぞ天照太神の御教を穢し奉つる勿  
 体なく夫のみあらす法の爲め時の政府に忌と惡され其身に難を請くる事例しハ世々に少る  
 から中既に執鸞日蓮なども數度法難に罹りしより終に素志を貫くに至る今日正鐵道の爲め  
 法難に掛らぬハ吾皇國の神教を何か貫く時あらんや此度の法難ころいよく道の興るべき  
 萌と思へば正鐵が身の悦びハ如何斗り只此儘に公邊の御斗らひを待より外某しが所存會て  
 ムらぬ身未だ若年なれと志さしも常ならねば斯斗りの道理會得成ざる事有まじ篤と心  
 に了解なれ 一身を盤石に動据へし明師の詞に啓次郎ハット斗りに兩手を突き(啓)ハ、恐  
 入たる其仰只ハ身身を大切と存せし儘に淺慮にも拙き所存を申上しが只今のは詞に始めて  
 夢の覺たる心地ハ、恐入升てムリ升る(式)流石ハ坂田の子息多り能く予了解致されたり立  
 歸つては親父にもよしなる此由お傳へ下され(啓)斯く決心の上からは今は何をか申そべ

き未だ時節の至らざるを申す返すも残念至極(采)啓次郎さま(兩人)世の成行さ  
 互ひに顔を見合せて涙呑込み是處へ安西一方走り来て 下手より以前の一方出て(一  
 方)只今伯耆守様の若殿様が参詣の由先觸がムリ升た(式)ナニ若殿の参詣あるとか  
 本社の掃除の届いて居るか(一)神前の掃除万端先刻致して置升た(式)鳥居前まで迎ひ申  
 せ(一)畏せり升てムリ升 一方下手へ這入る(式)遂に一度も出なかりし若殿が今日俄  
 の御参詣服改めてお目に掛らん二人に未だ用事もあれハ暫く是に待て居て呉れよ(采)畏  
 まり升た私共は此處に(啓)お待申て居り升る(式)ト着替を致さるか 一奥の間差して  
 立上るを道具替りの知らせ双方ひつぱり宜しく

風の音三重にて此道具廻る

本舞臺三間の間高足の二重三方折廻して檜皮葺の庇高欄付の様側奥中に高欄付の階向ふ奥  
 深く一面に御簾を下げ神鏡を飾り上の方少し奥へ下げて一間の續き家体庇様側同斷御簾を  
 下げ平舞臺大なる杉の立木所々松杉のあしらひ石燈籠など宜しく上下樹木の林にて見切り  
 都て神明宮本社<sub>の体</sub>





風の音合方にて道具止する

与いとゞさへ物の淋しき秋風に梢を拂ふ夕日影さそが神代の遺風ある梅田の里の宮造り  
結ひ廻したる神垣の内やゆかしき赤心を慕ふて爰に入來るハ當時天下の閭老たる松平伯耆  
守が嫡子本莊宗秀案内につれて静しと威儀嚴かに歩行來るト小鼓のあしらひにて下手  
より以前の一方先に本莊宗秀麻上下大小草履にて出て來り直に二重へ上り(宗秀)案内渉苦  
勞もふ宜しいト是にて一方下手へ還入る宗秀大刀を傍へ置き神前へ拜をさる事宜しく  
与心静かに拜禮あし待間程あく彼邊より裝束正しく井上式部悠々然と歩行より禮儀乱さず  
出迎ふト上手より以前の式部烏帽子裝束好の形にて出で來り下手の方へ宜しく住ひ一禮  
をさる 与見るより此方は頭を下げ敬ひ玉へハ式部ハ聲掛け(式)ア、イヤ夫でハ却て痛入  
升る先お手をお上げ下され(宗)師を敬ふハ弟子の分際先先生から(式)先君侯より(宗)然ら  
ば共に 与互ひに一禮會釋さし(式)思ひ掛なく君侯には能ふころの涉參詣(宗)始めて當社  
へ參詣せしが境内の模様宮居の有様其古へが思はるハ様にムリ升る(式)イヤモ至つて手狭  
にて萬事不都合勝にムリ升る(宗)イヤハ餘り大社よりハ却て趣きが有て面白ひ處がムる

(式)シテ今日能々の御参詣は何ぞ御用ばしむつてか(宗)今日某し参りしはチト先生に伺ひ  
 度事またヤ上度義もムつて是迄推参致してムる(式)ナニお尋ねの趣きとナニト大小入り  
 誂への下座の合方に成る(宗)先達て先生よりは授けありし一ツの問悟後の大事の一着を日  
 夜工夫を凝せし處今曉聊か徹する處是あれバ先生に見解を呈しは教示に預らんと取敢て參  
 上致してムり升る(式)ム、其後發明是有やう日々希望致し居たりシテ如何成る事の是あり  
 しナ(宗)今晚フツト眼覺て見れば天地は元より萬物も求むるに處なく一天四海只茫茫とし  
 て虚空の中に在が如く心中朗らかにして一物の關する物なく如何にも不思議の境界に透徹  
 多し心に嬉しく存すれども自心と可否を辨むる能はざ先生の御尊體を仰がんと是迄推参  
 仕つる何卒御教示願ひ奉つる(式)御發明の所一々齒牙を交ふる處なく如何にも感心仕つる  
 ○が今の仰の處にては未だ自心を盡さざる處あるを如何せん道理を借らざる智慧を用ひや更  
 に一步を進めざる候に如何成るゝるト是にて宗秀莞爾として(宗)御免トツカ〜と  
 側へ行き耳に明き元の處へ住ひ沈と式部の顔を見て式部膝を打て(式)ム、夫を正しく神道  
 の玄旨則ち大道の淵源能くころお手に入られたりハ、ア 出かされたり頼母し〜と我

を忘れて打悦ふ宗秀ハ小睡なし(宗)其ハ一言を承まひりいよ〜安堵致たしてムる 上  
 ひ合予道理なる(式)は心中の快樂さころと推量る某しに於ても安堵仕つる今日只今結びの  
 傳をお許しす 上云ひつゝ願て懐中より扇紗包の一卷取出し 兼て認め置たる結びの傳  
 書氣息の事を記せし一卷附法の印お譲り申すイサ御受納あれ 上差出せハ手に取上げ(宗)  
 道に取ての子房の三層有難く頂戴仕つる ト一巻を押戴さ 早速拜見仕つらん ト明け様  
 とする(式)ア、イヤ最早時刻も讀音近く御歸館運く相成らバ御身の御爲宜しからず其儘に  
 御持參成れ跡にて篤と熟覽あれ(宗)御厚意の段委細承知仕つり升る(式)其書御熟覽の上若  
 し不分明の處あらハ野澤杉山の兩人に御尋ね遊ハさば必らず御會得參るべし最早某し直々  
 に申上る時とてはふるまいかト存じ升る(宗)スリヤ先生にハ身のは難を(式)疾より承知  
 致し居りしが今日候のは参詣にていよ〜時日の迫りし事夫と心に承知致また(宗)は存じ  
 の上ハ何をか申さん返そ〜も残念至極にムり升る(式)我が國固有の神傳も時代と共に埋  
 もれて楚人の玉に異ならせ(宗)其名玉は時有て楚國に光を顯はせ(式)天地の道に候ハハ  
 何れいつかの世に出ん事必らず疑ひあるべからざ(宗)はもある入しと存すれとお顔を見

るも今日限り長き別れと成ふやも(式)夫も神慮の不可思議に又再會の期もムらふ(宗)名残  
は盡ねど早夕景是にてお暇仕つる(式)然ちで若殿(宗)先生は模様(兩人)宜しふ 上互ひに  
一禮宗秀の暇を告て 上兩人宜しく挨拶するを道具替りの知らせ宗秀一番を懐中せる此模  
様

風の音三重にて道具廻る

本舞臺幕明の鳥居前の道具に成る下の方に本莊の駕を据へ

供廻り大勢扣へ居る風の音にて道具止まる

上早暮近き秋の日の風ひ身に染む宗秀が師と頼みたる其人の名残と知れべいと猶牛の  
歩行の歩取りぬ 上鳥居の内より以前の宗秀名残借げに出て来る 上足の進めと心は跡へ  
立とまりては振返り見返る垣の彼邊にも惜む名残に伸上る 上鳥居の内より式部出て宜し  
く見返る 上姿見るより此方に此世の顔の見納と言ぬ云ふに彌増る思ひは同じ正續が  
紀念に遺る名残の一句(式)随分とにも御身を大事に(宗)實所様にも御大切に 上是今生の  
別れよと見送り見返る内と外心の内の暇乞今予師弟が一世の名残別れく 上宗秀兩手

を突て下より見上る兩人別れの模様宜しく有てト々宗秀氣を變て立上り袴をはたくを木の  
頭

双方顔を背けて宜しく泣く此模様風の音三重にて幕

四幕目

○本莊家裏門前の場○同若殿居間の場

本舞臺三問の間正面大なる長屋門上の方門番所の模様宜しく夫より上の方へ一面生海鼠壁に長屋の窓を見せ下の方同斷一面に瓦屋根の庇へ雪の積りたる体其外所へ雪の積りたる景色舞臺前一面雪布を敷つめ都て伯耆守上屋敷裏門夜の体爰に二幕目の近習山岸藤三郎河井六之進羽織着流石一本指にて傘をさし手拭を下げ湯歸りの体にて立掛り居る

雪の音合方にて幕明く

ト日覆より雪を降らす(藤三郎)何んと能く降るでいふらぬか此寒さでい一ト風呂遣入らずに居られ升ぬて(六之進)夫れ故跡を頼み合て一寸抜て暖まつて参つたが宜い心持に成てゐる(藤)夫れはそふと何ややお召捕に相成たる井上式部いよ遠島と事極まりずし渡しが有たどの事何に致せ御當家に何事もなければよふる(六)何れ仕舞の簡様な事に成らふと存じ御家老始めお互ひに心配を致し居つたれを何をいふにも若殿が夢中に成つてお出故へ遂く爰に至つたとすまもの(藤)夫れに付いては若殿には大殿のお首尾が悪るく今

はれ居間にお慎との御身の上(六)又大殿にはお役柄の事故打捨てに置れずとて若殿の事を明らかに公儀へ御届けに相成り御自身差扣の義をお伺ひ申との事(藤)然れば何か何事も無い様に致したいもの元はと云へば彼様ものを推擧なまたる加藤長沼の兩人故實に忌々しい奴でゐる(六)然しお暇と成たからに只今頃ハ浪人のたつきさなく後悔致して居るでふらふ(藤)彼様ものハ主人の罰思入見じめを見るがよふる(六)イヤ大層寒いと存じたら雪の中に立咄しを致して居たせいでムつた(藤)アレ早く詰所へ参ると致そふト雪の音合方にて兩人門の潜りの内へ這入る上下より中間一人ツ、赤合羽饅頭笠提灯を持ち棒を突き夜廻りの心にて出て来り上下へ分れて這入ると床の淨瑠璃になるト又も頼りに降る雪に邊りひつそと鳴鐘の遠音に響く裏門前ト本釣鐘を打込むトこなたをさして一人の侍士暫し往來の途絶へしハ天の與へど心に悦び雪踏分て迎り来るト雪の音にて向ふより二幕目の長沼澤右衛門袴の裾を端折青漆の合羽饅頭笠一本さし草鞋にて出て来り直に本舞臺へ来りト兼て知たる門番所邊り伺ひ差寄て(澤右衛門)コレ佐五兵衛ト聲にこなたは顔差出しト門番所の窗より佐五兵衛顔を出て(佐五兵衛)今時分私を呼ぶのハ誰じや(澤)私

じや澤右衛門じや(佐)ヤ長沼様か(澤)ア、コレ ト押へる床の合方にて澤右衛門邊りへ宜しく思入佐五兵衛潜りより出て來(佐)ヤレ——マアお久し振でムリ升た何から申上升ふかマア——是へお掛け成され升ト兩人門の敷居へ腰を掛け(澤)其方にも久しう逢なんぞと(佐)貴所様にへお道の爲に涉浪々の身の上嘸マア涉不自由な事でムリ升ふ(澤)我身の事へ厭へねとコレ定めし其方も聞たで有ふが情なや先生にへ遠島と事極まりお痛しい事じやと(佐)其事の私し承まはり升てムリ升が實に悔しい事でムリ升る(澤)夫に付ても案じられるは御主人の御身の上師弟の縁で公儀よりもしお咎めもありへせぬかと其事斗りか氣に掛り宅に居ても心も空居ても立ても居られぬ故其方に様子を聞きたいとろつと忍んで參つたのじやシテお上の様子を御知居るか(佐)昨日の朝御公儀へお差扣のお伺ひをお出し成たと申事夫から何の沙汰もないので寄ると觸るとお上の噂何れ仕舞は先生のありませぬ事を並べ立悪くいふのを聞升のが實に思々しく成升ぬが正しい神のお道ゆゑ何か云譯が立らふ多ものでムリ升たナア(澤)——ト通りでいろふ思ふも無理ではないが當秋入牢なされてから只の一度お調べといふ事もなく突然今度遠島を仰付られた事なれば上へ對し申開

まこの成れやうもない仕末是非もない事じやと(佐)然して見ると始めからお上では極つて居たものと見へ升夫に付ても若殿様がいとしくつて成升せぬ(澤)ナニ若殿にへ何か成れたか(佐)大殿のお首尾が悪く只今でへお居間の内にお憤みでムリ升る(澤)スリヤ若殿にへアノ涉腫懐とナム、ト打驚き暫し黙して居たりけり(佐)此上公儀のは沙汰次第で如何な事にありぬやよいがと案じられて成升せぬ(澤)コリヤ其方が申如く明日にも公儀のは沙汰にてもしお咎めも有時の只事でへ相濟ぬア、コレ心ならざる事ではあるわへト手を又ぬいて思案の中屹と心に打點頭(澤)何考へても猶豫の成ぬ作法を犯さへ不忠あれどは身の大事にや替へられぬコレト耳に口よせ囁けば(佐)夫なら貴所へアノ直々に(澤)コレト是を道具替りの知らせト示し合せて

ト兩人點頭合ふ此模様雪の音三重にて道具廻る

本舞臺三間の間中足の二重庇椽側付正面床の間違ひ柵誂への唐紙上の方奥へ下げて一間の横き家体誂への茶壁小窓付此前平舞臺石燈籠庭木のおしらひ下の方瓦家根透しつきの練堀此前所々燈籠庭木ををしらひ上の方向し練堀の見切り所々雪の積りたる模様下の方柴垣の

見切り舞臺前一面雪布を敷つめ飛石の橋横宜しく都て若殿居間の体爰に二重の上の方に前幕の宗秀羽織袴好の形にて褥に座し此脇に刀掛手箱など置き二重下の方に二幕目の野澤鐵教羽織袴好の形にて手を突へ

居る雪の音合方にて道具止まる

(宗秀)鐵教にハ雪中といひ遠路の所大義で有た(鐵教)コハ恐入たる其お詞責方様には此程より大殿の思召有之て御慎しみを承まはり陰乍らお案じナ上げ居たる處今日内々のお使に取るものも取敢て參上致してムリ升る(宗)態く其方を呼寄しはナト頼み度事任つて先づその前方に尋ねたいとは此度式部先生にハ遠流の御身と事極まれハ高弟たる村越坂田を始めとして重立たる人くに御答めの廉ハ非らざるかと心あらざ案じ居るが様子を聞かせて呉やれ(鐵)當秋先生入牢ありし其日より如何成お答めも有んかと一同慎み罷在しが此度先生遠島を仰付られ御配偶たる男也様と隼人が妻の知善と此兩人は所構と相成升たが其餘の門弟一同にハお構ひ多しとの事に候へばお心安く思召下され升ふ(宗)ナ、左様か夫にて自分も安堵致した 上云ひつ、傍への手箱より包みし黄金取出し(宗)コレ野澤些少乍ら此金

子島に至つて先生の侈身の用にお立あれと何か先生へ届けて呉やれ(鐵)ハ、お志ざしのお賜 嗚先生もお喜びならん儘にね届け申でムリ升ふ ト此金子を受取て懐中せる(宗)是を其方に頼さんため夫で態く呼寄たのじや(鐵)必らぞお氣遣ひ遊バし升るな手段を以て人知れぬれ手渡し致すでムリ升ふ(宗)何分其方を頼んだ よ(鐵)委細承知仕り升る(宗)家來の者の其内にも知られてよふない者もあれハ夜更ぬ内よ早ふ歸つたがよい(鐵)左様ムレハ仰に随ひお暇致さでムリ升ふ(宗)ナ、夜中大義(鐵)ハ、 上、一禮なして鐵教は御前を立出て行く ト鐵教宜しく奥へ遣入る 上引違へて荒川左右 ト奥より左右羽織袴にて出て來り(左右)御前機殘念にムリ升る(宗)ナニ殘念などは(左)大殿にハ御公儀へれ差扣のお伺ひ中未だ侈沙汰も非ざるに家中の者共打寄て式部先生の罪狀を有る事ない事數へ立夫のみならず御當家へは答めあらん杯と是聞けがしの悪口雜言聞に堪ねど一言の口出しならぬ今の仕義殘念至極にムリ升る(宗)定めし左様な事も有ん其方が身に取てハ聞に堪ぬも尤も至極去乍ら道高くしては將に魔の盛んなるを知るとハ古人の詞普しより今に至る迄誠の道を買くものハ堪へ難きを堪へ忍ぶ事ハ先哲皆其例しあり心を廣く持が宜い(左)ハ、有

難きは教示恐入升でムり升る(宗)未だ此上にも如何程ある耻辱を其身に受るとも只何事も道の爲天下萬民の爲と思ひ必らず共に堪へて呉よ 上 涙を浮め曰へば(左)重々厚き其お詞備に承伏仕り升れば侈心安く思召下さり升ふ(宗)夫に付ても道の爲め心を盡せし加藤長沼此程父上より俄の暇我にハ知らせ玉ハねハ詞を交す間もあく本意なき別れと相成しが嗚今頃ハ朝夕の煙りを立るよすがにも困苦いたして居りつらんあたらし忠義の者共に斯る憂目をさする専心苦しく思ふて居るわへ 上 臣下を思ふ仁愛の情の詞に膝摺寄 ト床の合方(左)貴所様には萬事に付け侈思慮深く在せば御短慮有ふ様ハなければ萬一上よりお咎め有てお家の瑕瑾となる時は御先祖始め大殿へ對し如何遊ばそは心にムり升るや(宗)仮令如何成お咎めあるとも只幾重にも身を慎み神の恵とを仰ぐ所存(左)左様にハ仰われど万一の其時ハ必らず御覺悟これあるべし何卒拙者に御心風お明し成れて下さり升ふ(宗)其方ハ手が心に死を決していも居らふかと夫で其様に申のじやナ(左)如何にも貴所様の御決心なければ成ぬと存じ升るゆゑ(宗)未だ其方ハ修行が若いナコレ左右其方も井上先生の門人大道の端を知りたる者斯る時ころ大事なり茲を篤くと承知致せト 誂への下座の合方に成り 傳聞く

大燈ハ五條橋下に二十年乞食頭陀の行を爲す又松島の法心ハ入唐なして艱苦を凌ぐ天下の大法を護持する者忍び難きを能く忍ぶ例しハ世々に少なからず曾我兄弟ハ十八年霜雪苦の憂を堪ゆる只一人の祐經を規ふぞち斯の如く況てや天照太神の御教を護持す大切の身を輕々しく迂濶に一命を捨つ可きや血氣に早死を以て身の一分を立ん杯とい以ての外なる心得違ひ此大法を維持せよべき其方も門下の一人成すや必らず短氣を出すまいぞ 上 道理を責て述べ玉へば左右ハハット頭を下げ(左)若輩の身の一筋に思ひ迫りし拙者が不束只今御前の御教諭にて始めて夢の覺たる如く恐入升てムり升る(宗)ナ、尙も心に潜ぬ事あらば必らず予に相映致せよ 上 さすが井上先生が後事を託せしは器量奥床しく予見へにける折柄もあたの庭口より伺ひ寄たる澤右衛門ト 下手の柴垣の蔭より以前の澤右衛門出て平舞臺よき處に手を突く(澤)委細彼にて承まはり安堵致してムり升る(左)ヤ、御身は長沼澤右衛門(宗)ナニ澤右衛門が参りしとや ト兩人顔見合せて(宗)ナ、澤右衛門が(澤)御前様トハット斗りに互ひに盜そ一ト(宗)思ひ掛けあき此對面如何致して來りしや(澤)式部先生の身の落着より若殿の御身若し御短慮もあらんかと拙き心にお案ト申しは諫め申さん

どお暇の身を顧みず御法を犯し庭口より忍び入しがは前様の思召の程承まはり浮異見ある  
 んど存じたる拙者が心の淺慮サ恐縮至極にムリ升る(宗)スリヤ夫故に參るか(澤)ハ、(左)  
 スリヤ澤右衛門にハ始終の様子を(澤)殘らや彼にて承り御心根の有難く涙に袖を浸して  
 ムリ升る(宗)左程迄に予が身をハ思ふて呉るか添けない予ハ我も何ぞや其方が暇と成し  
 其時ハ知らねバ其儘顔も見ず只朝夕に其方が事思はぬ日とてハなかりしによくぞ尋ねて來  
 りし予(澤)物數あらぬ某しを左程迄の御懇の御意心根に徹しあり難き仕合に存じ奉まつり  
 升る(宗)斯る忠義の其方に斯く浪々の難儀をさするも皆宗秀が足わぬ故免して吳ハ澤右衛  
 門 上兩手を突て詫給へば澤右衛門は勿体なき堰來る涙呑込で(澤)ハ、恐入たる浮仰今一  
 天下の間老を移動め遊ばす父君の世つぎの御身にあり乍ら道の爲とてりく迄には身を慎み  
 忍び給ふに我ハ如きが此上に如何成事に成升ふとも聊か厭ひはムリ升ぬ(宗)罪なき者を  
 浪々とする甲斐なき主を恨みもせや我を案じて雪中を忍び來りし志さし死とも忘れハ置  
 かぬ予ハ(澤)僅か忠義を左程迄思召下さり升る段冥加至極に存じ升る(宗)誠に其方の我  
 家の柱石とも云へし何か報ゆる時もある浪々の身の不自由も暫くの間堪へて吳ハ(澤)コ

ハ勿体なき其仰 誠の道を行ひ玉ふ正職ぬしとら遠流の身我等が身の浪々は聊か厭ふ處  
 ハムリ升ぬ只々は身を大切に(宗)其義ハよ承知して居る何卒安心して呉やれ(澤)其御心  
 を伺ふ上ハお暇の身の長居ハ恐れ退散致さでムリ升る(宗)夫ならも參るか(澤)左様なれ  
 ハ御前様(宗)堅固で居いよ(澤)ハ、 片夫と通る心と心澤右衛門ハ有難き骨に徹へて堰上  
 る涙押へて立掛る心を察して荒川が見やれハ君も岡の眼に浮め玉へるは浪情ハ厚き主従  
 が名残を跡に長沼ハ雪ふみ分て廻り行く ト三人宜しくドハ澤右衛門下手の柴垣の奥へ這  
 入る家秀是を見送り乍ら思ハて下手の柱に靠れ跡を見送つて居る時の鐘を打込(左)御前様  
 ○御前様 ト是にて宗秀心付振返り(宗)ム、 ト是を木の頭 忠義な者じやメア

ト兩人長沼を感心する思入時の鐘合方雪の音にて幕



五幕目

○深川万年橋の場

本舞臺三間の間通し中足の二重石垣の張物ぞつと上の方に正木稻荷の横手の板羽目を見せ夫より下の方へ斜に入口の摸様爰に奉納の提灯わく二本赤き提灯を提げ是へ正木稻荷大明神と記しあり此奥へ万年橋の橋詰を見せ向ふ一面生海鼠壁屋敷窓下の体溝際處々捨石此道具と橋詰の道具の間だ一間ぞつと奥深く向ふ樹木の張物にて見切り舞臺前一面の浪布所々浪除の枕都て深川万年橋際川岸通りの体爰に三幕目の安西一万序幕の忠次郎初五郎羽織着流しにて立掛り居る其外門中の仕出し

思ひくの形にく大勢立掛り居る此摸様水の音流行唄にて幕明く

(一方)今日ハ彌々先生が此川岸から船に乗つて三宅の島へお出成るとい何と情ない事ではないか(忠二)郎親より大事な先生に生別れをとるといふハ斯様な悲しい事はないから巳ハ了簡を極て来たのだ(初五郎)木下川の名主さんを始めとして高弟の方々が万年橋へお送りに出てハ成ぬと云れたければ○一世一度の生別れたものを何して来ぞに居られるものか△

あの有難い先生が何だと云て鳴へなんぞ往のたろう□夫がお上が無理な仕方なく町噂に調へもせや▲行成遠島を云付るとい餘まり酷い成れ方だ①斯いふ時に神明様は何で助けて呉あからふ②己が神様なら先生を島へ遣りはしねへものを(一)何程りさんで見た處がお上の威光にハ叶ハぬから何でも爰で一向よれ役人様に送り付てお慈悲を願ふ了簡だ(忠)私もヤツマリ其覺悟お役人に叱られて飯令何を目に逢ふとも何處か何處迄送り付て(初)一生懸命送り付き命を的に掛つたら届かぬ事ハ有るまいと決心して出て来たのだ○其方衆が其氣をら私も共々一願ひやし△是丈の人數が一ツになり何でも彼でも先生を口三宅の鳴へやらい様にするのが日頃の恩送り▲お送りの爲めに一同が心を合せて歎願して①聞て呉りやア此川岸で殺されるまで遣付るのだ②命を捨て掛る日には恐い事ハ些ともねへや(一)了簡が極つたら茲に斯して居よふより川岸に繋いてある船へ乗込る丈乗込で先生を乗せない様に仕様じやアねへか○左様だ一何でも此方ハ命懸け△皆お乗込くト大勢見や一云て上手の奥へ往掛る上手の奥より村越次郎三幕目の坂田啓次郎の兩人黒の羽織袴好の拵へにて是を支へ乍ら出て来り(次郎一)マア待つしやれ何したものだ(啓次郎)大勢寄て

此様如何した譯か(兩人)聞せて下され(一)命を捨て先生の(忠)れ慈悲願ひをする心(初)  
 何卒留申と(皆々)遣て下され(一)次)是はシタリ斯様を事を云たと云て(次)今日に成てハ  
 最叶ひ升ぬ(一)其處を皆々が命にかけて(忠)やる處迄遣升から(初)留すと何卒(皆々)通し  
 て下され(一)次)ハテ聞譯のあいマア私が一ト言ふ事がある(啓)マア下に居て聞つしや  
 れコレサ待てと云たらマア(次啓)待つしやれナ ト兩人急度いふ是にて皆々下に居る(次)  
 是れだから親父を始め高弟のものが手分して今日門中が此の川岸へ登や(一)騒いで出ぬや  
 ふと止て居るのは爰の事(啓)お前方も昨日の内おれ程止て置たのに何と思つて出て來なぞ  
 つた(一)何程來など云れたとて一生のお別れだものを何して來ぞに(皆々)居られ升ふ ト  
 是にて次郎一啓次郎顔見合ホロリとして(次)夫りやアお前方斗りじやない門中の者は誰一  
 人お暇乞に先生のお顔が見たいと思ぬ者ハ只の一人もありはし升ぬ(啓)夫を無理に止た  
 のは斯様を騒ぎをさせまいため只先生のお身体を大事に思ふゆるの事(次)今此二人がいふ  
 事をマア篤くりと聞て下さい ト(一)ト(一)の合方になり 元より悪事といふでハるけれど飯令  
 何様な宜い事でも新規な事ハお許しに成ないのがお上の御法(啓)殊に今度先生ハ新義異流

といふ事にハ身の罪が極つたので情なや今日爰から三宅の島へ遠流の御身(一)夫だから私  
 し共が(忠)命かけの數願を(初)遣て見る氣で(皆々)ムるといふ(次)サ、其正直る心  
 からそふ思ふのハ無理ではないが茲を能く聞なさい今茲へ來るお役人ハお奉行所の同心兼  
 スツトお役も輕いお方今先生の遠島は町奉行より未だ上の御老中方の御判が据り恐ながら  
 上様の傍覽に成た上の事左すれハ茲で何様にお縛り申て願つたとて所詮届かふやうハない  
 お前方ハ命をも捨る覺悟で有ふけれど大切なる先生の傍身の罪が重う成てハ却つてお爲に成  
 升ぬ夫ども此上先生に何様も重いお答めが有ても構ハない云成るか(一)何でそふ思ひ升  
 ふ(啓)夫ならハ何事も今次郎一殿の云れる通り只神妙にお上を恐れ順序を以てお願ひ申せ  
 ハお目に掛る事は出來升から今日ハ温順にお別れ申し(皆々)夫どといつて(啓)サア茲で皆  
 なが騒ぎ立ちお上へ對し逆らふ時ハ其罪ハ皆先生の身に掛り升ろそふある時ハ先へ寄て御  
 赦を願ふの邪魔とあり何が何迄荒磯のお住居をなさらにや成ぬ譯何方も茲をよく考へて御  
 覽成れ少しも早く御赦免を願ふ氣ならハ今日の處ハ只神妙にするのが肝要茲でハ温順にお  
 別れアし又改めて御赦免をお上へね願ひ申のが是が順道でムり升るぞ(次)今啓次郎殿の云

れた事何方も御合点が狂き升たか ト皆々黙つて俯向て居る(啓)もし皆さん御得心が参り升たか(次)是程云に返事の無い御不得心と見へ升る宜ふふとす〜お爲に成ぬ事を知て此儘見ては居られぬ是から途中へ出張て居て此通をお役人様へ訴へて出て先生の傍身に罪の掛らぬ様仕様と思ふが啓次郎殿其方何と思へるこゝ(啓)如何にも夫がよろしうムる是から御身と共〜(次)サアお出成れ ト兩人立掛る(一)ア、コレマア持て下され(次)待どハ云ふ事を聞て下さるか(一)段々の入譯をお聞申せバ御尤も(忠)一々腕に會得し升た(初)お上を恐れ慎んで〇神妙にし升から△一世一度のお暇乞口お役人に願つて下され▲何卒お目に掛れるやう(一)取斗らつて(皆々)下さり升せ ト是にて兩人ホロリと思入(次)願ひひであんどし升ふ宜ふ二人の云るを聞て下された悉けなふムる(啓)今日の處は何事も二人に任せて決して騒立てハ成升ぬぞ(一)一同承知(皆々)仕升たじいのみ(次)夫で私も安心し升たト氷の音合方に成り下手より同心一人手先二人付て出て来り上手へ往掛る(次)もし御役人様お願ひの者でムり升る(手先)願ひどの何の事だ(次)へイ是に居り升るハ今日遠島に仰付られた式部が門人共にムり升が格別の御慈悲を持升て對面の義をお願ひしし升る

(手先)よし〜願つて遣ふ ト同心の前へ来て 式部が門人共對面を願ひ升る(同心)聞届けて遣ハそ能く神妙に致と様申聞る(手先)ハッ ト此方へ来り 今且那へ願つたら涉聞届けに成たから夫に扣へて居るが宜い見れば大分多人數だが能く神妙にして居る(次)へイ畏り升てムり升る(手先)其方何者だ(次)木下川村の名主次郎兵衛の悴次郎一と升る(啓)保木間村の名主權右衛門の悴啓次郎と升る(手先)兩人の姓名書を差上る(啓)畏まり升てムり升る ト次郎一矢立の筆にて名前を記し手先に渡と手先是を同心の處へ持行く此内一方下手を見込で(一)アレ〜向ふへ先生が(次)最れ出成れたか ト皆々下手を見込で(啓)昨日に變るアノお姿(次)お痛わしい事だナア ト皆々宜しく居ならぶ床の淨留理に成る 上 氷の流れと人の身の行衛定めぬ世の習ひ諸行無常を告度る遠寺の鐘の音につれて ト本釣鐘を打込 此方を差て來掛るハ今日出船の罪人を警護の役人殿かに前後を圍む其中に正鐵大人は罪なくて配處の月を眺めやる身ハ腰繩に繋がれて答ある者と諸共に松塙を差て歩みくる ト此淨留理にて下手より同心二人先に立跡より井上式部好の拵へにて牢内にて疲れたる心腰繩にて出る手先一人此繩を取て出る跡より答人四人同じく腰繩にて出る手先

二人此繩を取て出る跡より手先二人付て出て同心ハマツト上手へ三人床几に掛る二重宜き處へ楚を布き是へ式部始め答人四人宜しく居並ぶ手先ハ皆々下手に扣る(同心)コリヤ〜ト手先傍へ往く 其方は船場へ参り送物の品を能く引合せて置け(手先)畏まつてムリ升るト手先一人上手へ遣入る(同心)コリヤ答人どもト是にて五人頭を下げる 未だ出船の時刻にハ聊か間もわれハ式部一人ハ是に残り其餘の四人は暫く彼邊にて休息致せト是に手先三人ツカ〜と往き(手先)サア此方へ來いト引立る四人の答人立上つて先手二人付て上手の奥へ這入る(同心)コリヤ式部其方が門弟の者と有て對面を願ひ居れば此處にて對面致せコリヤ次郎一其他の者はへ出い(次)〜イ有難ふムリ升る 云間も遅しと差寄てト次郎一啓次郎上下(次啓)先生(式)ヲ、次郎一殿啓次郎殿(次)お暇乞に(啓)上り升て(兩人)ムリ升る(一)もし先生情あひ事に(皆々)なり升た 云わつと斗りになき出せば(式)ヲ、門中の方々もよふ來て下された忝げなふムる(次)今お別れ申てハいつ又お目に掛れるか先の分らぬ今日のね名殘(啓)思ひ思つて先刻からお待すて居り升た(一)交り果たるお姿に涙の外はムリ升ぬ(忠)今日は御出幸成る、か明日ハお目に掛れるかと(初)待に待た甲斐

もなく悲しい今日の此お別れ〇お名殘惜ふ(皆々)ムリ升る 一切なる心正續も師弟の因と涙からぬ情を察して聲曇り(式)罪深き身を夫程に暮ふて下さる志ざし忝げなふハムれども只何事も神明の御斗らひと思ひ明らめ此上共に忠孝の心の鏡曇らぬよう誠の道を盡さる、が此正續が何より喜び唯一向にお上を恐れ慎みか肝要でムるヲ(次)其慎とを大切に存じ升る故親共始め保木間の叔父や其外の結びの者ハ取分て今日の出船のお暇乞飛立やうに思ひ升れと何をいふにも多くの門中(啓)騒立時ハお上へ恐れと昨日よりして言譯をして騒立たぬやうに門中を制し升ので自分共は飛立思ひを切齒りお暇乞に上り升ぬ只忝上を恐れ慎しと(次)此兩人が惣代に(啓)上り升て(兩人)ムリ升る(式)ヲ、能くぞお心付られた正續祝着に存せると能く夫〜へお傳へ下され身等兩人に面會あせば其餘の人にも逢たる同前イヤ我身の事に取紛れ申事も跡や先刻御幸内を出し時お役人より仰渡されは一同より夫〜にお志ざしの送物厚く侈禮を申升る(次)是迄の御恩報じどの様にも致し升る筈なれど(啓)何を云にもお上に於て制限のある事故に(一)心に思ふ十分一(忠)記し斗りのお送り物(初)其お禮に預り升てハ(次)心苦しふ(皆々)存じ升る(式)イヤ〜左儀でムらぬ我等が身

にハ過分の品々神明の賜物と有難く受納致す(次)是からしてハ何れと云ふ先の分らぬ長  
 いお別れ男也様や龍太様にお言傳の義もムリ升るなら私共よりお傳へ申でムリ升ふ  
 云に此方は目をしばた(式)御深切ある其お詞 忝けなふムる〇兼て覺悟の事なれば去  
 年梅田を出る時跡々の事何や彼や篤と申聞置たれば早云置る事とてハムらぬ只内心を大切  
 にト次郎一と顔見合宜しく氣味合有て 無事を祈るとお傳へ下され 上口にハ云ど心に  
 ハさそが死れぬ肉身の妻や愛子が一世の別れ嘆きハ無と恩愛の絆に引ると忍びの涙心に察  
 して次郎一も並居る門中諸共に涙に袖をまぼりけり ト皆一宜しく有 上折から愛へ息  
 せきと後れて走せ來る善吉が トばたくに成り下手より序幕の善吉走り出て(善吉)先生  
 様 上寄んとするを(手先)扣へて居れ(手先)不禮者扣へぬか ト是にて善吉うるゝする  
 (次)ア、イヤ彼の者ハヤハリ式部が門人にて木下川に住居致し居酒渡世を致し升る善吉と  
 申もの何卒御慈悲を持升て對面の義を願ひ升る(同心)ろふか聞届けて遣はす(次)お免しが  
 出た程に遠慮に及ばぬ善吉との 上詞をしほに走寄て(善)先生様ハアハア 上ワット斗り  
 に泣伏ハ正鐵心を押斗り(式)善吉との能く見へられた只何事も神隠りと明めて下され(善)

何たる事でムリ升ふ多くの人をお助け成れた貴所様が有ふ事か人殺や盗みした者同様に  
 上長の間の獄屋の御住居 何答もあゝ御身にて三宅島へ御流罪どハ神も佛もない事か 上  
 情あや恨めしやと人目も耻や泣伏ば(式)御身を始め人々ハ斯る歎を見る事も未だ此身の  
 罪咎の消ざる驗し是よりしてハ荒磯の 上三宅の島の起臥も 我身の罪の禊々と思へハ  
 どと神明の深き滂恩の禮を申上るの外はなし歎くハ愚の至りてムる(善)お心の廣い貴  
 所様にハこそ思召でもムリ升ふが是から先は只お一人海路遙々離れ島岩間に凌ぐ雨露の軒  
 も疎らのお住居に何辨へぬ島人らと浪の立居の起臥を成らにや成らぬ貴所のハ身軀御難義  
 る事でムリ升ふ是迄長の御恩送り島へ參つて朝夕の責てお世話が致したふムリ升何卒私し  
 を多一處にお供にね連れ成れて下さり升(式)其志ざしハ忝けなけれと科極まりし者の外ハ  
 さし添事の成ぬが法夫よりの跡に残し妻子らのお世話を下さるが一所に島へ行くよりの  
 遙に増る身の喜び何分共にお頼み申す(善)男也様や子供衆ハ多くの門中がお付せハ滂心  
 配ハムリ升ぬ私し一人ハ貴所様の何卒お供を致とふムリ升る(式)飯合何と云れてもお上の  
 御法の破られ升ぬぞ(善)イエー私しは何有ても貴所の多供を致し升ら ト上手の同心の

前へ来てもし 御役人様一生に一度のお願い何卒私しを共に船へ乗せてお遣り成れて  
 下さり升もしお願ひでムリ升るお慈悲でムリ升手を合せてお拜升る 上眞實眞身善吉が切  
 なる願ひ此方にも不便の者と目をしわたさ(同心)其方が志ざし感心致を併し餘人を船へ  
 乗せる事のお上の法に於て決して叶わぬ事じや重ねていふ無用に致せ(善)其處を何卒  
 お情に(同心)コリヤ上の法は破られぬぞ(善)夫なら何でも叶ひ升ぬか(同心)叶ひぬ事じ  
 や明らめよ(善)エ、情なひ事だナア 上本意なき思ひ役人も心を察する其折柄風がもてる  
 鏡の聲 ト本釣鐘を打込(同心)アノ鏡ハ早出船の刻限船の用意ハ調ひしか ト奥を見込む  
 上手より以前の手先出て(手先)出船の用意萬端調ひ升てムリ升る(同心)然らハ一同乗船致  
 せ(手先)サア立ませい キトせき立られ(式)時刻移さば上への恐れ次郎一殿啓二殿殿(兩  
 人)ハッ ト上下より傍へよる三人沈と顔見合氣味合宜しく(式)一心の外味方なし必らず  
 共に(次)精神一到(啓)骨にゑるども ト兩人宜しく無言にて頭を下げる(式)ハ、各々お然  
 ばでる ト立かゝる(一)夫なら是か(式)もふ此世でハ逢升ぬぞ(一)お名殘惜と(皆々)ム  
 り升る 上名殘惜やと一同が前後左右に取纏る ト善吉一方始め皆く(式)部に取纏る(次)

是のしたり何したるもの(啓)お上へ對し濟升ぬ(次)是先生の爲に成升ぬ ト兩人一生懸命  
 に皆くを支へかさに掛つて是を隔て(啓)コレ先刻云たハ(次)此處でムるぞ(善)夫じやど  
 (皆々)いふて(次)先生のお爲を思つしやらぬか ト屹といふ式部一寸思入有て思ひ切た  
 る心にて(式)無事でムれよ ト式部ツイト上手の奥へ還入る同心手先皆く付て還入る  
 上思ひ切たる此世の別れ(善)ア、もふ先生が往て仕舞た(皆々)ハ、ハ、ト一同泣き落す  
 (次)各々の歎き無理でハムらぬ尤もだ私連も此胸が張裂やうに思へとも今と成てハ是非が  
 ムらぬ(啓)只此上の信心堅固に一日も早く先生の御教を祈るの外ハムらぬ是からハ共く  
 何卒力に成て下され(一)夫は貴所が仰しやらやと(忠)互ひの心を一致して(初)少しも早  
 く先生の(一)御教にあるやう(皆々)仕升ふわいのう(善)皆さんが其氣に成て跡の事をして  
 下さるから私ハ是からハ、ろふだ ト上手へ欠出す(啓)コレまつそふしてどこへムる(善)  
 爰でハ何せ叶わぬ故途中で待て先生の船へ乗込島へ往き升(啓)又しても其様な事をコレ其  
 方の志ざしは分つて居れどわれ程お役人々仰しやつたを背ひて往けハ先生の御身の罪が重  
 くなるがや(善)や(啓)其處へ心が付升ぬか(善)夫なら何でも往れぬか ト此時奥にて竹法

螺を吹立る(次)やアノ竹法螺ハ

(啓)出船の合圖ト是にて此道具木なしに半廻しに廻す

本舞臺正面より上の方一面に万年橋の欄干橋杭を見せ下の方二重の續き道具正木稻荷の後ろ川へ臨みし小窓の模様宜しく二重の向ふ屋敷の黒堀此内樹木の茂りたる模様橋の向ふ川岸通り遠見の書割橋の下奥より舞臺一面に浪布を布き

都て深川万年橋の体浪の音にて道具治まる

トヤハリ浪の音にて橋の向ふより遠島船廻りへ箱のやうな覆に小さに四角を窓一つ明て居る此内に式部始め各人乗組たる心にて淺黄の筒袖を着たる船人二人此船を漕出る段く上の方へゆく二重の下手より治郎一啓二郎其外皆一出て來り橋の上よりこの船を見送り(善)先生さまア(啓)先生さまアト頻りに呼ぶ船の小窓より以前の各人一人顔を出してキヨロくして居る此内船ハ宜しく上手へ漕いて這入る橋の上の音を聲を出して呼乍ら木なしにて

此道具逆廻しに廻す

本舞臺元の道具に成る

トヤハリ浪の音に早めたる合方に成りて下手よりヤタ〜にて序幕の村越次郎兵衛黒の羽織着流し一本指にて一散に走り出で彼此見廻そ上手より次郎一啓二郎出て來り(次)や親父さんか(次郎兵衛)ナ、次郎一に啓二郎か(次)一ト足の事で先生ハ(次郎)夫なら最お船は出たか(啓)只た今漕出し升た(次)残念な事を(兩人)いたし升た(次郎)ア、コレ一時に騒立門中をやう〜の事で制しとめ歸る態にて其處を抜け一ト目お顔を見たいものと一生懸命欠付たが間に合るんだかム、(啓)然して叔父さん内の親父や長沼様ハ(次郎)是も彼此欠廻つて追付爰へ見へるで有ふが嘘や本意なく思われやうト上手より善吉始め門中皆々出て來り(善)旦那様悲しい事に(皆々)成升たト是にて次郎兵衛上下を見返り(次郎)ナ、皆の衆か私が心もト是を木のかしら察して下されト懐ろより疊んだ儘の手拭を出して涙を押へる皆々愁ひの模様宜しく

浪の音にしつぱりとしたる下座の合方にて幕

○木下川又藏内の場○同奥座敷の場

本舞臺三間の間少し上へ寄て三間常足の二重板羽目の蹴込と正面納戸口上の方押久神棚の模様など宜しく下の方二重の棚を釣いろゝの荒物を並べある此前に帳場格子火鉢など宜しく置あり軒先へ木村屋と染出したる紺の暖簾を掛け是より下手二間の續き屋体土間の体後ろ板羽目茲に酒樽を幾個も積重ね酒店の模様宜しく軒先へ今日見世開きと記きたる紙札を下げ此前に床几二脚並べ此下へ白壁の土藏の横手を見せ上の方樹木の張物にて見切り下の方同斷都て又藏内の体茲に二人床几に掛り膳に儘か肴を置きちろりにて酒を呑で居る下手に仕出し三人徳利を持酒を買に来て居る女房おせん世話女房の拵へ片襷前垂掛にて樽より酒を次で居る前幕の善吉前垂掛好の形にて是も手傳て居る此模様

在郷唄にて幕明く

○ナイ何卒早くして下さい升(せん)只今直にお上り升 ト徳利へ酒を次で持來り餘程お負やて上り升○夫りやア有難へ今日見世開きだと云から試みに買に來升たか計りさへ能して呉るさりやア何時でも此方で買ますよ(せ)精々働らき升から何分お願ひ申升ト仕出し三人

此様な拾遺詞云乍ら皆々酒を買て拂を置て下手へ這入る(善)有難ふムり升何卒又御最負に願ひ升(せ)ヤレ〜マアはつとし升た善吉さん先刻からしつきりなして嘸お草臥でムり升ふマア一服お呑ん成さい升(善)へイ有難ふムり升私しもお勤め申て此れ見世をお出させ申升たがお見世開きの景氣がよいので此様な嬉しい事ムり升ぬ(植木屋)先刻から爰で御馳走に成て居り升がしつきりなしのお客様でお目出度ムり升(船人)善吉さんお前さんのお見世は何なぞつたのでムり升へ(善)私し都合により升て江戸向の方へ引越升ので夫で此商賣を此方様へお勤めすたのでムり升(船)江戸向へ引越と様じやアコリヤアたんまりと出來升たな(善)どう致し升てそふいふことではムり升ぬ(植)へエうまく云つて居なさるが何ふでも善吉さんしつかり出來たと評判でムり升せ(善)何ふかマア其様な夢でも見たいものでムり升 ト此内おせんちろりのかんの出來たのを持來り(せ)あついのが出來たから澤山おあがん成さいよ(植)何あいたし升して最ふ澤山でムり升(船)先刻からしつかりいたいましました(せ)如何にも悪さが強いから遠慮をしに澤山呑で下さいます(植)何も誠に有難ふムり升左様なら最一本御馳走に成升ふ(船)代の出ない酒だものでそこから遠うか〜と呑で仕



舞升 ト兩人酒盛をして居る合方に成り奥より又藏好の派手なる零天少し酔たる仕打にて  
 出て來たり(又藏)イヤ善吉さん段々お骨折でムリ升た(善)誠に御繁昌でお目出度存じ升  
 (植)是ハ旦那今日のお目出度ムリ升(船)いろゝ浮馳走様に多り升先刻からお辭儀多しに  
 澤山戴いて居り升(植)ね蔭様で寒さをそつぱりと忘れ升た(又)如何にも今日は又別段に寒  
 いからマア思入やるがい、や己も又奥で引掛て來たのだ(植)旦那が呑口でお出成るので呑  
 者は大仕合でムリ升よ(又)何でも寒い時に酒で多けりやア後げね(遠慮なしにやるがい  
 )(植)何程寒い時だといつて酒さへ呑でいりやア何様を事が浦て來たどて驚く事ハムリ升  
 んヤイヤ驚くといへハ一昨年の秋でムリ升た子梅田の先生へお手が這入てあの時にハ驚き  
 升たねへ(船)去年の五月先生が島へお出成れ夫迄ハ何なる事かと實に案事られて成升んた  
 つた(植)私共もお蔭様で御修行を致して見升たが實に結構な事で何にも悪い事はあいの  
 ですがお上の威光じやア仕方がムリ升んのサねへ(船)もし旦那へソリヤモウ悪い事じやア  
 ムリ升ぬが貴所アレハモウ眞實にお止成い升たろうねへ(又)止たとも止たともあの時限  
 りそつぱり止て仕舞た(植)貴所眞實にお止成い升たかへ(せ)其様なにくそく聞さいでも眞

實にすつぱり止て仕舞升たよ(植)そうでムリ升か夫なら宜ふムリ升かぬ今度もし間違ハ有  
 升と今度ハ本家の旦那や貴所方の番でムリ升ぞ何程いひ信信心だぞ云て貴所島へ往ては結  
 らなひじやアムリ升ぬか(船)私しなんぞも始めは有難いとぞと思つて居升たらねへ先生が  
 島へいつたのでつくつく否に成て仕舞升た此方らの旦那や本家の旦那なんぞハ此方らと違  
 つては身分が大事でムリ升忘れても彼様事ハ最決して成い升るよ(又)大丈夫だよもふ志  
 やアしねへ其證據には彼の時分ハ好に酒をスツパリ止て信心一方に成て居たが此頃尙又信  
 心を止てツラ此通り毎日酔て酒一方に成て居るのだ(植)實にお酒一方なら間違はムリ升ぬ  
 よ(船)自分の田へヨリ水を引くぞナコ間違へねへ事が有ものか時々のだくれに成て大失  
 敗をやるじやアねへか(又)コウゝ其様多事を云て呉る多耳が痛いや(船)ナアニコリヤ貴  
 所の事でのムリ升ぬや子(植)時に大層酔て仕舞た此勢ひで出掛けよふ(船)夫がいひコリヤ  
 ア旦那いろゝ浮馳走様に成升た(せ)誠にお鹿末でムリ升た(植)何致し升て旦那お内儀い  
 ろゝ有難ふムリ升た ト在郷唄に成り兩人生酔の仕打よろしく下手へ這入る跡三人顔見  
 合宜しく思入合方に成る(又)善吉さん現在門中の人達が彼様な心に成といふ旦那も人氣の

弱るものかわさましい者だナア(善)去年の五月先生が島へムつた其時ハ此大勢の門中が一  
 人も止る様子もなく何でも一番修行してお道を天下へ貫いて力を入れて居り升たが僅か二  
 年たない内に何處へ往ても信心の咄しさへさる者もあくなるどハ此様なにもなればなる  
 ものでムリ升かナア(せ)是れといふのもお上から若しや内緒で行ふかと未だに厭しいは詮  
 義で隠密方が姿を變へ此邊あたりは鵜の目鷹の目(又)本家の兄や保木間の兄は結伏の傳も  
 受て居れば行ふ事ハ知つて居れど力と頼む門中が濡りさつて居る故に何する事も成ぬ仕義  
 (せ)重立もの、名前書ハお上の手帳に留つて居れば居宅の廻りにそれくゝに晝夜を掛て厭  
 しいは詮義(善)面立方が其通り身動きの成ぬ仕未故其餘の者は尙更に臆病神に取付れ忍が  
 つて居る者ナリ(又)又先生の修教免を二度程願ひは上たれども是もお上に取上なく此様子で  
 は何の世に再び道の起る事か(せ)先生の修名代を勤る者の人目も今日の前に有乍ら(善)行  
 ふ事の成らぬといふハ(又)未だに時の至らぬのか(せ)神の許しのさい事か(又)能く衰へた  
 ものだナア ト三人宜しく有在郷唄に成り向ふより百姓忠二郎の女房おさだ結髪木綿衣裝  
 百姓の女房好の控へ襦袢折脚下駄にて悴孝吉の手を引き片手にぬれたる孝吉の帯を提て出

る孝吉(八才)本綿衣裝水に濡たる心にて付紐のこにて泣乍ら出る花道にて(さだ)チ、よく  
 泣かぞとよいく内へ往く間も寒かろう今西のお内へ往てお願い申て何にかして遣升  
 ふチ、よし〜 ト云乍ら本舞臺へ来る(せ)チヤ忠二郎さんの處のおさださん能くお出成  
 れ升たチヤ孝さんのろの形はへ(さ)今日ハお内のお見世開きお悦びに上らふと頬の口の角  
 迄参り升ると是が溝の中に立て泣て居り升る故最喫驚致して引上げて見升るとどこもかも  
 づぶぬれ内へ連れて戻る間も今日の寒サにムリ升れば少しも早く脱せ度此方へ連れて参り升た  
 一番お悪い小さなおめしを何卒拜借致しとふり升る(せ)夫ハマア可愛うにチヤ〜マ  
 ア何處もかも全濡に成て嘸冷たい事でムリ升ふ生憎内にハ子供がムリ升ぬから此子の着る  
 様なものもチ、本家には子供がムリ升から一寸往て借て来て上升ふ(又)ア〜コレ〜本家  
 へ往て借りてくる間にハ其子が寒くつて可愛そうだ何でもない、や手前の縹絆に胴着か何か  
 持て来て早く着せてやるがいひや(せ)夫じやアそふし升ふ少し待て居なさんせ トおせん  
 奥へ這入る(善)ヤレ〜マア酷ひ事をした何して溝へ落たのだからマア是を早く脱がしい、や  
 ト 善吉世話をして孝吉の着物をぬがせ身体を拭てやる奥よりおせん縹絆と袖あしの胴着

を持出て来り(せ)眞の間に合でムリ升孝坊やサア〜此處へ来あ〜(さ)いろ〜お世話  
 様に成升る有難ふムリ升 ト孝吉二重へ上り覆へて居るおせん是に縋絆と胴着着せる(善)  
 何にしても此着物(是)では仕方がムリ升ぬから庭の井戸で一寸洗つて火燵で乾かして参り  
 升ふ(さ)何致し升て私しが跡で致し升る(善)マアよムリ升お前さん(マア)少しお咄しな  
 さい升何の造作(有)升ぬ(さ)何卒夫は其儘に成つて置いて下さり升(善)イ、エサ其様な御遠  
 慮には及び升ぬ一寸やつて来て上げ升ふさ夫で(何)も濟升ぬ(善)何の造作も有(し)升ぬは  
 子 ト善吉濡た着物を持って奥へ這入る此内おせん(孝)吉に着物を着せてやる事宜しく有る  
 (又)ヤレ〜マア可愛そうにサア〜爰へ来てあたるかい(孝)ト孝吉火鉢の傍へ来て火  
 よあたる(せ)マアねさださん此方へお上ん成いましな(さ)左様なら眞平御免成れて下され  
 ませ トおさだ二重へ上り宜しく下手に住ふ(又)孝坊手前何して又溝の中へ落たんだ氣を  
 つけれ(い)に子供は無暗だから是が危なひのサね(孝)ム、己が落たのじやね(又)  
 落たのじやアねへ夫じやア何したのだ(孝)皆あに溝の中へ打込れたのだ(せ)何だどへ溝の  
 中へはをり込れたとへ(又)子供同士喧嘩をしたナ(孝)ナアニ己ア喧嘩も何にもしやアしね

へ(又)喧嘩も何もしねへものが無法に溝へ打込奴が有るのか(さ)イエ〜左様でムリ  
 升ぬ是が溝へ入れられ升たに付いて(悔)しいお咄しがムリ升る(又)ナニ悔しい咄しが(せ)  
 あるといふわへ(さ)もし旦那様お内儀お聞成れて下さり升せ ト誂への合方 去年の五月  
 の法難から(門)中(元)氣もあく忠二郎(病)氣に成り煩らつて居る處へ掘(口)の三次さんと  
 溝(際)の久太さんが夫見よがしに遣て来てお道の事を悪口雜言親が親なら子供ら迄其様にも  
 悪(ひ)ものか何答もない此孝吉を(目)の敵にして子供達が大勢して酷め升のを聞升とヤイ手前  
 の親父は業つく(バ)りだからと母かみなんを(し)やアがつたから罰が當つて病氣に成た手前  
 も今に癩病(か)大かた(盲)目になるだらふ按(廣)の稽古(し)しておけど可愛(ら)うに小さい者を(目)隠  
 しをしてつきと(バ)し(踏)たり蹴たり酷(い)目に達升そふでムリ升が(仮)令(ど)んな目に達ふとも決  
 して手出しを(と)るではあいと云付て置升が今日も今日とて(手)習(の)歸(り)を待(て)大勢してソレ  
 とほかみの餓鬼(が)来たと散(く)酷(め)た其上(に)前(の)流(れ)へ突落(し)歸(つ)た跡(へ)折能(く)も私(し)が  
 通り掛(り)様子(を)聞(ば)今(の)譯(早)速(内)へ(と)存(じ)升(た)が悪(い)咄(し)は病人(の)成(丈)耳(へ)入(度)な(さ)此  
 方(へ)連(れ)て上(り)升(た)が是(程)迄(世)間(の)人(に)疎(ま)れるとは旦那様(實)に悔(し)うムリ升る ト手拭

で涙を押へ宜しく泣く又藏おせん始終愛いの思入宜しく有て(せ)其様な事とは今日迄は些  
 とも知らぬに居升たがても意地の悪い子供の餘りといへば悪い仕方お咄しでさへ此胸の張  
 裂やうに思ひ升現在我子を酷い目に逢されたお前の心無念でムリ升ふ實にお察しやし升  
 (さ)どのやうな目に逢升ても水呑百姓の哀しさの遺恨を返さ力もなく悔まい思ひをくひし  
 ぱつて居るより仕様ハムリ升ぬお察し成れて下さり升(又)聞ハ聞程無残る事さ是といふも  
 お上からお咄め受たお道の事何と云解く詞もなければ今の處じやア仕方がねへ然しマア此  
 孝坊ハ其様を酷い目に逢乍ら能くマア手出しをしごに居たナア(孝)爺や嬢々が決して手出  
 しをする事と云から些ども手出しはしごよ居るが已ア悔しくつてならねへや(又)サ、尤も  
 ぶろふだろう然しよく堪へて辛棒した己が御褒美も遣ふ ト後ろの戸柵より菓子を出して  
 紙にのせ こりやア御褒美さう是から成丈表へハ出るひやうにさるがいひや ト菓子をや  
 る孝吉戴いて下へ置いて兩手で目を摩つて居る 泣て居るのハ未だ何處か痛いのか手前は中  
 く強いじやアねへか(孝)是迄度く打れたり抓られたりするけれど我慢をしているから  
 些ども泣た事ハねへけれど跡で悔しいと思ふと跡で涙が出て成ねへや ト是にて皆々顔見

合せ愁いの思入宜しく有(又)一寸の虫でも五分の魂、ト又藏腕組を志て沈と思入(せ)  
 是から内へ歸つた處が風に當つて寒かろう奥に火燵が出来て居るから連れて往て當らせて遣  
 なんせ(さ)有難ふムリ升が私し其風情が火燵なすへ當り升ては勿体なふムリ升(又)ナアニ  
 サ其様を遺慮には及ばねへ奥に出来て居るものだから連れて往て當らせるが宜やナ(さ)左様  
 ならお詞に甘へまして少々當らせて遣升ふ(又)夫がいひく此菓子を持っていつて喰乍らス  
 ツカリ暖まつて往くがい、や可愛ううにナア(さ)左様ならね火燵を戴き升でムリ升ふサア  
 一處に来やト 又藏おせんへ挨拶してねさうの孝吉をつれて奥へ還入る(せ)眞にマア  
 可愛そうな事でムリ升ナア(又)アノみじめな目を見るに付けコリヤア最沈として居られ  
 ねへ(せ)沈として居られぬとわへ(又)今アノ子が云た事お主も聞て居た通り痛ひ思ひは我  
 慢をさるが悔し涙が溢れると子供でさへもあれだけの虫ハ備へて居るものを況て大人の身  
 の上で何と黙つて見て居られやう(せ)然してお前何せふと思ひなさんすへ(又)何事も法の  
 爲手前も己の女房は何様な事が有ふとも法の事から辛抱をさるだろ(せ)夫りやモウ法の  
 の爲とわれづらひ目ハ何様なにも私し堪へる心でムリ升が然してお前の了簡へ

(又)己は是から三宅の島へ行く積りだ(せ)エ、(又)サア爰をよく聞て呉れ今門弟中の人々が世間の者に忌悪まれ今の機あみじめを見るの誰が咎だと思つて居る兄きを始め高弟達がお上を恐れ修行もたてず餘まり慎しみが過るからだ今の姿で置た日には道の開ける時節の多い己に傳への出来る身あら沈として居ねへけれ何といふに修行が若くお死しない身の上だから心の矢竹に思つても手出しも成ねへ今の仕義三宅へ往つて先生のお側でしつくり修行して許しを受た其上で假令お上の咎をうけ死罪にゐるとも一回は濕り返つた此道を引返さにヤア是程の大法を得た甲斐がねへ心を決して先生の思に命を捨る氣だが爰の道理を汲分て跡をしつかり守つてくれト是にておせん沈と思入有て(せ)思ひ詰た其決心よふ合点がゆき升た淨尤もでムリ升私し迎も先生にうけた淨恩は皆一つお道の爲にする事は決して止はし升ぬがお前兄さんに相映をおし成つたかへ(又)兄き達に咄しをすれハ止といふのは知れた事だ一身の外味方なしと人に咄しをする様じやア迎も志ざし貫けねへ(せ)夫も尤も然してお前いつ頃歸る見込でムんと(又)サア一年たつて成就する無學文盲の巳だから三年たつても出来ねへか假令何年立ふともお許しのねへ其内ハ再び歸つて來

ねへ氣だ(せ)夫程道のお前の覺悟決して止はし升ぬが生死計れぬ長の別れ成ふ事なら茲に居て外に思案ハムんせぬういナア(又)二昨年の暮お行衛の知れなく成た知善様が茲にお出成れたらアノお方にお願ひ申せば修行の出来る事もあらふが頼みに思ふ知善様は今何處にゐるやら生死の程も定かならず島へ行くより思案ハねへのだ(せ)夫も何でも覺悟して(又)今夜の内に掛るよ(せ)跡ハ私しが引受升た必らぞ心を殘さず(又)能く云て呉た忝けなひ夫あら是から支度をしてト立上るおせん袂を引て(せ)ア、もし此世でハ逢升ぬぞへト兩人沈と手を取て顔見名せ宜しく有て又瀧振放して(又)コレ何にも云ねへ此通りだト手を合せて拜ひおせん顔を背けて泣くドレ支度に掛らふかト唄に成り宜しくおせんの方へ思入有て又瀧ツイと奥へ這入る跡合方(せ)思ひがけない夫の覺悟ア、云出して止たどて所詮止らぬ日頃の氣性○チ、コリヤ本家へ往て兄さんに内々で○イヤ、然したあらバ又瀧殿が云甲斐のあひ女じやと定めし愛想をつかさね思へばいつぞや知善様が、賊舟をつらく嬉しきものハなしと示しありしお詞が今と成てハ身にわたる賊ハ切あひものトヤナアトよろしく思入下座の地藏和讃に成り向ふより采女の知善月代の仲たる坊主

本舞臺三間の間通し常足の二重三方折廻して庇椽側付向ふ床の間連ひ掘敷への唐紙上の方  
 奥へ下げて一間の續き家体障子をたて下の方三尺の續き道具小窓付の茶壁庇椽側同斷平舞  
 臺處々石燈籠庭木のあしらひ飛石の摸樣宜しく上の方眺への板塀にて見切り下の方四ツ目  
 垣の見切り都て又藏内奥座敷の体  
 合方にて道具止まる  
 ト奥よりれせん先に知善出て來りおせん梅を出して上手よき處へまき(せ)サア是へれ坐  
 り下さり升せ(知)夫でハ恐入升る決してれ擔ひ下され升な ト梅を外して住ふ(せ)何卒お  
 敷き成れて下さり升無マア宿でも喜ぶてムリ升ふ又藏との一 ト是にて上手の障子を明  
 け又藏出るれせん傍へゆく(又)慌しい何の用だ(せ)もし知善様が歸り成され升た(又)  
 ナニ知善様が ト見てはつくり ヤ真とに貴所の知善様 ト兩人下手へ來たり宜しく住ひ  
 テモ思ひ掛けない宜ふれ歸り下されました(知)又藏殿にもお變りなふ(又)貴所様にも伊  
 息才で(知)此様を嬉しい(兩人)事いふらぬ ト三人悦ぶ事宜しくれせん茶を汲で持ち來  
 り(せ)マアお茶お一ツお上り成され升(知)お擔ひ下され升な ト茶椀を取り茶を呑む(

此摸樣幕助の鳴物にて道具廻る

本舞臺三間の間通し常足の二重三方折廻して庇椽側付向ふ床の間連ひ掘敷への唐紙上の方  
 奥へ下げて一間の續き家体障子をたて下の方三尺の續き道具小窓付の茶壁庇椽側同斷平舞  
 臺處々石燈籠庭木のあしらひ飛石の摸樣宜しく上の方眺への板塀にて見切り下の方四ツ目  
 垣の見切り都て又藏内奥座敷の体

合方にて道具止まる

ト奥よりれせん先に知善出て來りおせん梅を出して上手よき處へまき(せ)サア是へれ坐  
 り下さり升せ(知)夫でハ恐入升る決してれ擔ひ下され升な ト梅を外して住ふ(せ)何卒お  
 敷き成れて下さり升無マア宿でも喜ぶてムリ升ふ又藏との一 ト是にて上手の障子を明  
 け又藏出るれせん傍へゆく(又)慌しい何の用だ(せ)もし知善様が歸り成され升た(又)  
 ナニ知善様が ト見てはつくり ヤ真とに貴所の知善様 ト兩人下手へ來たり宜しく住ひ  
 テモ思ひ掛けない宜ふれ歸り下されました(知)又藏殿にもお變りなふ(又)貴所様にも伊  
 息才で(知)此様を嬉しい(兩人)事いふらぬ ト三人悦ぶ事宜しくれせん茶を汲で持ち來  
 り(せ)マアお茶お一ツお上り成され升(知)お擔ひ下され升な ト茶椀を取り茶を呑む(

又(一)昨年の暮貴所様に、お行衛知れず去年の五月先生には三宅の島へ流罪の御身誰を便りにさるものもあくお慕ひ申す、貴所お一人何處に何してゐるか、と寄と觸るとお噂斗り思へぬ日どては、ムリ升なんだ今日お目に掛らふとは、誠に夢の世の中でムリ升るナア(知)私くしどても古郷を跡に見なして、長の旅吾妻の空の懐しく貴所を始め皆様の事思へぬ日どては、ムリ升ぬ(せ)貴所様に、御修行に最御不足のない、御身にて如何ある深い思召の有ての事か、以前に變る其お姿マア今日迄、何れにお出成れ升た(知)お咄し申せば、長い事マア一ト通り聞て下さり升、ト詠への合方になり、一昨年の暮先生に、御流罪と事極まれ、最早此地に用なき身の上梅田に於て、人知れぞお約し申せし事あれ、バ身は尼法師と姿を變へ、先づ越後路と志ざし、美濃尾張から能登越中神社佛閣を訪ひ、求め名ある智識に身を寄せて、其道の秘密を探り、夫より中國を遍歴し、普ねく諸宗の極意とする、其道奥を究めしが、兼て先生の教へ玉ふ、我が神道の極意には、中に、届かぬ教もあり、又、ひつたり合ふもあれ、と、濟度の道へ先生の教に上越さるもの、はなく、彌く、以て吾國の道の尊き事を知り、夫より、其處立出て、暫く京地に足を留め、世の成行を伺ひしが、最早再た、び道を興す、稍時節にも向ひしか、と心に思ふ事有て、立歸

りたる此知善が跡を隠せし事の次第荒く、斯様でムリ升る(又)ハ、飽迄厚きお志ざし、恐入てムリ升る如何にも、貴所のお見込通り、靜まり切たる門中の眼を覺と、今此時夫に付て、ハ私しも既に、今宵當地を離れ、三宅へ渡り、先生のお側で、修行致さふと決心なせし、今日只今、不思議にも、貴所にお目に掛り、升たに、全く神のれ引合せ、飛立斗り、心の悦び、何卒、今日より、私し方には、逗留下さる様偏にお願ひ、升る(せ)只今、宿で、升る通り、いつく迄も、私し共に、は、逗留下され、升て、修行の事や、何や、彼やお引立を願ひ、升れば、此々様煩しい事、ムリ升ぬ、何卒、貴所のお宅、思召は、逗留成れて、下され、升(知)差當つては、御當家に、浮厄介に、成升、夫に付て、ハ、又、藏さん、三宅の島へ行く、と、迄、決心成れし事、なれ、ハ、私しに、身をお任せ、成れ、命を掛けて、一ト、修行成る、お心、ハ、ムリ升ぬ、か(又)ろりや、此方より、願ふ處、此身も、命も、貴所様に、ソツソリ、お任せ、升、何分、宜し、願ひ、升る(知)其お心で、有る、あらば、七日の間、お祓をお唱へ、詰成れた、なら、多分、道の徹底をお盡し、成る、事、で、ムリ升、ふ(又)七日の愚か、一年でも、貴所の御免し、ある、まで、ハ、捨身の修行、致、と、で、ムリ升、ふ、ト、此時、奥より、村越次郎兵衛、同次郎、一羽、織着、流し、善吉、付て、出て、來り、(次郎兵衛)ヤレ、た、久し、や、知善、様、宜、ふ、お歸り、下、され、升、た(知)コレ、ハ、ハ、ハ、次郎兵衛、様、次郎、一、さん、も

一處にマア此方へお出成れ升(次郎一)毎日一々贈を申暮して居り升た宜ふお歸り下さ  
 れ升た(又)チ、兄き今知らせ様と思つた所何してお前來なすつた(善)先刻お出を知り升た  
 故私しがお知らせ申升た(又)夫ハ能く知らせて下すつた。ト此内次郎兵衛ハ上手次郎一ハ  
 下手宜き處へ住ふ善吉ハむつと下手へ住ふ(次)先ハ知善様にも御堅勝にて此上の義ハムリ  
 升ぬ(知)次郎兵衛様にも御機嫌よふお願し存じ升る(次)何からお咄し申さふか先生が島  
 へムつてからハ日増に人氣も衰へてさどかに多い門中も漏り切たる今の有様一ト通りでハ  
 中く引立様子も見へ升ねハ實ハ貴所のお歸りを日々待申て居り升た(次郎一)私しの身  
 ハ取分て此衰へた門中の様子を見るに忍び升ねば未だ先生が牢内にお出成れた其時に一ト  
 度お目に持り度下糞を取る掃除人に姿をやつし牢内へ桶を擔いで入込しが其甲斐あつて先  
 生に首尾よくお目に掛りし時種とお咄しの其中は所詮今度ハ遠島と覺悟ハ兼て極めて居れ  
 ば我ハ世にあきものと思ひ只幾重にも大道の絶ゆるやうに頼むやと吳くそのお詞に涙  
 でれ別れ申升たが其後深川万年橋でお暇乞の其時も此事斗りをお案じ成れ必らず頼むと直  
 ぐに仰を受けて居り升れバ今の門中の有様を餘所に見なして一日も居ても立ても居られ升

ぬと何を云ふにも微力な我ハ心ならずも今日迄手を束ねて居り升た(又)門中擧つて心を  
 寄せお暮ひやぞ知善様が再たびお歸り成れたハ道に取てハ千人力(次)重立ものを呼集め力  
 を合せ遠からぞ道の再擧を計るでムらふ(次郎一)保木間の叔父さんの處へハ私しが往て參  
 り升ふ(知)ア、イヤ保木間のお宅へハ實ハ昨日上り升て一夜彦介に成升たれバ今日此方  
 へ上る事も宜ふ存じてムり升る(次郎一)夫でハ保木間の叔父さん(知)願て彦當家へは  
 出でムり升ふ(次)夫でハ來るに違ひなし野澤杉山其外へハ書狀を以て通じ私し宅へ寄合  
 升ふ(知)長沼加藤の彦兩所ハ彦浪人を成れ升たがお變りもムり升ぬか(次郎一)若殿のお計  
 らひにて再たびお屋敷へお戻り成れ只今にてハ元の如くは家來の身にお成り成れ升た(知)  
 夫はマア有難い事でもり升た(次)是へも通じたらバ早速此方へ出て參られるでムらふ  
(善)アイ有難いハそふとる内ハ私しハ一番がけに處々方々居眠つて居る門中を呼覺して  
 歩行升ふ(知)頼みに思ひし貴所方のお志に變りあふ大いに力を得升てムり升る(せ)斯  
 ふお心が一致すれば頭て榮ふるお道の繁昌此様お嬉しい事はムり升ぬ。ト此時奥より以前  
 のおさだ孝吉を連れ出て來り下手に住(い)皆様方のお咄しを與にて委細承まへり頼し候



に暮て居り升た(次郎一)ヲ、おさだ来て居たか(知)眞に實所の忠次郎さんの家内(さ)知  
 善様暫くお目に掛り升ぬ(知)忠次郎さんにもお變りはムリ升ぬか(さ)此程病氣で居り升る  
 が餘程宜しい方でムリ升れば此咄しを聞せ升たら賑悦び升でムリ升ふ(又)今日如何ある  
 吉日か思はぬ人に相生の(せ)松の常盤の色かへぬ操の堅き眞心に(次)再たび開く優曇華の  
 花にも増る此出會(知)八千代をかけし願事も徒らならぬお誓ひ(善)其古への日向路に襪た  
 玉へる神業を(さ)今も神代と知る人の縁の繋る身の果報(次郎一)頓て天下へ公けに開く時  
 節の幸先(次)實に神國の ト木の頭(皆々)いさほしじやナア

ト皆々悦びの模様宜しく賑かなる詠への鳴物にて幕

七幕目

○三宅島配所の場

本舞臺三間の間正面少し上へ寄せて二間常足の二重皮付丸木の柱三方折廻して茅屋根の庇  
 丸木の椽側二重真中より上の方破れたる腰壁此上明た處より後ろの海原の書割を見せ真中  
 より下の方三尺古びたる戸板の開き戸押入の心破たる鼠壁に棚を釣り世帯道具の鹿未なる  
 を上せ有り上手三尺葺下しの板羽目はへ葺笠多と掛あり下の方三尺疎く繩からげの竹垣上  
 下とも極低き岩山の張物向ふ一面茅屋根の町續きより大海原を見たる遠見の書割上下蘆原  
 の見切二重の上一面に楚を布詰り下の方へ圍爐裏に古びたる自在を掛極穩き土瓶を掛け平  
 舞臺よき處に丸木の輪切にしたる腰掛様の物ニツ程据へ平舞臺一面に砂地の布を敷詰り都  
 て井上式部配所の体大道具小道具とも総て詠へ有り

浪の音にて幕明く

ト直に袴羽織の口上出て(口上)東西一此處一寸口上を以て申上り升此處ハ三宅島配所の  
 場ニムリ升れば舞臺に於て演じまる時ハ都て島言葉を以て致し升るハ勿論の事にムリ升れ

是ハ舞臺と事變リ文字の上にて御覽に入升る事故片言の可笑げなる臺詞にて致し升る時  
 ハ愁の處にて看客の笑を引き且ハ解し兼る言葉等も是之肝腎を人情を失ふ事にも至り升れ  
 バ都て當り前の臺詞にて御覽に入升れば此段左様御承知を願ひ升先ハ此處三宅嶋配所の場  
 始左様に御覽下され升ふ ト口上這入る直に床の淨瑠璃に成る 上日の本の中どのハ云へと  
 海上遙か隔てし片隅に科ある者の配所とて名に負ふ三宅の荒磯島越の上の起臥は哀れ詫し  
 羽生の小屋軒も疎に夕日影偵が井上先生の教の風の賢くも頼む甲斐ある嶋人が ト浪の  
 音島の小唄節に成り下手より水汲女おぼらおしやこ島人好の掙へにてびくを持熊手すくひ  
 網などを持て出て來り(ぼら)おはつさんお内かへ(し)やこ(昨日は忙しくて終尋ねませなん  
 だ(不)チャ誰も居ないよ先生ハ例の釣で有ふがおはつさんが居そふなもの(し)大方水でも  
 汲に往たのだらふよ些と茲に待て居よふじやないか(不)ア、そふ仕様 ト兩人前の丸木へ  
 腰を掛け(し)眞とふにマアいつまで雨が降らぬのだらふねへもう今日で四十日程になる  
 がねへ何したと云ふのだらふ(ぼ)今年の様な早懸ハ此島中年寄ハ覺へないと云ふ事最二三  
 日も雨が降らないと島中が日干に成て仕舞がねへ(し)何せお米ハ取れなくつても此島でお

米を喰て居る者に眞の物持の手合斗り貧乏人ハ平素から米の顔を見る事いらないから米ハ何  
 でもよけれと干芋の少いのハ眞とふに困り切るよ(ぼ)我々の喰物の干芋がお飯だから夫  
 さへ有れば宜ひのだが此早懸て引足らぬ三度の物を二度喰ても夫でも追附かぬのだ者を  
 (志)四五日跡迄ハ鯉魚が取れたので夫で余程喰いだが早懸續きで夫もさつぱり取れなくな  
 つて是から先ハ何しやうかと心細くて成ないのだよ(ぼ)夫でもねへ是が以前の私共共  
 何様なに氣が揉るか知れないがこつちの先生のお弟子に成て段々有難いお咄しを聞て居る  
 ので斷念が付といふものだねへ(し)眞とふにろふだよ茲の先生のお蔭じやア村中の者が何  
 様なに助かつて居るか知れやアしないよ内の宿六の様な悪黨がお前何様なに優しく成たら  
 ふじやアないかマア聞よ此間もね手前一人に水を汲せちやア可愛うふだから已が汲で來  
 て遣ふと云つてねお前其様な優しい事をいふのだよ(ぼ)何せ江戸で悪い事をしてぶん流さ  
 れて來る奴だ者直な奴じやア有りやアしないが能くマア其様を優しい事を云ふ様に成たね  
 へ然してお前汲せて遣たかへ(し)向ふからそふ出られるとね又可愛くあるからろふ云つて  
 遣たの(ぼ)何と云つてお遣たへ(し)江戸から流されて來た者は此島の掟で男ならハ是非

水汲の女といふ者を抱へなければあらないのが極りに成て居るたらふ夫と云ふのが此島の  
 水が不自由で酷い岩瀬を傳へつて汲に行ねばならぬのだが迎も男の業でいけいなから  
 水汲むの女の役も成て居て夫で私しのお前に抱へられた水汲女夫婦と云へど表向の私  
 しがお前の水汲だから私しが汲のが當然お前が水を汲に及ばないと云てそふ云て遣たよ  
 (ば)能くそう云てお遣だねへ大方其晩にしてお前を可愛がつたらふねへ(し)何だねへ直に其  
 様な事をお云だねへ夫のそふとね茲のねはつさんへ足掛け二年先生と夫婦と成て居るけれ  
 ど未だ一遍も一ツ寐をしあいのだどサ(ば)チャマア夫りやア又何したのだねへ(し)其譯を  
 聞こふと思ふがねるんば何でも打付けて聞の極りが悪いからねへ(不)彼様美女を側へ  
 置いて眞とふに先生も分らないねへ分らないと云へば此間から村の者が此早魃で先生よ雨乞  
 をして貰はふと度々頼に來るそふだが先生が聞かないと云ふが私しに(さ)つばり分らな  
 いよ(ま)うりやア私しも分らないのだよ此様赤に大勢難儀して居るのだから先生だつて聞  
 いて下さつてもいい譯だねへ何故聞て呉あいのだるよ(ば)彼様を信切なお人が此雨乞を  
 聞て呉あいの(不)是斗かりの眞とふに分らないよ夫に(不)何か譯の有事が頼と様でも悪いのか

おはつさんが歸つたら聞て見やうじやアないか(ま)夫がいひよ夫にしてもおはつさんの早  
 歸りそふあものだねへ(不)夫でも茲から岩窟迄の餘程の道だから(し)アノ優しい體では大  
 体難儀なと有ふねへ(上)形に似合ぬ優しさの眞が女と知られり折柄彼方の山傳い井上  
 式部が假の妻名の水汲のねはつとて年も廿才の沖の石越で磯打浪風に腐り染ても染抜ぬ消  
 き心の水桶を頭に荷ひ甲斐しく我家を差して立歸る(ト此文句にて下手より水汲おは  
 つ嶋人好の控へにて水桶を頭に上せ襪端折跣足にて出て來る(ト)夫と見るより二人は差寄  
 り(不)チャおはつさんお歸りかへ(ま)最新から待て居たよ(は)左様でムリ升たか一寸水を  
 汲升にも道が遠いので暇が入て成升ぬ(不)今もお前の噂をして居たのだよ私し達でさへア  
 ノ岩窟を傳へつて水を汲のハ大骨だから(ま)お前の優しい體でハ大抵難儀な事有ふねへ  
 (ト此内ねはつ水桶を下手よき處へ置いて足を拭て二重へ上り(は)始めの内の中く難儀で  
 ムリ升たか馴て見ると何ともないものでムリ升(は)眞にね前へ感心な人だよ此早魃續きで  
 村中の喰物が引足り困つて居る中だから定めしお前もお困りだらふと此様赤小魚でも少  
 しハ足に成ふかと持て來たのだね何ぞ先生へ上げて下さいよ(ト)びくの儘おはつの前へ

出す(は)此難澁(このなんじぼ)の一同(いっどう)の事御深切(ごせんせつ)の有難(ありがた)ふムリ升(ぼ)が是(こゝ)をお賞(おもう)ひ申(まう)て、濟升(すけぼ)ぬ(ぼ)ナアニ左(さ)様に遠慮(えんりょ)してお呉(くれ)でないよ大(おほ)い處(ひま)の干物(ひもの)にして江戸(えど)へ出(だ)せから眞(まこと)の内(うち)で喰(たべ)るのを些(ち)と斗(と)り持(も)つて來(き)たんだアチ(し)種々(しんしん)先生の世話(せわ)にゐるから眞(まこと)の心斗(こゝろ)りの事何(こと)卒(そ)つて置(お)いてお呉(くれ)よ(は)有難(ありがた)ふムリ升(ぼ)が雖(なほ)しも難儀(なんぎ)の同じ事(こと)是(こゝ)へお返(かへ)し申(まう)升(ぼ)コレサ其様(そのさま)にお云(い)ひで、私(わたし)しが困(こま)るよ(し)そふ云(い)ふに何卒(なんぞ)に願(ねが)ひだから先生(せんせい)に上(あ)げてお呉(くれ)よ(は)夫程(それほど)に仰(お)しやるもの夫(そん)なら戴(いた)して置(お)升(ぼ)此後(このち)に決(けつ)して御無用(ごむいよう)に成(な)つて下(くだ)さいまし(は)ナアニお前(まへ)なければ持(も)つて來(き)やアしあひから其遠慮(えんりょ)に及(およ)ばないやね(初)毎度(まいど)一(いっ)涉(せつ)深切(せんせつ)に有難(ありがた)ふムリ升(ぼ)が茲(こゝ)の先生(せんせい)のお蔭(かげ)では何様(なんさま)に助(たす)かりて居(い)るか知(し)れあ(い)から何程(いくら)何(なに)を上(あ)げても云(い)ひのたが思(おも)ふやうに、いかないのさ夫(それ)にしてはおはつさんお前(まへ)にい(い)亭主(ていしゆ)を持(も)つて仕合(しあ)はね(は)江戸(えど)にい(い)お弟(てい)子(こ)があるの船(ふね)さへ來(き)ば其度(そのど)に送物(おくもの)のあるし眞(まこと)どうにお前(まへ)の仕合(しあ)はよ(は)此身(こゝろ)に過(す)た亭主(ていしゆ)を持(も)ち此様(このさま)仕合(しあ)は事(こと)ムリ升(ぼ)ぬ如何(いかに)様(さま)にもして仕(つか)へられ成(な)り升(ぼ)ぬか島(しま)で生(な)れて何(なに)一(いっ)習(なら)つた事(こと)もムリ升(ぼ)ぬ故届(ゆめさ)かぬ勝(かち)て濟(す)ぬ事(こと)でムリ升(ぼ)ぬ(不)お前(まへ)眞(まこと)とふに先生(せんせい)を大(だい)事(じ)におしよ彼様(あんな)い(い)お人(ひと)の有(あ)り仕(し)るいよ(は)人(ひと)の道(みち)と云(い)ふ事(こと)の少(すく)な道理(だうり)を辨(わ)へ升(ぼ)たも皆(みな)先生(せんせい)のお蔭(かげ)故(こゝ)心斗(こゝろ)りは

何様(なんさま)にも大(だい)事(じ)にする氣(き)で居(い)升(ぼ)が何(なに)を云(い)ふにも此身(こゝろ)の不束(ふたふ)し(し)ナアにお前(まへ)の様(さま)ない、女(おんな)が此嶋(こゝ)中(なか)にある物(もの)かね私(わたし)が男(おとこ)あ(い)疾(い)に打捨(うちす)て置(お)はしないよ(は)女(おんな)で仕合(しあ)は此様(このさま)人(ひと)に思(おも)れたら困(こま)だらふね(は)兩人(ふたり)ワハ、一(いっ)咄(はな)し半(はん)に彼方(あな)より茲(こゝ)に入(い)來(き)る興四郎(きよしろう)が、浪(なみ)の音鳥(ねとり)の小唄(こゝろ)節(ふし)に成(な)り源師(げんし)松藏(まつざう)の弟(あに)興四郎(きよしろう)好(この)拵(こしら)へにて出(い)來(き)る興四郎(きよしろう)若(も)し先生(せんせい)様(さま)は内(うち)でムリ升(ぼ)か(は)是(こゝ)興四郎(きよしろう)さん宜(よろ)お出(い)成(な)れ升(ぼ)た先生(せんせい)の晝後(ひるご)から濱(はま)へ釣(つ)に出掛(い)升(ぼ)たが何(なに)多(た)用(よう)でムリ升(ぼ)か(は)(興)ろふ改(あら)まつて仰(お)しやられ升(ぼ)て、申(まう)惡(わる)い事(こと)でムリ升(ぼ)るが幸(さい)ひ先生(せんせい)がお留(る)主(す)と有(あ)ればお初(はつ)さん貴所(あなた)に内(うち)々(々々)お聞(き)申(まう)とふムリ升(ぼ)る(は)そふして其御尋(ごたづ)ねと仰(お)しやい升(ぼ)の何様(なんさま)な事(こと)でムリ升(ぼ)るへ(興)是迄(これまで)度々(たぐ)先生(せんせい)から天地(てんち)の道理(だうり)もお聞(き)き申(まう)承(うけ)知(ち)して居(い)る私(わたし)が申(まう)上(あ)るは濟(す)ぬ事(こと)でムリ升(ぼ)るが村(むら)の者(もの)が幾度(いくた)どなくお願(ねが)申(まう)た雨乞(あまご)の事(こと)何(なに)も承(うけ)知(ち)ムリ升(ぼ)まいあ(初)ろりや私(わたし)しが申(まう)さずとも人(ひと)が祈(いの)つて雨(あめ)の降(ふ)る道理(だうり)のあいど云(い)ふ事(こと)のお前(まへ)さんもよふ存(ぞん)存(ぞん)の通(と)り幾度(いくた)咄(はな)しをした處(ところ)が無益(むだ)な事(こと)でムリ升(ぼ)る(興)サア其道理(そのだうり)も知(し)り乍(な)らぬ奴(やつ)と先生(せんせい)のお申(まう)すも承(うけ)知(ち)して、居(い)る升(ぼ)るが申(まう)上(あ)ねば成(な)ぬといふマア其譯(そのわけ)を聞(き)て下(くだ)さい升(ぼ)ト合方(あひかた)に成(な)り昨日(きのう)日村(ひむら)長の八太夫(やまた)様(さま)が私(わたし)に仰(お)しやい升(ぼ)に、今(いま)此通(このと)り島中(しまな)か難儀(なんぎ)に迫(せま)つて居(い)るものを世

に有難い先生と人の尊む正續さんが何故雨乞をしてくれぬのだ是迄神道の修行のど人を怖  
 して居なすつても實は行力がないので有ふ今此難澁を見捨てる様な其様な不實な信心なら己  
 が村長の威光で村中の信心を止させると以ての外の腹立でそりや最口穢く申され升たが家  
 て先生から伺つて居る道理を種々申升たが中へ以て聞入れずとこへ歸る其途中も門中  
 の人が口へは是を聞いて呉ぬへ先生の了簡が分らぬが何でもアリアア先生が是迄云て聞せ  
 る事は口先升りて人を欺し眞實の行かへないのの有ふ然して見れば有難くも何ともない人  
 だ杯と云ふのを聞いて實に腹が立て成升ぬ何辨へぬ嶋人故夫を云ひ解くよしもなく又村長  
 が腹立紛れ何様な事を仕出してた道の害を仕やうかと案じられて成升ぬ故無益と知りつ、  
 此事をお聞申に上り升てムリ升 眞實眞身與四郎が案じる胸を察しやり(は)其事は私し  
 も案じぬでへまけれども降らぬを知てなまじいに雨乞をした其跡で人の謗を受くるより寧  
 そ初手から爲ぬ方が宜かふるかとも思ひ升る(不)先生始め貴所迄其様な事を仰しやい升か  
 ね此方の先生の行力で何で降らぬも事があるのかね(し)卑下あさるのも時により升今此通  
 りの難澁を助けて下さる思召へないのでムリ升るね(初)そりや最新つて雨が降る事なら

お頼みなくとも島中の此難澁を先生が何で餘所に見て居り升ふ天地の事ハ人間の何も自由  
 に成升ぬ故是非多ひ事でムリ升る(不)そふ云れて見ると仕方もある事だが眞に私しが先生  
 程の力が有れば直に祈つて雨を降らせて皆なを喜ばせて遣ければね(ま)そふある時ハ嶋  
 中が難有がつてお弟子に成りお道が盛んになるものを眞に齒痒ひ事だねへ 上二人ハ本意  
 あく顔見合せ思案にあぐむ其處ろへ息せき走せ来る松藏が夫と見るより聲を掛け 下手  
 ばたへにて漁師松藏少し老たる拵へにて走りいで(松藏)ナ、弟爰に居たかおはつさん大  
 變事が出來升た(は)ナニ大變事が出來たど(松)今村中の者が集つて此儘ゆけば島中  
 が日干に成て仕舞事ゆゑ村中擧つて押掛て何でも先生に雨乞をして貰はふと大騒ぎを遣て  
 居るから兼て先生のね論しの通りいろへ云つて聞せましたか少しも聞入れる景色ハなく  
 村長殿を始めとして今大勢爰へ遣て來升から先へ欠抜けれ知らせ申に來升たが先生ハれ留  
 守でムリ升か(は)ナ、そふでムリ升たか先生ハ晝後から濱邊へ釣に参り升た(松)れ留守と  
 聞て一ト安心コレ與四郎貴様は先生の處へいつて今歸つて來ていけ升ぬと何處へ入りと  
 も先生のね體をね隠しナせ(與)うういふ事なら是から濱邊へ(松)少しも早く(與)合点だ

「遠足出して奥四郎は濱邊を道で急ぎ行く。ト奥四郎一散に向ふへ這入る。ト折柄茲へとや」と林中の者打揃ひ中にも村長先に立ち。ト下手より村長八太夫先に百姓大勢三階惣出思ひの形にて出て来り平舞臺へ一杯に居並ぶ(八太夫)今日何でも先生に聞て貰ひにや成ぬとへ〇受合て下され(皆々)受合て下され。トわや〜いふ(松)ア、コレ〜八太夫様も皆の主も氣の揉るの〜さら〜無理でいふらぬが今日先生も忙留主故今日の處は内へ歸り明日の事に成れ升(は)イヤ〜今日歸るまい〇忙留主ならお歸り迄△飯令今夜夜通しでも〇茲に一同待て居て〇何でも彼でも雨乞を〇受合て呉ぬ其内は〇一人も内へ歸るまいと〇村長をの始めとして〇議定を堅めて来たから〇死でも茲に(皆々)動き升ぬ〜(松)夫ら何でも皆の衆(ハ)チ、茲に歸りを(皆々)待て居升ぞ(は)もし松藏さんコリヤ何したら宜ふムり升ふ(松)困つた事が出来たナア。ト持餘して予見へにける茲に井上正鐵の今の流人の數に入り三宅の海に釣垂て僅かに繋ぐ玉の緒の絶ぬ思ひに奥四郎の知らせを餘所に悠々と吾が家をさして歩行来る。ト向うより井上式部流人好の持ちへにて杖を突き出る跡より奥四郎ひと釣竿を持ち付添ひ出て花道にて(奥)何ふでも貴所へはかへ

り成され升か(式)心に思ふ事あれば必らず心配致されな。ト打連れ立て歸り來たる。ト兩人本舞臺へ来る(松)マア先生(は)おかへりでもムり升たか(ハ)ソリヤ正鐵どのがかへられた(皆々)おかへり成された〜。トささぐ詞ハを耳にも掛け心静かに座に直はる。ト式部宜しく二重上手へ住ふ〇もう先生様此上雨が多い時は島中餓死を致し升△向卒貴所のお力で雨を降らせて島中を□お助け成つて下さい升▲は願ひでもり升(皆々)は願ひがムり升トわや〜いふ(ハ)コレ〜其様に騒がつしやるな今日己が出て来たから何でも云ふ事を聞せにや置かぬマア〜己に任せて静かにさつしやれ。ト云つと願て椽先へ肩臂いからし詰寄て。ト八太夫二重へ上り式部の傍へ詰寄り。コレ正鐵との其方へゑらい先生と村中擧つて尊まれ人に教をさる身分で今此島中の難儀が其方の目には這入ぬかイヤサ此早魃が見ぬぬのか此間から村の者が度〜頼む雨乞を兎角拒んで聞つしやらぬか聞けバ人が新つたときかぬものじやと云れるるふなが夫りやア何の事じやイヤなんぼ都會を離れた嶋人故知るまいと思つしやるかコレ小野小町を始として雨乞をして雨を降らせた例しは何程も有升ぞ今でも諸方で早魃にハ笠笠を着て高山へ昔雨乞に出るじやムらぬか寶井其角ハ獲

句の徳で雨を降らし天下へ其名を上た事雖知らぬものもムらぬ殊に其方の神道の神に仕へる身を以て此雨乞を断つて其職掌が濟升か但し其方が骨を惜み此大勢の難澁を助くる心のムらぬのかサア私がいふのが無理でムるか無理なら無理と云つしやれ黙つて居ては事が分らぬ何とぞムる 云へ此方は黙然と手を又きて思案の体 コレ返事のなひは不承知かコレ何と云つしやらぬ ト八太夫一寸思入有て サア斯ふ並べ立てハ云ものゝ有やうハ島中の難儀を助けて貰ひたサ私がいひ様が悪かつたら幾重にも罷升るコレ正鐵迄の其方の返事只一ツで多くの人の助かる事無理か知らぬが八太夫コレ此通り手を突て頼み升何卒聞て下されいのふ 上頼めば皆もともトに○先生さま貴所が聞てさへ下されば△村中一同助かり升□もし何卒頼み(皆々)申升る 上理非辨へぬ島人が切なる頼みに正鐵ハ兼て覺悟の心を定め(式)如何にも頼むを承知し升た(八)夫なら皆の頼むを○貴所ハ聞て(皆々)下さり升か(式)千都の山にて雨乞なし神の冥助を祈るでムらふ(は)夫で私も安心し升た○ア、有難い〜先生が受合てさへ下されば△何の道雨ハ降るといふもの□夫で一同蘇生り升た有難ふ(皆々)ムり升〜 上我を忘れて一同が嬉し悦ぶるの有様正鐵不便と打見やり

(式)正鐵借に受合へば御安堵有て各々には夫〜お内へお引取下され(は)其方が千都へムる一同送つて(皆々)參り升ふ(式)イヤ〜夫は無益な事只此儘に帰下され(は)ろふいふ事なら私共は一ト先内へ引取升ふ皆の衆も一處にムれ○夫あら先生がれ出掛けあすつた時又れ送り申升ふ△八太夫様段〜のれ骨折有難ふムり升る○先生様有難ふムり升(皆々)有難ふムり升 上喜び勇み島人は手々に吾家へ立歸る ト皆々代り〜禮を云て見やく云て下手へ這入る正鐵おはつ松藏與四郎殘る 上跡見送りて松藏はつ式部の側へ差寄て(松)もし先生様何も合点が參り升ぬ(は)今迄彼程事譯云て(與)に断り成れた貴所様が(松)受合てれ歸し成れた何ぞれ見込でもムり升るか 上いふに正鐵吐息をつき(式)別に見込も向にもない(は)然して貴所のお心ハ(式)アノ大勢の島人に此正鐵が一命を遺て仕舞迄の事じや(は)エ、何で貴所のれ命を(松)遺て仕舞と仰しやり升るハ(式)爰に残りし三人ハ道の道理も解し得ん所存の程を咄して聞さん ト床の合方 抑も古へより雨乞ハ其例しなきに非や唐土にてハ殷の湯王我朝にてハ板蓋宮大旱の時に當り尊き御身を犠牲とあし天に誓て雨を乞ひ民の饑渴を救ひ給ふナレ共風雨ハ天の時にして人力の能くせざる事聖帝是を知

り給へさらんや唯天下万民の不幸を御身に引受玉ひ民の父母たる大任を御盡し有るもの  
 あり我荷くも大神の教を奉ずる身にしあれば今一命を神に捧げ此身の任を盡す所存今日願  
 とに應ぜぬ時何辨へぬ島人等が只一向に恨を懐き債が御國の大道の地を拂つて滅絶なま  
 ん生て道の衰へを見る事は神明へ大不忠兎にも角よも正鐵が死すべき時節の到來と心を定  
 め雨乞の扱こる頼みに應せしあり汝等篤と了解致せ 上思ひ切たる決心に三人の歸す詞も  
 なく涙に袖を濡しけりればつゝ漸々顔を上げ(は)段々との委しいれ示し宜ふ台点が参り  
 升たぬきさしならぬ御身の成行是非なひ事にふり升る(式)スリヤおはつにハ吾詞會得が参  
 つたナ(は)ハイ哀しい別れも道の爲め止申の致し升ぬ(式)夫でころ吾妻ありこナ出か  
 したり能く申た〇又松藏との兄弟にハ跡々の事何分とも宜しふ頼と置き升る(松)必らぞお  
 案じ成れ升るを先生といひおはつ様の御心慮を承まはり揮りながら感心致し升た跡々の事  
 ハ私し共が身に引受て致し升れば心置なく雨乞の行にお掛り遊べしませ(與)兎ハ云もの  
 明日が日にも神明感應せしめて恵みの雨の降る時ハ夫こそ島中お徳に靡き盛んに起る  
 お道の繁昌(松)そふなる時は我々も賑や嬉しいとて有ふが(は)遂に是迄昔しから例しあら

ざる今年の早懸(式)今正鐵が身の上ハ愛に至つて一死あるのみ是より千都の山上に至り五  
 穀を断て稜を唱へ愛慈納受の祈誓を成ん(は)スリヤ貴所にハ(松與)アノ断食にて(式)死を  
 決したる今度の雨乞再たび逢ふと思ふなよ(は)ハイよふ断念で居り升る 上口にいへど  
 心にハ若しや是が今生の別れなるかと堰上る涙香込忍び泣き債が覺悟の正鐵も不便のもの  
 と恩愛に弛む心を勵升て(式)頓て千都の山上に屍を曝し期に至るも兼て覺悟の其方とも必  
 らず共に ト四人顔を見合名残の摸樣宜しく正鐵氣を替て 歎くまいぞ 上別れてこそハ  
 ト正鐵立上るを木の頭三人別れを惜む摸樣正鐵立乍ら顔を背けて愁ひの仕打此摸樣涙の  
 音三重にて拍子幕

シヤギリ打切ると直に屍明に成る



八幕目

○千都山嶺の場

本舞臺三間の間一面の山幕山下しにて幕明く

ト山下しにて上手より嶋人の仕出し三人出て来り○何だくへアノ先生が雨乞に掛てか  
 ら最七日にゐるが何したのた雲が一ッ出やアしねへ△今迄ゐらひ先生だと思つて居たが此  
 雨乞がきかないのを見ると有難くも何とも有しねへや□ろふだくゑらひくと思つて  
 居たの、此方等が欺されて居たといふもの。○もうく此信心につくく否に成て仕舞た  
 △誰が彼様な人の云事を聞ものが有ものか口そうだくもう信心止だくト此時上手  
 より島人田吾作好の形にて出て来り(田吾作)夫りやア手前達が無理といふものだ今雨が降  
 らねへからと云て先生のせいと云譯じやアねへやナ○ナニねへ事が有ものか日頃神様く  
 と云つて有難に言觸らし大勢の者を引摺込だじやアねへか△夫が斯して雨乞に掛つて七日  
 たつても降らねへのは自分の修行が足ねへからだ口一体千都の山の上で何をして居るのだ  
 雨をふらせに往て居るのじやアねへか(田)夫りやア手前達に分らねへといふものだ先生も



降りさせたからふが降りねへものなら仕方ねへや十〇矢だから先生の修行が足ねへと云の  
だ茲で雨を降りせねへ様なら真どうに降りねへ先生だ(田)何だ降りねへコウ勿体ねへ事を  
いふなアノ先生を降りねへなんぞとそふいふ手前が降りねへや〇ナメバが降りねへ何處  
が降りねへ(田)其様な分らねへ事を云から夫で己がそふ云のだ〇手前強氣に先生の肩を持  
つる(田)持るくつてよ彼様な有難い先生を悪くぬかす奴等はかたつばしから降りねへ野郎  
△かたつばしから降りねへコウ手前ハこれ何と降りて居る(田)己か己ハ是迄先生の断  
しを聞て些とハ道理を知て居らア實様達の様な分らねへのとハ譯が違ハア口おつう人を見  
くびるな其様な事を吐すと其分にハ置ねへ予(田)其分に置かねへとハ手前何ぞる氣だ〇何  
するものか斯するハ ト〇ハいさまり田吾作の頭をくらハす(田)何をしやアがる ト又打  
返そ是より涙の音賑かある三味線に成り四人とさくさの立廻りの有てト三人して田吾作  
を散々打のめし〇ヤイさまア見やアがれ ト三人上手へ走り遣入る田吾作起上つて(田)  
ア、痛へ〜思へましい目に逢はしやアがる然し明日にも雨が降つてくれれば其時意趣を返  
してやる予覺へて居やアがれ ト空を眺めて 然しマアちよつくら降りそふ様子もねへ

が何にしる困つた事だナア ト向ふ揚幕にて法螺の貝を吹立る ヤアアノ法螺の音ハ船が  
 付たに遠へねへ江戸の船が付ちやア此奴ハ中々忙しいヤ茲に斯してハ居られねへわへ  
 トこの鳴物にて田吾作一散に向ふへ這入る鳴物打上る直に長唄の大薩摩になる 大工一夫  
 蒼海渺々として遙かなる波濤隔てし一孤島北に峨々たる山上に岩石鋭き怪しの洞茲に天下  
 の大導師一七日が其間雨を祈りの鈴の音も幽かに残る玉の緒を掛て誓ひし願事に身を動据  
 へし大盤石哀れにも亦勇まじし、ト山下しにて知らせに付浪幕切て落す  
 本舞臺三間の間通り高足の二重岩山の張物下の方宜き所にたらしの下り道二重上の方大  
 ある岩室古びたる繩を張物凄き摸機眺へあり二重下手をづつと前へ出して頃合ある岩角に  
 清水の流寄る摸機此脇へ大なる楠の立木正面へむけて大なるさし枝都て枝の蔓ふりたる摸  
 機後ろの方所々岩石の張物向ふ一面大海原の遠見花道宜き處に切穴山の上り口都て山上千  
 都岩室の体茲に上手の室の前へ庭を敷き鹿末なる八足机の上に鈴を置き雨乞の備へ宜しく  
 二重下手の岩角の處に前幕の式部白衣にて疲れたる摸機宜しく片手に岩角に靠れて片手に  
 寒氷をしやくい咽を濕ぼして居る

此摸機宜しく道具納まる

ト小鼓のおしらい床の淨瑠璃に成る キ疲れ果たる正續ハ流る、清水に咽喉を濕ぼし遙  
 の空を打眺め(式部)此大早に雲霓を望むも今は數十日飢に疲れし島人が嘸や困苦に迫りつ  
 らん見るもいぶせき有様じやナア 上立んとしてハ立兼る身体疲れ節々も弱り果たる息  
 遣ひ木の根に取付きやうしと岩屋の前に還寄て座ハ占むれども今は早呼吸の息も溜く  
 に儘かに繋ぐ玉の緒を斷るハ斷ね人の爲捨果し身の願事を哀と玉へと一心不乱氣ハ願ませ  
 ど長の日の飢に疲れし五体の弱り人事を忘し暫くハ其儘其處へ打臥たり ト式部宜しく還  
 寄て上手の庭の上へ來り岩屋に向つて鈴を取り聲の立ぬ仕打一心に祈誓する事宜しくトハ  
 淨瑠璃文句一杯に弱り果て、其儘其處へ打倒れる キ一心疑たる哲人が大悲の願力今ころ  
 ハ神明感應ましして時至りしかあら不思議や今迄晴たる大空の一天俄かに掻曇り嵐と吹  
 來る山風と共に降出を雨のおし邊りに晃めく電光の天地に轟く霹靂あどやと見る間も忽ち  
 に車軸を流さ大雨に山々村々おしなべて人の愁ひも一時に洗ひ消ひるるの有様實に著  
 るき神徳ハ三宅の島の雨乞と願しを世々に傳へけり ト此文句の内雨の音電光雷の音激し

く大雨の模様宜しく有 与折柄山の麓より大雨の中をいきせきと松藏おはつへ嬉しさの天へも昇る心地して足もしどろに走付る ト右の鳴物にて花道の切穴より前幕の松藏おはつ簀笠既足にて走り出て直に二重へ上り 与式部の体を見るよとも(松藏)ヤ、コリヤ先生よ(は)つ(氣)を失ふてか 与右左りより抱起し(松)先生さま(は)もし先生(松)氣を確かりとお持ち(兩人)成れ升 与介抱あして呼立れば其聲耳に通じてや我に返りて眼を見開きト式部心付て眼を開く(松)もしお氣が付升たか(は)お心が付き升たか 与いへど此方(松)然と夢路を辿る其面もち(松)もし雨が降て参り升た大雨が降て参り升たぞ(は)御願が成就成れ升た 与いふに思(松)お振仰むき屹と見るより暫く(雨)を見詰て居たりしが(式)チ、キハット斗りに嬉しさの両手を合せ伏拜み暫し涙に暮居たる ト式部宜しくある 与松藏おはつ喜びの涙にくる、其折柄未も頻りにふる雨の中を走來る奥四郎が ト矢張この鳴物にて花道の切穴より奥四郎簀笠にて走り出て 与夫と見るより聲を掛け(奥四郎)其處に居るは兄(松)やないか(松)チ、奥四郎か(與)先生に(何)成れ升た(松)先生に(何)お變りないぞ 与聞に嬉しく走りより ト奥四郎本舞臺へ來り(與)先生にもお變りなく願ひに願つた

此大雨有難い事でムリ升る(松)己も途中で此大雨飛立斗り嬉しさも先生のお身が氣遣(松)く此麓迄欠付たがおはつさんにお目に掛り今爰へ來て御介抱をすて居た處だ(與)私も先刻江戸の船が着た知らせに船場へ行き用を足して居る内に俄かに降出そ此大雨嬉しくして夢中で爰迄欠付升た(松)何にしる先生に何かト口上たいものだ(與)何といふにも此絶頂氷などト口上して置かふ 与云つゝ立て甲斐なくト奥四郎腰より水香を出して下手の清水を汲持來り 先生無お疲れでムリ升ふ咽をお濕し成れ升(式)今に始ぬ涉深切なふふる ト式部水を吞事有(松)ヤレ、嬉しや、是で先生のお徳も願(松)是から先(松)信心を免や斯ふいお者もあく成升ふおはつさん御貴所もお嬉しうムリ升ふ(は)此様を嬉しい事(は)ムリ升ぬ トおはつ花道の切穴を見込で麓の方ががや、と大分そふくしうムリ升が何でも人の來た様子(松)大方門中の人達が悦びてお迎ひに來たのでムリ升ふ(は)アノ大勢の人聲(は)夫に違ひ(は)ムリ升ぬ 与咄しの中に麓よりいろ、走來る八太夫 ト花道の切穴より前幕の八太夫簀笠にて出て來り直に本舞臺へ來り(八太夫)チ、松藏も奥四郎も最來て居たか(松)八太夫様宜ふお出成れ升た(與)先生にも無事でムリ升ヤア此方へお上

り成れ升此さし枝の下が少しは宜しふムリ升(八)先生にも御無事かヤレ〜嬉しや〜  
 ト八太夫二重へ上り宜しく手を突き 先生何とお禮をう升ふか有難ふムリ升る(式)コレハ  
 村長殿大雨の中をよふお越下された(八)大雨の中どハ勿体ない貴所が雨を祈つて下さ  
 れずハ既の事に島中が餓死をする處お蔭で一同蘇生り命の親のいき神様お禮のす様ハムリ  
 升ぬ(式)何の〜此正續が力でハムらぬ皆神明の御恵を能く御恩禮を成るがよふムる(八)  
 其神様の御利益を取次で下されたは貴所のお蔭今日から私しもお弟子となり修行をさせて  
 戴き升今迄陰で悪く云たは濟ぬ事を致し升た先生始めおはつさん二人の者も何卒堪忍して  
 下され夫に付てハ嶋中が大悦びて此山の途中迄お出迎ひに皆出張て居り升る(ハ)麗の方が  
 賑か故今其咄しをして居た處でムリ升(松)夫なら門中の人達がアノお迎に参り升たか(八)  
 イヤ門中所が己が見た處ではお弟子に成ぬ者迄も島中擧つて來て居る様子イヤ夥多しい人  
 數じやわへ(松)ろふいふ事なら忽ちに島中震て道に入り教を學ぶでムリ升ふ(八)學ぶとも  
 〜是からして八太夫が先へ立て説得して一人残らぬ島中をお弟子にせむには置升ぬわへ  
 夫に付ても先生にハ無お涙れでムリ升ふ今此下の后様のお宮で小前の者に申付けお粥を仕

立て居り升ら頼て持て参り升ふ(ハ)夫ハマア宜ふお心付て下さり升た有り難ふムリ升る  
 (與)そつぱり忘れて居り升た先刻江戸の船の付た時お手紙が届いて居り升たれ受取下され  
 升ト 懐るより封の状を出して式部へ渡す 与渡せば取て封押切り ト式部此状の封を切  
 り中より一通とり出して讀む事有 上線廣げて讀む其文体正續美爾と打笑て(式)ハ、ア有  
 難し番けあし此文体でハ江戸表ハ知善尼再び立歸り又藏が非常の修行に結ぶの傳を許せ  
 し由村越坂田を始めとして盛んに法を行ふとあれハ道の開くる時節到來ハ、 上有難やと  
 手を合せ天を仰ひで打悦ぶ(ハ)其お手紙の御様子では兼て案じ成れ升た江戸表の信心  
 も(松)何か盛んに成た御様子(與)お目出度事でムリ升る(式)是も偏へに神の守り玉へ  
 る御導き斯る非常の早懸に我〜しきの願事も神明納受まし〜て(八)實の雨に島中が蘇  
 生つたる此悦び(與)神の恵の漏ひも皆先生の御賜物(ハ)又も重なる悦びは江戸表より類し  
 い便り(松)三宅の嶋の人々も追〜道に風化して(與)ます〜進む皇國の教は末代萬代  
 不易(式)私しならぬ天地と共に榮ふる神の道 上正しき神の御教榮へさかゆく日本の本願  
 て明治の春に逢ふ根さしハ茲に ト五人天を仰いて悦びの摸様

九幕目

○梅田境内祭典の場○隅田堤花見の場

本舞臺一間の間一面松並木の隅より田畑を見たる遠見を畫きたる道具幕

賑か成る鳴物にて幕明く

ト上手より門中の仕出し思ひの形にて出て來り○今日は何でも羽目を外して遊ばふぞ△ろふともく此様な時に隠し藝を出して方々の門中を驚かして遣にやア成ねへ□毎年梅田のお祭りは毎も歸りは向島だから己ア樂しみにして居るのだ○取分今年ハ大先生の四十年祭といふものだから何でも立派にしろといふ先生方の云付だ最初が梅田の御神前にて本莊様を始めとして先生方が式を正し伊祭典が濟で仕舞と夫から先が此方の番だ向島へ押出して身襖社中の勢ひを見せてやらにやア成ねへのだ□然しは一新前迄ハ公儀で喧しく云れたものだから隠れ忍んで居たのだつけナア○此伊一新に成てから政府から表向許可に成て先生の位牌ハ鳴から御敷に成りお骨迄も堀て來て梅田と谷中へ分骨をして兩方共立派なお石牌が立たた事だが此様な目出度事ハねへナア△今日ハ各社の門中が惣出といふのだ

が村越さんと小幡さんの社中には劇場、社會と吉原連が多いから定めし面白い思ひ付が有  
 だろ。う。□噂をきけば其社中で茶番を仕組といふ事だ。せ何か本とふに遣て見せればいひがナ  
 ア〇嘘じやアねへ眞とふぶ其番組ハ己が茲に持て居らア二人に呼で聞せやうか△夫じやア  
 茲で聞せて呉ねへ〇よし〜一番口上氣取てヤツテヤろう ト是より淨瑠璃ぶれに成り  
 いよく此所向島花見の場△チイ〜そりやアまだ下の悉だ是から梅田へゆくのじやアね  
 へか〇違へねへ〇いよ〜是より梅田の神殿祭典の場始まり左様(三人)ツハ、〇さア  
 往ふ ト明幕の鳴物にて三人上手へ遣入る竹本連中の出がたりになる 上頃は明治の聖代  
 に唯一神道の教の道開けし伊代のは恵み普く及び天が下三千余方の同胞に残る方なく傳へ  
 んど勇む各社の教師達神の伊前に祭典の式も終りて一同が威儀を正しく座に直る ト大小  
 入り誂への鳴物に成り

知らせに付道具幕切て落す

本舞臺三間の間通し常足の二重梅田村墓前の掛り誂へあり爰に二重の真中に本莊宗武冠  
 裝束好の形にて座し上の方に村越鐵善同む冠裝束にて座し上の方に東宮千別同む誂

へにて座し夫より上の方へ福田鐵知麻生正守福田長之鳥帽子直垂にて座し下の方へ横尾信  
 守小幡鐵臣小木藤太郎本間正三の四人鳥帽子直垂にて座して居る

ト道具治る ト直に小鼓のましらひ

(本莊)光陰に脚守なく今年今月靈神の四十年の祭忌に當らせ玉ひ社中一同席につらるり祭  
 典の式も相濟み各々修苦勞に存ざる斯く賑々しく祭典を勤むる事に至りしも是神明の伊  
 らひと申乍ら一ツハ政府の賜の又二ツハ各々が長の年月盡力による處所靈神にも  
 満足に有つらんと思へハ嬉しき此祭典(村越)仰の如く舊幕府の頃にては禁止の法に候得ば  
 其流れを汲む者共ハ皆幾千の艱難を其身に經ざるものもなく(東宮)未熟ながらも大法を今  
 擔任なぞ身にあれば普く天下の蒼生を神の教の門に入れ誠の道に誘ふ爲め(鐵知)身に振掛  
 る法難の危ふき事も幾度の虎口を免れ今日の此祭典につらなる事は開明の伊代の伊傳(横  
 尾)身に過たる教導の職に列ある面目に北海道へ派出あせしが神の伊傳の尊と道譽つて  
 教の風に靡き(麻生)老若男女押なべて日々神前に集ひ來て悦びの鈴の聲高く自然と彌ふ修  
 身齊家誠に先師の伊功し(小幡)世に誠なしといひやす遊里近くに社を結べば聊に馴し働



其の誠の道風化なとも私しからぬ教の徳(長之)又某し昨日今に一社を預る身にしあれば先代主人が後生へ殘を詞を力とあし教導すも先師の賜(小木)彼の浮屠氏の枝葉く八宗九宗と別れたる例しにあらねと名々が各社を分つて布教なし津々浦々の未迄も(本間)開明謠ふ神道の教へに靡く禊の徳天の岩戸に鳴初し八聲の鳥と諸共に道の榮へハ万世不朽(村越)一同恐悦本莊を除き(皆々)至極に存し升る 上 各々祝辭を述べけれハ宗武後ろを顧り見て(本莊)今の盛りを見るに付け彦親子二代の彦丹情尊しといふも餘りあり 下 鳴物入詠への下座の合方 父眞鐵靈神にハ若年の頃よりして凡天下の蒼生が罪を重ねて根の國の苦惱に沈つむ有様を 上 不便と思しみるなハし 助けんものと御心を盡し玉ふも十有餘年(村越)仕へを辞して隱遁の御身となりて尙も又あらゆる諸道の奥義を探ぐり遂いに誠の大道の淵源に達し玉ひしかと 上 齢ひ傾たむくは年に 御子靈神にゆだね玉ひ彦身ハ事を止み玉ふ(東宮)又た靈神にハ其以前警亂の頃よりして其中に御成長ましく其の習ひ性と成りあまねく諸國をへんれきあし 上 千辛萬苦の功ありて 我皇國の御教へ唯一の奥義に徹し玉ひ(鐵知)尙ほも白川殿の門に入り司神の職の隙らかじめ其の式法を學び玉ひ儒道佛道

の本旨を探ぐり年月積もるかなんもの 上 其功ひなしからせして 茲に始めて神傳の中興祖先となり玉ふ(横尾)是迄一家執族の見捨る程の者の迄も教へを受けて學ぶ時ハ神明誠との道を辨せハ此門に入る人ハ 上 互ひに四海兄弟の 其名に恥ぬ水魚の交はり自づと調ふ一家の繁昌(麻生)かゝる尊き御教へなれと或ハ疑ひ或ハ嫉たと暗夜道路に埋伏なし師を失はんとするものあれば又小剣をふどころに 上 刺さんと謀るものありて 危ふき難をいくたびか免かれ玉ふも神の加護(小幡)其法難も度び重なり徳川政府の嫌疑にて勿体なくも彦自身にハ流罪の彦身とあり玉へを配所の月の影よりも 上 世に明らけき御心に 風化せられて島人も追ハ先師の門に入り(長之)邪正も分らぬ一孤島其風俗を一變して神徳の廣大あるをや、知らしめ玉ふ其折柄前代未聞の早魃に 上 彦身を捨て雨乞の 驗しハ見へて島人もいよハ信心肝に銘し(小木)今に至つて靈神の祭典を勤めお徳を慕ふ斯る母き大法の如何で虚しくなる可きや村越坂田の両師を始め 上 結びの者ハ力を合せ 又幾何の艱苦を嘗め相續ありし功顯ハれ(本間)今日の榮へを見る事も偏に神の彦加護と靈神二代の修難難殘し玉へる此大道頓て日本八十餘州 上 普く社會へ知らしめて 海外迄も押及せし

此大恩に報答なさん(本莊)此道おくば養生の(村越)罪を争か救ふべき(東宮)思ふても尙ほ餘りある(本莊)眞に先師の(皆々)は賜もの 与ら有難やと教員が敬ひ尋とも其處へト下手より社家一人出て來り(社家)只今坂田先生の御名代として野口安慶君は參詣にムリ升る(本莊)野口氏が見へられしとか早く是へ涉案内申せ(社家)ハッ 社家引返して遣入るキ待間程なく彼方より裝束正しく野口安慶ト下手より野口安慶烏帽子直垂にて出て來り宜しく平物屋に立身是と一處に社家付て出て後ろに扣へる(村越)野口氏にハよふこそその參詣(東宮)まぞく是へ(野口)今日の御祭典に間に合んど存ぜし處餘儀なき事故にて時刻の後れ先は各々今日は苦勞千万に存じ升る夫に付て拙者より兼て入置きたる兩齋神の神前へ日本舞奉納仕りたくは都合お伺ひ申す(本莊)其儀ハ兼て承知致すは都合次第にては斗らひおれ(野)然らば直様修行致さるでムリ升ふト社家に向ひ 支度宜くば始める様お通じ下され(社家)畏まり升たト社家下手へ這入る(野口)拙者ハ其内兩齋神へ拜禮の仕つらんト野口皆へ會釋して二重へ上り奥の墓前へ拜禮する事有其内本莊始め齋臺の皆へぞつと奥へ下つて宜しく居並ぶ野口ハぞつと上手へ少し前へ出て住ふ賑か成

る囀らの鳴物に成り下手より子役三人倭舞好の拵へにて出て來り二重具中へ宜しく並ぶ跡より長唄囀し連中羽織袴揃ひの形にて出て來り平舞臺下手に皆く床几に掛る知らせに付長唄に成り子役三人宜しく振事有て舞納る

知らせに付道具幕振落と

本舞臺一面隅田堤櫻の盛りを盡きたる道具幕

ト氷の音流行唄に成り相中の門中五人出て思ひく可笑みの臺詞所作等有て上手へ遣入る

知らせに付道具幕切て落と

本舞臺三間の間隅田堤掛茶やの模様宜しく所々櫻の盛り向ふ大川より向ふ川岸を見たる遠見の書割上下に清元常盤津の淨瑠璃臺是に太夫連中居並ぶ

茲に社中の男女五人揃ひの衣裳にて立掛り居て道具納まる

ト直に淨瑠璃にて此四人振事有て夫より花見の臺詞亘り夫より三階惣出社中思ひくの形にて出て賑か成る

所作事有て宜しく

打出し

百四十四

万世に薰梅かほる田神たのかみ垣がき 大尾

明治二十年十二月六日版權免許  
明治二十年十二月 日出版發兌

正價貳拾五錢

著者

東京府平民

川尻義祐

日本橋區通油町十四番地

出版人

東京府平民

高橋種

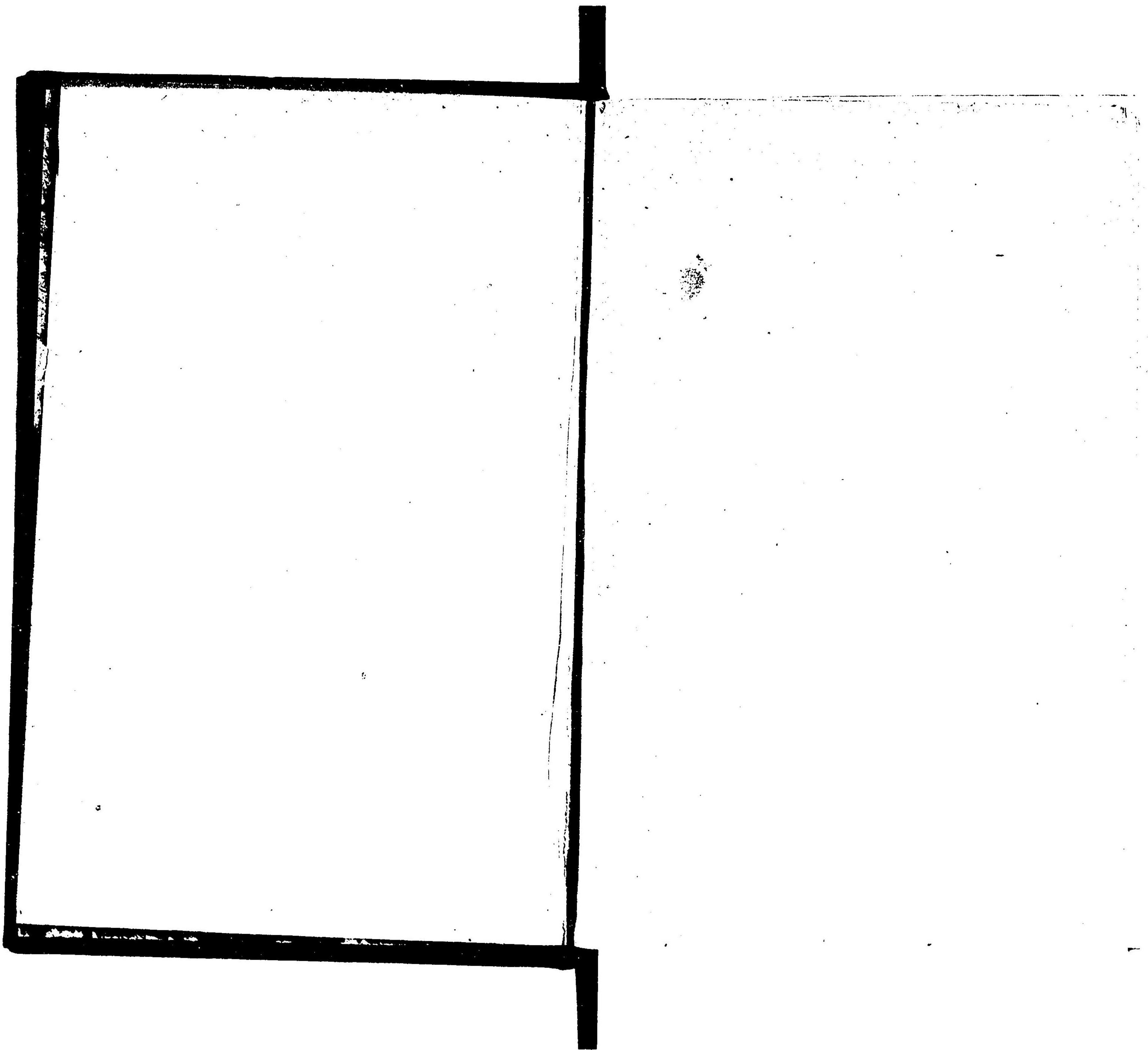
同區本石町一丁目廿六番地

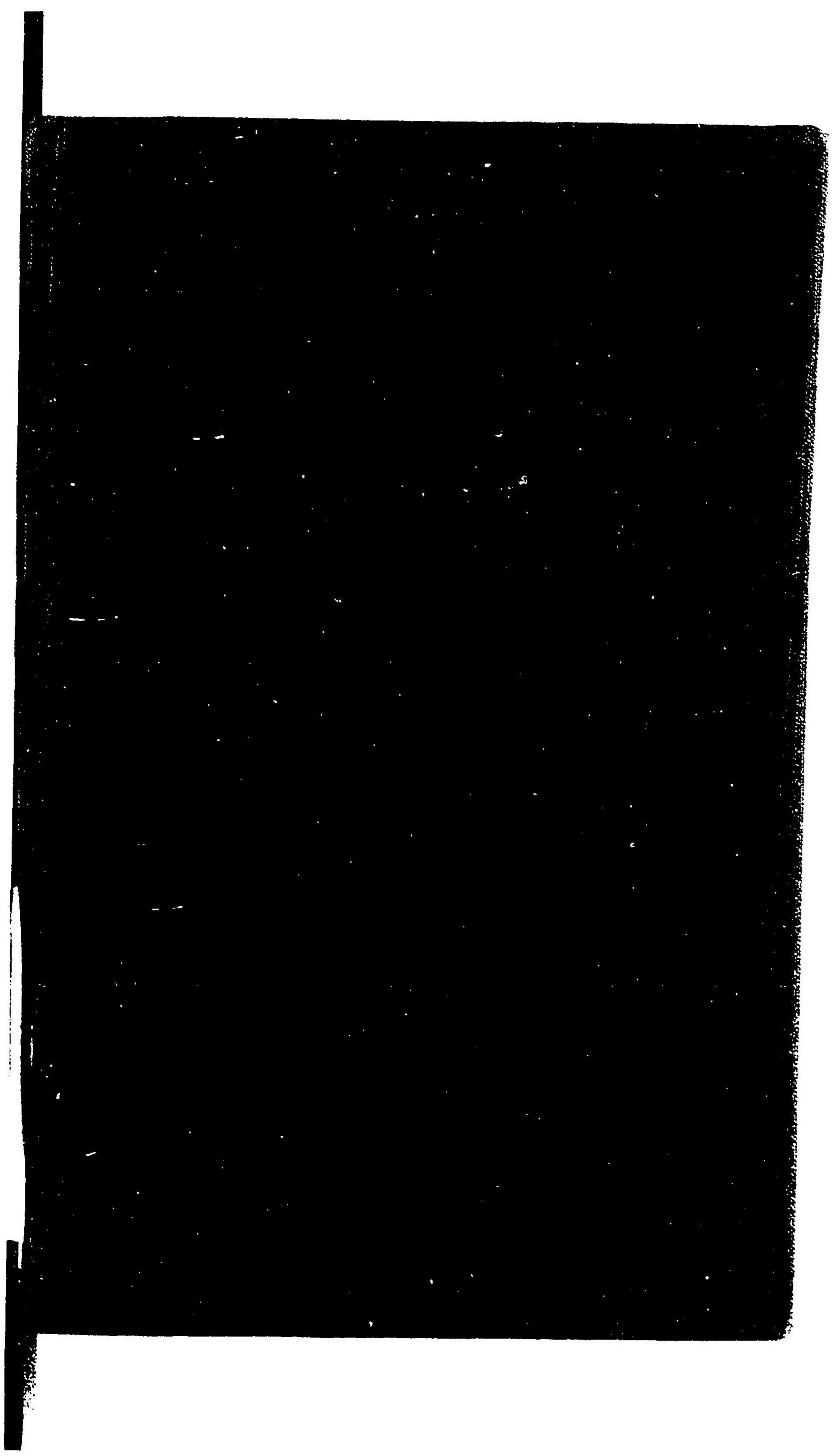
東京日本橋區本石町一丁目廿六番地

發兌元

新作正本出版元祖

鶴鳴堂





912.6

Ka957y

088931-000-9

912.6-Ka957y

万世薰梅田神垣

川尻 宝岑 / 著

M20

DBK-0116

